

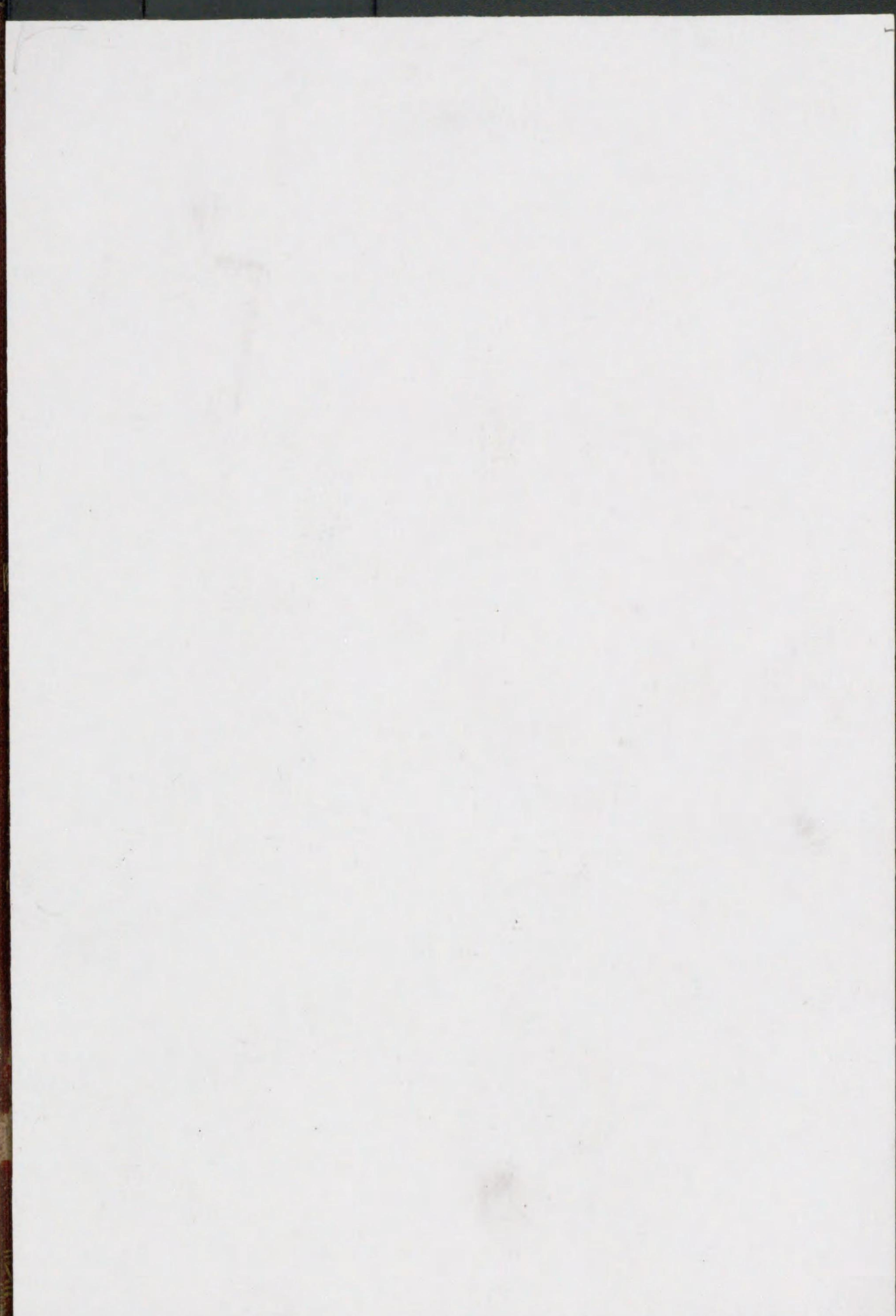
603-340



1200501531176

603

340



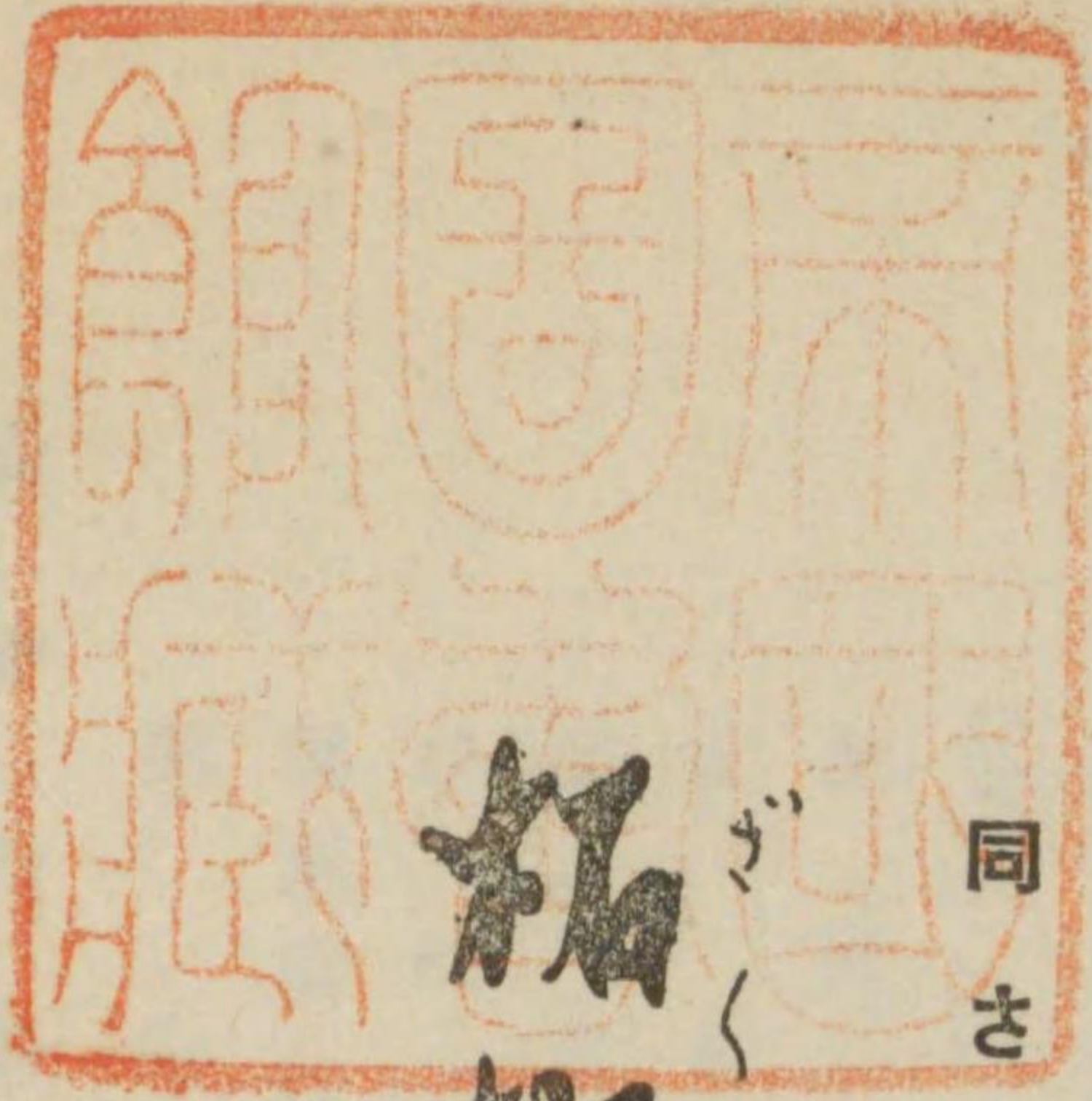
o. 11.24

275

片羊の榴柘

著彦豊川賀





賀川豊彦著

同さしる

松樹の半片

附『黄昏の道』『軽業師』

教文館出版部



603-340

柘榴の半片

暴風雨

みめぐみの蔭

警察署

激動の後

女車掌

宗教講演會

妹の脱出

蟹屋樓の主人

闇の力

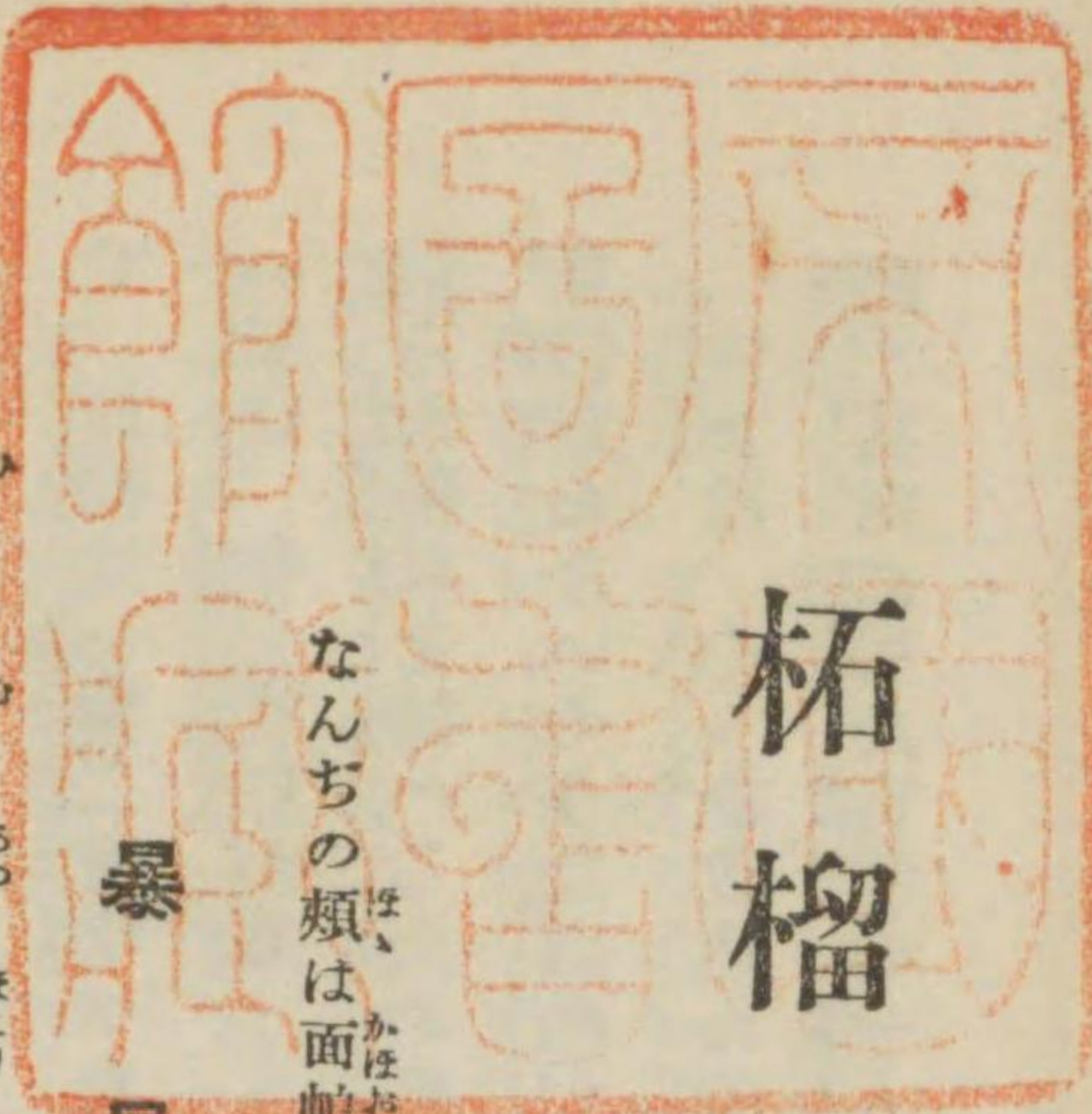
黄昏の道

輕業師

——裝幀 高島愛子氏——

目次

| | |
|--------|-----|
| 暴風雨 | 一 |
| みめぐみの蔭 | 一七 |
| 警察署 | 三〇 |
| 激動の後 | 四六 |
| 女車掌 | 六〇 |
| 宗教講演會 | 七〇 |
| 妹の脱出 | 八〇 |
| 蟹屋樓の主人 | 八八 |
| 闇の力 | 一一〇 |
| 黄昏の道 | 一二一 |
| 輕業師 | 一四七 |



柘榴の半片

賀川豊彦著

暴風雨

なんちの頬は面帽のうしろにありて柘榴の半片に似たり——舊約聖書雅歌第四章三節——

その日は、蒸し暑い埃の多い日であつた。震災記念日が、もう後二日に迫り、東京の各教會は震災記念傳道の準備に忙しかつた。分けても隅田川の河東、被服廠に近い諸教會では、震災記念の傳道にリーフレットやパンフレットを配布する準備に忙しかつた。震災後新見榮一が、震災救護事業として起したキリスト教産業青年會でも十萬枚のリーフレットを隅田川の東部——東京では江東方面と云はれてゐる——部分に配布しようと印刷の交渉や配布區域の計畫、配布者の手配りに會員の有志は目まぐるしい程であつた。

夏の暑い日が、どす黒い煙突の陰にかくれ、アイスクリーム賣りの、黄ばんだ聲が、四辻で吠えてゐた午後の七時半頃、もうその時は街には電燈が入り、業平町の木賃宿には幾千人かの自由

労働者が酒場を出たり這入つたりしてゐる眞最中であつた。たゞさへ暑苦しい中に、トタン屋根に蒸され、塵埃にまみれ、一日の勞苦に汗みどろになつた人々が、押し合ひへし合ひするから、本所労働街の夏の夕暮は、逆も耐らない程、淋しいまた暑苦しいものである。

この人混みと、塵埃を分けて一臺のタクシーが、本所松倉町のキリスト教産業青年會のバラツクの前にはたと止つた。そしてしとやかな廿歳前後の一人の娘が自動車の中から出て來た。彼女はやゝ慌て氣味で、投げ付けるやうに自動車賃を支拂ひ青年會の受付口へ走込んで行つた。

それでもしとやかな日本娘だけあつて、心は急いでゐても荒々しい言葉を使はず、受付の部屋で謄寫版を刷つてゐた二人の青年に、如何にも丁寧なお辭儀をした。そして、何處か羞んだ様子で、最初は一言二言吃つたが、彼女の會話は頗る要領を得てゐた。

「私は、今、吉原から……逃げて來たものですが、何處かに隠して下さらないでせうか……あとから大勢私を捕へるために……追つ馳けて來ますから、押入でも天井裏でも構ひませんから……見付からないやうな處に、すぐ隠れさせて下さいませんか」

彼女は、やゝ急ぎ込んで呼吸が苦しいと見え吐切れ吐切れにそれだけの事を窓口の下でいふた。其處に居た青年の一人は神戸橋本造船所のストライキに指導者として戦つた木村義吉と云ふ

新見と一緒に、震災當時から産業青年會を興した、しつかりした青年であつた。

「はい、よろしうございます、すぐ奥にお這入りなさいまし」

要領のいゝ木村は、彼女をすぐ奥に通し、彼自ら彼女の下駄を持ち、臺所を通抜け、裏の幼稚園の保母さんの寢てゐる寢室の押入の中に、彼女を隠してしまつた。そして、何知らぬ顔をして、また謄寫版を、もう一人の青年に助けて貰つて一生懸命に刷り續けた。

そこには何事も起らず、何の奇怪な事も無いかの如く、謄寫版のローラーは滑らかに這つて行つた。向ひの小學校のポブラの葉先は夕闇の深くなるにつれて、だん／＼繋ぎ合はされ、黄ばんだ電燈は刻一刻に光を加へた。

物凄い音を立て、二臺の自動車が産業青年會のバラツクの前に止つた。物凄い顔をした破戸漢が七人、開け放たれた青年會の入口へ雪辻れ込んで來た。

「こゝちや、こゝちや」

「此處に違ひねえ」

「新見は居るか！」

「黙つて這入つて行け！」

「きつと隠して居るに違ひねえ」

口々に勝手なことを喋り立てながら、まくり上げた袖口から恐ろしい刺青を見せた男が、ステッキを持つたり。木刀を持つたりして受付を覗き込んだ。

木村を助けてゐた脊の高い青年は、小西と云ふ無口な男であるが、如何にも平氣を装ふて、受付に出て行つた。彼は叮嚀にお辭儀をして靜かに尋ねた。

「何か御用でございませうか？」

小西も、新見榮一の同志の一人で、大震災と共に橋本造船所の職工を退め、震災救護の手傳ひに出て来た鍛冶工であつた。彼は新見を助けて、數年間、神戸葺合新川の破戸漢街に暮しただけあつて、破戸漢の取扱ひの呼吸をよく知つてゐた。彼はイエスキリストの山上の垂訓を實行しなへすれば、破戸漢に勝つことは何でもない、平常から新見のする事を、いつも見て居り、またその効果を知つてゐた。で、彼はわざと叮嚀に、壯重な言葉で、吉原の壯漢と應對するのであつた。

木村は、心の中で「來たな」と思つてゐたが、彼も、破戸漢を取扱ふ工夫をよく知つてゐたから、相も變らず平氣を装ふて、謄寫版のローラーを、いつも以上に落付いて轉ばせた。木村が餘

りに落着いてゐるものだから壯漢の連中は、そこに起つた數分間前の光景を看破することが出来なかつた。破戸漢の二人は、案内もせず玄關に續く大廣間に這入り込み、周圍をぐるぐると見廻つてゐた。

「お宅は新見榮一と云ふ人の經營してゐる青年會でしたなア」

角刈にした色艶のいゝ筒つぼの浴衣を着た男が、細い眼を睜つて小西に尋ねた。

「さやうでございませう」

「ちよつと訊きたいんですがね、此處へ吉原の娼妓が逃げて來なかつたでせうか？」

もう一人の男が、傍から口を切つた。彼は木刀を手に持ち、胸をはだけ、今にも噛み付くやうな顔をしてさういつた。

要領のいゝ小西は、そ知らぬ振りをしてこんな事をいつた。

「それは治療をお受けになる方ですか？ 労働者診療所は裏ですから、裏の方へお廻り下さらんでせうか？」

「さうすると、此處は新見榮一に關係ないんですか？」

「關係はあるんでございますけれども、診療所は裏でございませう。何分事業が澤山あるものです」

からみな所管が違つてゐるんでございます」

「おい、裏へ廻れ、裏へ廻れ！」

「おい、越後、おい河童さん、裏ぢや、裏ぢや」

どやどやと、七人の壯漢は、要領も得ないで裏に廻つて行つてしまつた。納屋と便所の間の路次を通り、労働者診療所の狭い玄關口に、七人の破戸漢が立並んだ。そこには夕刻からの診療を受けようと、十数人の労働者やお神さん達が、狭い玄關に一杯になつてゐた。その人混みの中を分けて、細目の角刈の男が受付に行つて訊いた。然し、そこでは話がつちんかんになつて、要領を得なかつた。

「吉原から此處へ娘が一人逃げて來なかつたでせうか？」

さうした質問に、滑稽を感じた受付子は、醫者の長島ドクトルの處へ訊くと、診察室へ彼を案内した。滑稽家の長島は、初めから馬鹿にして、

「おい君、何だつて？ うちには大勢娘が來るよ、今日も五六十人診察に來たが、誰がどれやら分りやしねえぢやないか、何のこつちやい、君」

「すると、此處は新見榮一と云ふあの耶蘇坊主に關係ないんですか？」

「關係はあるよ、關係はあるけれども、こゝは、無料診療所だから大勢世話するんでね、吉原の女も世話すれば、洲崎の女も世話するだらうし、誰がどれやら分らないよ。」

山羊髯を生やした、脊の高い色白の醫者は、破戸漢の連中を神戸でいつも扱ひ馴らして來たものだから、吉原の破戸漢など何とも思つてゐない。頭から茶化してかゝつて、眞面目に取扱つて呉れないので、流石の破戸漢も閉口した態たらくであつた。

「ぢやア、こゝへは來てゐないんですなア」

「誰がつて云ふんだね、君」

長島ドクトルは笑ひ乍ら、さう尋ね返した。

「いや、もう判りました、こちらは餘り狭くて人間の隠れる處もありませんなア」

「こらんの通りですよ。君は、誰を尋ねてるんです？」

「いや、あの新見榮一つて云ふ奴は、悪い奴で、うちの娼妓を誘惑しよつたんです。」

「新見榮一は自由廢業せよ、自由廢業せよつて云ふ手紙を、繁々送つて來るものですから、うちの抱えの娼妓がそれを眞に受けて、今日逃げて來たんです。たしか此處に來てゐると思ふんですが、あなたは知りませんか？」

「君、考へて見給へ、このせち辛い世の中に、人の血を絞つて生きて行かうつて云ふのが間違つてゐるぜ、君。君らも餘程改心して、君のうちに抱えてゐる娼妓を、みな解放してやり給へ。」
「すると、あなたも新見榮一の一味徒黨の者ですか？」
「まあそんなもんだね」

「今日、新見榮一は居りますか？」

「何處かへ行つただらう。彼はいつでも宗教講演に出てゐるから、今夜も留守だらう。——（看護婦に向ひ）——新見さんは今夜何處ぢや？」

「今夜は、大久保のルーテル教會でございませう」

「君、新見さん、今夜は、大久保のルーテル教會で講演してゐるよ、會ひたければ、そちらの方へ行き給へ」

押入に隠れた娘は、辛抱強く眞つ暗闇の中で坐つてゐた。表に聞き馴れた若竹樓の番頭の聲が聞えた時、彼女は堅く決心をした。次の瞬間には、托兒場の出入口に下駄の音が聞え壯漢の足音が床を踏鳴らして突入し、その次の瞬間には押入の板戸が容易に打開かれ、鷲の前の雀のやうに、彼女は遮二無二掴み出され、殺す目に遭はされ、また元の苦界に連れて歸られることを想像

して身體を震はせてゐた。

粗末な板戸に處々節穴があいてゐた。彼女は頸を長く伸ばして、その板戸から絶えず外を覗いた。四疊半の部屋の南側に飲められた硝子戸の向ふに酒屋の店燈が見えた。それには何の不思議もなく、別に變つた風景でもなかつた。保母さんは部屋に隣合つた臺所でことんことんいはせてゐた。夕餉の準備が出来らしい。若竹の番頭の聲が表に聞えた時、あまり怖ろしかつたので、彼女は布團の中へ潜り込むことにした。さうすればすぐ見付けられる心配がないとも思つた。それで彼女は髪を潰れることも埃のすることも氣にかけないで、押入の奥に全身を突込み頭から大布團を引被つた。ちーんと耳鳴りがする。頸筋へ悪魔の手が伸びてゐるやうに思はれてならぬ。恐ろしい幻想が次から次へ起つて来る。がらりと戸の開く音が聞えた。

「そら来た」

彼女は身を竦め、戦慄しながら顔を伏せた。然し足音はまた何處にか消えてしまつた。彼女は頸を差出し耳を澄まして表の様子を窺つた。押入の中は唯、暗黒が支配するのみであつて、何も見えなかつた。眼玉の關係でもあるか、青い玉や赤い玉が、闇の中を飛廻るのが見えた。然し暗室に這入ると、心の底の種々な事實が目の前に浮かび上つて来て、彼女を恐怖心で圍んだ。村の

こと、家のこと、吉原に賣られて来た時の吃驚した出来事、悲しい勤め、逃出した瞬間の歡びと恐怖、凡てが夢のやうであり、茲にかうして坐ることが、夢の夢であることを考へざるを得なかつた。

五分、十分、十五分と時間は容赦なく経つてしまつた。若竹の番頭の聲はその後も聞えなかつた。それで彼女は、あの聲が矢張り彼女の思違ひであつたのかも知れないと考へてみた。空氣が悪いので頭痛がして来た。それで彼女は、そつと押入の戸を内側から五寸ばかり開いて、いゝ空氣を吸はうと決心した。そこへ保母さんが臺所から這入つて来た。物に怯えた彼女は、それを若竹樓の番頭と思込んで、慌てゝ身體を奥の方へひつこめた。

『私ですよ、あなた御飯を召し上げませんか、大丈夫ですよ。そんなに心配しなくとも、此處に居ることを誰も知りやしませんよ。別に何も無いけれども少しばかり炊きましたから、私と一緒に御飯召し上げ』

『はい、ありがたうございます。私も頂きたくないんです。少し頭痛がしまして食べられさうもないんです』

彼女は正直にほんとのことをいつた。小さい食卓が四疊半の眞中に運ばれ、その上に茶碗と皿

と箸がきれいに並べられた。趣味の高い保母さんは、隅の机の上にあつた一輪挿の花瓶まで食卓の上へ運んで来た。それを押入の中から見てゐた彼女は、バラツクに住んでもこんな小綺麗に部屋を片付けるなら、吉原の立派な座敷より遙かに美しいと思つた。萬事がきちんと整理されてゐた。そして女でなければ出来ないやうな手の籠つた裝飾が、部屋のあちらこちらに施されてあつた。カーテンも日本手拭で出来てゐたが、それが何ともいへない風流なものであつた。レースのテーブルクロス、編まれた花瓶敷、電燈の傘の周圍に下つたマクラメ編みの手際のいゝ裝飾、彼女の眼には凡てが物珍らしく、また小綺麗に見えた。保母さんと云ふ人は、別に美しい人ではなかつた。色の浅黒い頬骨の高い、細眼の女で、明らかに東京から南の人であることがその骨相で察せられた。年はまだ二十四、五を越えてゐないやうであつたが、何處となしにはきくした處があつて、頼もしく思はれた。

『あなた、もう大丈夫よ、先刻吉原から大勢あなたを探しに来たやうでしたけれども、もう歸つて行きましたよ』

『ほんとですか？ほんとに？』

彼女は疝高い聲でさう尋ねた。

「ほんとよ、嘘なんか云ふもんですか。あなたも安心して夕御飯を御食べなさいよ………だ
けれども、念のために、私、見てあげませう」

さういつて彼女は表の方へ出て行つた。

これより先、労働者診療所で馬鹿にされた吉原の一行は、少々癢に觸つたと見えて、産業青年
會の本館にとつて返したが、あまり大勢人があちらにも、此方にも居るのに全く驚いてしまつた
様子だつた。

吉原から娼妓を探しに來たといふ噂が、ばつと近所に散つたものと見えて——それは労働者診
療所から歸へつた患者がいひ振らしたらしい。——大勢の見物人が何處からともなく押寄せ來
た。そして表の自動車の周圍は瞬く中に黒山のやうになつてしまつた。

「自由廢業した女を擱へに來たんだとさ」

「逃げた女郎を擱へて歸るのは酷いや」

「そんな非人道的な奴は殺して了へ！」

自動車を圍んで、大勢の人々が口々にこんな事を喋り立てた。その中でも近くの木賃宿から出
て來た自由労働者の一群が最も元氣だつた。

それと氣付いた吉原の連中は體裁が悪いと見えて、本館の裏口からそつと食堂の方に這入り、
木村に部屋を探してもいゝかと叮嚀に尋ねた。木村は平氣な顔をして

「いゝですとも、いゝですとも、私共は解放的ですから、御自由にお調べ下さつて結構なんで
す」

とぼけた風をして、彼はそんな答をした。其處で七人の壯漢は本館の部屋といふ部屋を隈なく
探して廻つた。勿論押入のある部屋は一つも無く、人間の隠れる處は何處にも無かつたので、大
講堂に落合つた七人の壯漢は互ひに顔を見合せて、見當違ひをした様子だつた。

「どうしたい？ 居りやしねえぢやないか」

角刈の男がさう云つた。

「だから俺がいつたぢやないか、新見の奴、こんな處に女を隠しておく筈はないつて、何處かに
隠して居るに違ひねえつて」

涼しさうな帷子を着た色の小白い若者がさういつた。

「俺はもう一度見て來る」

角刈の男はさういひ乍らまた南側に並んだ三つの部屋と、臺所に隣合つてゐる一つの部屋をぐ

るぐる見廻つて来た。

木村はそ知らぬ顔をして、また謄寫版の傍に歸り、彼等をうつちやらかして置いた。帷子の男が大聲で叫んだ。

「歸ろ、歸ろ、こんな處で愚圖々々しとつたつて仕方がないや。手を廻して他の方を調べることにしようぢやないか」

「さうでもするより仕方がないなア」

四十格好の眼のどんよりした男が合槌を打つた。

表の見物人はだんだん數を増して行つた。中には講堂まで覗きに来るものが見えた。それが五人殖え、十人殖え玄關は人で埋まつてしまつた。その爲に、吉原から来た破戸漢連中は昂奮して、落着いて探す緒口を訊き質す勇氣も失つてしまつたやうだつた。

「諦めようか」

角刈の男がさういつた。そして仲間には物もいはないで、群衆を分けて表に出て行つてしまつた。残された者も何だか氣極が悪さうな顔をして、木村には挨拶もしないで表に出てしまつた。やがて、自動車爆音を立て乍ら、西の方に消えた。托兒場の保母が表に廻つて来た時は恰度、

三ツ目通の角を北に廻らうとする時だつた。大勢の見物人は、まだ街上に立つてゐた。

「馬鹿な奴が、一旦逃げた女を掴へようたつて、今時掴まるやうな馬鹿な女があるものか、馬鹿野郎！」

印半纏を着た仕事から歸つたばかりの鮫鯨仲仕であらう、ほろ酔ひ加減で自動車の連中を罵つた。物好きな連中のなかには、わざわざ受付までやつて来て、

「吉原から娼妓が逃げて来たつていふのはほんとですか？」

と叮嚀に尋ねる者も二三人あつた。それに對して用心のいゝ木村は笑つて別に答へなかつた。「来たは来たんですがね、連れて行つたんです。」

これ以上のことを木村は答へなかつた。その中に群衆は、二人去り三人去り、街路は全く靜かになつた。保母の福原さんは人氣の無くなつたのを見届けて、受付の處にやつて来た。

「もう大丈夫でせうね」

彼女がさう云つてにこゝした。

「あの方は、破戸漢が恐いと云つて夕御飯も召上らないんですよ。もう大丈夫でせうね」

「もう大丈夫でせう。あの連中もあまり大勢人が出て来たので、たまげちやつたんでせう。もう

来やしませんよ」

「あの方のお名前は何て云ふんですの？」

「充分知らないんですよ。手紙は度々來てるんですがね、調べてみませう。手紙が何處かに入つてゐたやうでした。何でも最近一ヶ月位の間に、手紙を三通か四通か送つて來てはゐるんです。手紙にはなか／＼しつかりしたことを書いてゐますよ。近く出て來ると思つてゐたんです……」

……あゝ、さうさう、山口あきか、山口あさか、何でも山口と云ふ苗字だつたと思ひます。」

木村は叮嚀にさう答へた。

「ではまんざら出し抜けて飛込んで來た譯でもないんですね」

保姆の福原は木村の顔を見詰め乍ら折返し尋ねた。

「全くさうなんです。震災記念日までは是非出て行くからと云ふこの前の手紙で、實はこちらも心待ちにしてゐたんです。手紙の文面で見ると、なか／＼しつかりした女のやうですよ。今時の娼妓もなか／＼解つて來ましたからね。昔のやうな譯にはいきませんよ。全く時代の思潮といふのは恐ろしいものです」

外はもうとつぷり暗くなつて、室内を照らす電燈のみが、輝かしく見えた。

「然し、幼稚園の方を探されたら大變でしたね、あすこには氣が付かなかつたやうですね。まあ仕合せでした。」

みめぐみの蔭

「此處に居るとやはり危いですから、二三日は少くとも、山の手方面に隠れてくれませぬか」

眞夏でも、きちんとオーヴァンシャツを着けてゐる木村は、叮嚀に座敷の障子を開けるなりいつた。幼稚園の先生もそれに合槌を打つた。

「何處がいゝでせうね」

「大久保の婦人ホームがいゝと思ふんです。今のさき電話を掛けたんですが、すぐにでも來ていゝと云ふことです」

話はすぐ纏つた。で、三人は裏口から、わざと狭い松倉町二丁目目の錢湯の前を南に出て、三ツ目の通でタクシーを拾ふことにした。なか／＼自動車が來ない。來る人來る人がみな破戸漢に見える。西側に夜店がずらりと並んでゐる。なか／＼景氣がいゝ。

「私は東京に來て、もうかれこれ一年近くなりますけれども、私は吉原以外に出たのは今夜が初

めてですから、何處が何處やら、さつぱり見當が付かないんでございますよ」

「東京は広いですからね」

脊の低い保婦さんは、彼女の顔を見上げるやうにして云ふた。

「この邊りはいつも大賑ひなんですか？」

「はア、いつもかうなんですよ、夏でも冬でも、雨さへ降らなければ、夜店はいつもあるんです。不景氣不景氣ついても、人間つていふものは食つて行けるものですね」

「私に何か適當な仕事があるでせうか？」

「そんな事心配しなくともいゝですよ」

「私はね、少し稼いで、妹を助けてやり度いんです」

「妹つて？ あなたの妹が？ 何處にいらつしやるの？」

「矢張り、吉原に賣られて来てゐるんです……私は乗合自動車の運轉手でもいゝ、明日からでも稼いで、一錢でも多くお金を貯めて、妹を助けなければ、人間になつたやうな氣がしませんわ」
フォードのがたたく自動車が一臺三人の前に止まつた。みんなその車に乗込んだ。
「大久保へやつてくれ」

と木村がいつた。

「遠いですがなあ、少し奮發してくれませぬか」

さういつて、發車しようとはしなかつた。しようことなしに木村は急ぐことを條件に、奮發することを約束した。車は既橋を西に、本郷臺にすぐ駆け上り、飯田町から牛込に抜け、抜辨天から大久保迄、二十分足らずの中に走つてしまつた。自動車の走つてゐる間、木村は娘の身の上を種々聞かされて、非常に感心した。娼妓に賣られて来ても、こんなにも純無垢であり得られるかと云ふことを不思議に思ふほどであつた。彼女は親二人娘二人の家に生れたが、父が病身で百姓も充分出来ないために、とうとう二人しかない娘を二人とも吉原に賣つてしまはなければならぬことになつたと云ふことを、重い唇からぼつりぼつり話するのであつた。

大久保百人町の婦人矯風會は、もと活動寫眞のスタジオがあつた處とかで、家の間取などは實に堂々たるものであつた。木村は屢々來たことがあるのでよく知つてゐたが、幼稚園の保婦さんと新來のお客様は、もぢくしてゐた。そこへ出て來たのが、有名な江藤北野女史であつた。震災當時から木村と一緒に働いた關係もあつたので、親しくまたぞんざいに歓迎した。

「随分お早かつたのね、この方ですか？ さあどうぞお上り、裏が開いてゐますからね、風呂に

でも這入つてゆつくり寝て頂戴。木村さん、あなたは今夜泊つて行つてもいいでせう？九州から甥も來てるのですよ。あなたも知つてるでせう。震災當時よく手傳つてくれたあの甥です』

江藤女史は維新の革命家江藤新平の姪で、何處となく豪傑らしい風貌がその肩間のあたりに表れてゐた。實際、木村もよく人にいつてゐることだが、江藤女史が男に生れてゐたら、今頃は濱口雄幸、床次竹二郎に行かない迄も永井柳太郎位に漕ぎ付け得る人物であるといつて差支ない程しつかりしてゐた。その反對に木村には、何處の世話女房を尋ねても、それ程叮嚀に、それ以上懇慫に人を取扱ふ者がゐない程、重々しさとよかさがあつた。實際人間の性格と云ふものは妙なもので、虎や豹の斑紋が變へられない如くに性格の輪廓は殆ど變革し得られないものらしい。ある人の性格は陽性に造られ、ある人の性格は陰性に生み付けられてゐる。女に生れ出て男のやうな性格を持ち、男に生れてゐて女のやうな性格を持つてゐる者が尠くない。そして或人の性格は中性化し、或人の性格は全く職業化してゐる。

氣さくな江藤女史は二階の六疊の間に一行を連れて行つた。そこは南向きの風通しのよい、まことに涼しい部屋である。

『今晚はゆつくりおやすみなさいまし、風通しのいい、風邪ひく位涼しい處ですからよくおやすみ下さいまし』

江藤女史は幼稚園の保姆さんを捉へて、またこんな事を云つた。

『あなたも泊つて行つていゝんでせう？この娘さんも淋しいだらうから泊つて行つて上げなさい』

親分氣質の江藤女史は伴隨院長兵衛のやうな氣持で、皆の者を抱え込まねばおかないやうなゆとりを示して、みんなに泊つて行け、泊つて行けと勧めるのであつた。

翌日、彼女は夜明前に起出た。いや、彼女はその晩一睡も出來なかつたので、氣を紛らすために早く起き出たのであつた。見晴とては別によくはなかつたが、家の建込んだ吉原など、違つて庭も廣いし、空氣も澄んでゐる加減か、夜明前の光線が青色に見え、肺の奥にまで浸み込んで來る空氣が、如何にも澄み切つたやうに感じられた。昨夜遅く、産業青年會の木村さんも保姆さんも歸つてしまひ部屋に一人残された彼女は、またも吉原の破戸漢が追驅けて來はしまいかと思つて、若竹樓の番頭の聲が夜通し耳に聞えるやうに思へてならなかつた。財布の底にはたつた一圓三十七錢しか残つてゐなかつた。それだけの金で、秋田縣の横手まで勿論歸ることは出來ない。それにまだ若竹樓に残つてゐる妹のことが氣に懸つてならない。借金を踏倒した爲に、どん

な難題を田舎の両親に云ふて行くかも知れないし、樓主が手を廻して、警察を動かさし、いつ何時彼女を、苦界に連れ歸らないことも保証し得ない。それから僅か一年許りの間に嘗めた苦い経験、悪魔と情慾の横行、金銭と情慾の奴隷、神に見放された地獄の悲しさ、善い人間になりたい自分の念願、さうしてもう一生その望の帆綱の切れた浮世の荒波、次から次へ、彼女の胸は搔亂れて行つた。庭には美しい紫色のパンジーが咲亂れ、垣根にはまばらに蒔かれた朝顔も咲いてゐた。それらの花が美しいと思はないではないけれども、落着かない彼女の胸には、世界がどれだけ美しくあつても、自分とは少しも關係がないと云ふやうな胸の底の動搖のために、この上もなく不安な空気に包まれてゐた。いゝ處に來たとは思ふけれども、獨りぼつちで居ることが如何にも淋しくてならない。顔を洗ひに行き度いけれども、家が廣い爲に、何處をどう廻つて行つていか判らない。まだみんなよく寝てゐる。江藤先生の部屋も何處か判らない。屋敷の中に家が四軒も五軒も建つてゐるらしい。助けて貰ふのはいゝけれども、あまり大きな處に助けて貰ふと窮屈過ぎる。そんな事も彼女は考へてみた。秋田縣の田舎で夏の朝早くから炊事の手傳をしたり、野良仕事の手傳に出た習慣から思ふと町の人は朝寝坊のやうに考へられる。彼女は、硝子戸の入つた椽側で、ぼんやり三十分間位庭を眺め乍ら立つてゐた。その中に誰か起きるだらうと、階下

に物音のするのを待つてゐた。雀が軒先の樋の中で、愉快さうに轉つてゐる。それが羨ましくてならない。「一日でもいゝ、一時間でもいゝ、いや五分間でもいゝ、あんな身軽な身體になつて、狭い處を自由に飛廻り、きものゝ心配や食物の心配をしないで、狭い樋の中で、ちいぢくちいぢく轉ることが出来るなら、どんなに暢氣だらう。勿論、雀の世界には遊廓はないだらうし、破戸漢は居らないだらう。賣られて來る娘も居なければ、逃出す娼妓を掴へに來る警官も居らないだらう。よく芝居で、狐が人間に化ける眞似をするが、一時間でも十分でもよい、何かの術を使ふて雀に化ける工夫はないかしら、さうすれば、秋田の田舎まで飛んで歸ることが出来るだらうに……」美しい紫パンジーから視線を雀に移して、彼女はそんな空想に耽つてゐた。階下に水道の活栓の開かれた物音がする。硝子戸が開いた。竹箒が地上にあたる音がする。炊事番が起きたらしい。軒に隠れてまだその人の姿が見えない。「あの物音を頼りに階下に降りて行けば、顔を洗ふ處があるだらう。」そんなことを考へ乍ら、彼女は、昨夜上つて來た階段をまた降りて、廊下傳ひに水の音の聞える炊事場までやつてきた。彼女は腰を低くし、高等小學校の作法の時間に教はつた通り、物靜かに炊事場の硝子障子を開き

『お早うございます』

さういつて、炊事婦にお辭儀をした。五十に近い何處の奥様かと思はれさうな上品な炊事婦は澄み切つた、美しい聲で、やゝ吃驚したらしい口調で答へた。

「おや、随分お早いですね昨夜はよくお休みになれましたか？」

炊事婦は門齒二枚を金で包んでゐる處を見ると、相當に教養のある婦人らしい。言葉も上品で吉原あたりに居る女中と随分違つてゐるので、彼女は、耶穌教の人は、みんなこんなに教育があるのかと思つて、何だか自分の無學であることを恥かしく思はれた。

「はい、何だか気が落着きませぬで、よくは寝ませんでした」

彼女は、嘘をいはないで、ほんとの事をいふた。そして彼女は更に附加へた。

「何か御用があれば手傳はせて下さらないでせうか。ぼんやり部屋に坐つてゐるのも詰りませんから、庭先を掃くなり、籠の下を焚き付けるなり、何でもいたしますから……」

さういふなり彼女は、炊事場の隅まで小走りに出て行き、そこにあつた下駄を引掛けて裏口に出て、炊事婦が投棄してあつた箒を取上げ、裏庭を掃いて行つた。

その殊勝な心掛に、炊事婦は非常に感じたと思へて、

「ちよつとあなた、結構なんでございますよ」

さういつて、竹箒を取上げに來た。然し彼女は持つた箒を手から離さなかつた。で、炊事婦は、すぐ臺所に引返し、籠の下に瓦斯に點火した。彼女は五分間位も裏庭を掃いてゐただらうか、塵取にゴミを集め、裏口のごみ箱に入れ、箒をその傍に立掛け、裏口に這入つて行かうとする瞬間、葱の葉を切つてゐた炊事婦は、

「あなたは、もうお顔をお洗ひになりましたか？」

と、にこ／＼笑ひ乍ら尋ねてくれた。

「いゝえ、まだでございますの、慌てゝ出て來たものでございますから、手拭も楊子も何も持たないでお世話になつたものですから」

そこまでいふと、氣のきいた炊事婦は、自分の部屋であらう、奥まつた三疊間から、まだ使はない日本手拭一つと、自分の爲に買つて置いたものだらう、セルロイドのブラシ一本と、ライオン齒磨一袋を取出して來た。そして彼女にそれを渡し乍ら、

「貰ひ物がございますから、御用にお立てしませう。粗末なものですけれどお使ひ下さいませんか」

といつた、その真心の籠つた言葉に彼女は非常に感じた。

「こんな立派なものを拜借願つてもよろしいんですか？」
 「差上げますから、御自由にお使ひ下さいまし」
 彼女は心づけをしなければ動かない、吉原の女中と違つて、耶蘇教の女中は膽玉が大きいと吃驚してしまつた。人品は卑しくなく、言葉用ひははつきりしてゐるし、教育は相當に受けてゐるらしく見えるので彼女はつい訊いてみる氣になつた。



「あなたはもうこちら様で長くお働きなんですか？」
 「いゝえ、まだ一年半かそこらです」
 「お大抵ぢやありませんね、大

勢様なんでございませう！」

「さうですね、多い時で二十人位ですから、何でもありやしません。それに少しお客様が大勢でしたらば、皆様が手傳つて下さいますから充分間に合ひます」

さういひながら炊事婦はまた、流し場の刻み残した葱をさき／＼切り始めた。彼女はライオンの袋を切り、透明な橙色の齒ブラシに粉をつけて、靜かに葱を刻んでゐる炊事婦を傍から見てゐた。炊事婦の鼻のつくりと云ひ、唇の格好と云ひ、髪の結び具合、着物の着こなし、紐で締めつけてゐる帯の具合、黒つばい單衣の木綿着であつたけれども、如何にも美しく釣合ひがとれてゐて、小説に讀む、テルテ姫が炊事場で働いてゐるやうに考へられた。少しも勞働を厭がつてゐるやうに見えず、樂しげに臺所仕事を片付けてゐる様子が、流し場の奇麗さつぱりと片付いてゐる按配で、よく判つた。そこは普通の家なら悪臭が洩れたり、いろ／＼ごた付いて長く立ち止つて見てゐることも厭だと思ふ程の處であるに拘らず、表座敷より却つてよく片付き、何だか明るい氣持がするので、神々しい印象さへ與へられるのであつた。

「——成程、かういふやうな生活を宗教生活と云ふのであらう。女中奉公でもこんなに愉快に樂しく送れば、何の苦痛もないだらうし臺所を通して、みんなを喜ばしてあげることが出来る」

こんな事を彼女は楊子を使ひ乍ら、つく／＼考へたのだつた。炊事婦は、葱を切り終へるとすぐ、裏口に出て行き、洗面器と馬穴とを持つて歸つて來た。そして水道の活栓を開いて馬穴を臺にしてエナメルの洗面器を置き、美しい澄み切つた水を溢れるばかり、それに満たしてくれた。

『お客様のために、二階にも洗面室がございます。けれどもまあ此處でお洗ひなさいまし』

さう心易く打解けて持てなしてくれた。彼女は顔を洗ひ乍ら、何故炊事婦がそんなに親切であるのかをきゝたかつた。そしてまた何故こんな婦人が女中奉公をしなければならなくなつたかを訊き質しかつた。炊事婦は裏へ廻つて、漬物部屋から茶葉や大根の漬けたものを取り出してきた。

その間に彼女は、顔を洗つて手拭を疊み、炊事場の板場の傍に叮嚀に置き、土間に突つ立つた儘物思ひに洗んでゐた。それを見た炊事婦はいつた。

『随分御退屈でせう。みんな起きるのが遅いですからね』

『いつになればみんなお起きになるんです？』

『定は夏冬通して朝六時なんです。そして六時十五分から禮拜があつて、六時半から朝飯を頂くのです。』

『用事がないつていふものは随分退屈なものでございますね。私は今日にでもすぐ何處かで仕事

の口を見付けたいのですが、すぐございませうかね？』

『さあ、不景氣ですからね』

さういつてゐる處へ表から呼鈴が鳴つた。炊事婦は愛想よく、

『ちよつと失禮』

さういひ残して玄關へ飛出して行つた。そして慌しく歸つてきた。

『ちよつと、あなたは山口あきつて云はれるのですか？』

自分の名を呼ばれて、彼女は慄え上つてしまつた。『さてはまた吉原から追つ手が來たのであらう、えい、まゝよ』彼女は度胸をきめてそこに突立つてゐた。

『表に巡査が來ましてね、あなたに午前九時迄に、是非警察まで出て來いと、云ふて歸られましたよ。先生に申し上げましたら、江藤先生は、大丈夫、大丈夫つて云つて居られましたよ。警察も随分判らないですね』

さういつて炊事婦は彼女を慰めてくれた。明るくなつてゐた彼女の氣持がまた暗くなつてしまつた。彼女は板間に腰を下して、袂で顔を覆ひ、不安と焦慮と、疑惑と、社會の不人情に對する不満とに充たされて、そのまゝ其處に竦んでしまつた。勿論彼女は泣いてゐた。

警 察 署

受付の巡査は紙でこよりを作つてゐた。その隣の巡査は書き物をしてゐた。江藤女史が山口あきを伴つて、警察の受付に顔を出した瞬間にも、巡査は素知らぬ顔をしてこよりを作る手を止めなかつた。

「私は婦人矯風會のものですが、今朝ほどお呼出しになりましたので、出頭致しましたが、何か御用でせうか？」

「一寸待つて下さい」

さういつて巡査は掛りの警部に伺ひを立てに行つた。すぐ歸つて來た受付の巡査は、機械のやうに立つたまゝ、大聲でいふた。

「應接室へ這入つて下さい。」

二人はセメントの上を歩いて、應接室に這入つた。そこは署長室に隣つた比較的裝飾のゆきとゞいた部屋であつた。

「あなたね、警察の人にね、金が拂へるかと尋ねられても拂へると言つちやいけませんよ。お金

は拂はなくていいんだから心配しなくていいんですよ。ほんとよ。」

江藤女史はそこに警官かゝなかつたので、あきがあわてゝとてつもないことをいひ出しては困ると思つたものだから、警官にいふべきことを、色々傳授した。

「しかし先生、拂へるだけのことは拂ひたいと思つてゐるのです。」

「その心掛だけは結構です。」

底力のある聲で江藤女史はいつた。

「だけどね、日本の法律では、醜業の目的で貸した金は拂はなくてもよいことになつてゐるんですよ。そんな心配なんか、少しもいらぬんですよ。」

おあきはだまつてうなづいた。其所へ警部が這入つて來た。署長かと思つて二人は恭々しくおちぎをした。然し名刺を受取つてみると、その人は司法主任であつた。彼はいきなり江藤女史に尋ねた。

「此女が新吉原の若竹樓のかゝへですか？」

「はいさうです。」

「日本堤署から電話があつて、取押へ方を依頼して來たのですが、本人はどういふ理由で樓主の

所を無案内で抜けて出たのでせうか」

「勿論自由廢業が目的です。」

「借金はどうするつもりなんでせうか？」

「借金は借金です。自由廢業は自由廢業です。」

「さうでせうけれども、先方ぢやそれでは一寸困るから、此女を一旦樓主に返して呉れといつて来てゐますが、本人は歸る意志はありませんか？」

「どうか本人に聞いてみて下さい」

警官はおあきに向つて尋ねた。

「おまへは、もう歸へる氣はないのか？」

「少しもごさいません。」

「ぢや借金はどうするんか？」

「……………」

沈黙がしばらく続いた。

「ではかうしませう。あなたは先づ引上げて呉れませんか。此妓だけ置いて。」

司法主任は明かにおあきを江藤女史と分離させて、樓主に渡す心づもりであるらしい。それと氣付いた江藤女史は、しごく落付いた口調でいふた。

「いゝえ、私は一人でよう歸りません。歸れとおつしやるなら、この妓と一緒にかへります。此子は自由廢業の目的で私の家へ頼つて来たのですから、今更警察署にお渡しすることは出来ません。私は今迄度々此手で失敗してゐるのですから、もうその手は食ひません。」

男まさりの江藤女史は、腕の所で切れてゐる夏向のドレスを着てゐたが、兩手を机の上に差し伸べ、元氣よく司法主任に肉迫した。さすがの司法主任も、江藤女史の元氣のよいには驚いてしまつた。

「困りましたなあ？」

「お困りになるのは、あなたの方ではなくて、此方の方です。わざ／＼自由廢業に來た娘を再び樓主につれもどされたんでは、可愛相な娘を救ふことが出来ないぢやありませんか。太政官の省令を見ても、醜業の目的で貸し付けた金は、返さなくてもよいと書いてあるではありませんか？自由廢業したいと言つて逃げて來たものは、そのまゝ逃してやつたら、いゝぢやありませんか？」

署長は、近頃變つて來たばかりで、この地方の事情には頗る疎い人であつた。その上、去年や

つと帝大を出て高等文官試験にパスし、警察の事務にたづさはつてから間もなかつた。

江藤女史は暫く彼の顔を見つめたが、如何にも警察官に不似合な書生つぽ上りの顔付をしてゐた。口髭を生やさなければ威厳がないと考へたか、顎髭まで生やしてゐたが、それが如何にも芝居染みて多少滑稽にも見えた。髪はフランス刈で、外交官にでもすれば似合ひさうであつた。

江藤女史はかうした仕事を交渉することに馴れてゐるだけに、別に憶する處もなく、一言葉の挨拶の済んだ後おあきを顧ていふた。

「署長さん、こちらの司法主任の方は、この妓を吉原に送歸さうといふお考ですが、どうも私はそれに賛成することは出来ませんから、自由廢業したものとしてお取扱ひを願ひたいのですがどうでせうか」

「借金はどうしようつていふんですか？」

金ぶちの眼鏡の奥に瞳を据えて署長は苦り切つてゐた。その態度に、江藤女史はこの青年署長が、自由廢業に同情がないことをすぐ見てとつた。

「自由廢業をして悪いといふ法律は無いのですが、借りた金は是非後始末をつけて出ないと、他の多くの娼妓もそれに見倣ひますからなア」

その言葉がぐつと癢に觸つた江藤女史は心持ち椅子から乗り出して、署長の瞳を疑視めた。

「他の娼妓がみな見倣つて遊廓が、からつぽになれば、その時程日本に幸な時はないぢやありませんか。」

その大膽な言葉に署長はからからつと苦笑ひした。

「クリスチャンはすぐ、そんな事をいふから不可んですよ。人間の本能は、さうあなた方が考へられるやうに、瞬間的によくなるものぢやありませんからなア。却つて公娼制度などが在ることによつて強姦の數などが減つてゐるんです。まあ世界に娼妓の無くなる時はないでせう。」

眉毛を微動もさせないで、冷やかに署長は江藤女史を見つめた。そして、彼の落着振りを示す爲かポケットから敷島をとり出して、それを燻らし始めた。

「人間の性質は悪ですからなア。偽善の皮を被つて、自由廢業などやらした處で何の役にも立ちやしませんよ。」

江藤女史はその言葉に沈黙を守つてゐることが出来なかつた。

「その言葉は何ですか、日本の官吏として言明せられるのですか。あなたは太政官の布告をどういふ風に考へていらつしやるのですか。あの布告はもう無効になつたんですか。」



口の中に溜めた煙を、一つ氣に喉から吐出して、署長は、窓の方に顔をそむけた。

「何アに、そんな舊いことを引張り出されちやア、法律が泣きますよ。明治時代は明治時代です。今日は今日です。あなたのやうに夢みるやうな事をいつて居れば、法律も警察も要らないんです。自由廢業を口にして、金儲けをしてゐる者が大勢居りますからなア。社會も様々ですよ。今の人間が根本的に生れ變らなければ、世界はよくなるもんぢやありません。世界に悪い人間が居る間は、悪人を取り締ることを基礎にして、法律をきめなければならぬんです。人から金を千圓も千五百圓も借りておいて、自由廢業だといつて逃出すのであれば、金を貸す方ぢやア、全く鳶に雛をさらはれたやうなもんです。」

青年署長は眼を上にあげ、視線を天井の隅つこに向けた儘、冷然として言葉を續けた。

「この妓の場合でもさうです。借りてゐる千圓餘りの金をどう始末するか、はつきりしておきさへすれば、そりや先方も喧しくいはないんです。然しどろんと隠れてしまつて、後は野となれ山となれぢやア、金を貸した方は困りますよ。その方の事を考へてくれなければそんなに、おいそれと自由廢業を認める譯にはいかないですなア」

署長は、相變らず煙草の煙を、天井の隅へ向けて吐續けた。江藤女史は、署長の亂暴な言葉に

非常に不満ではあつたけれども、沈黙した儘、彼の頬べたを、凝視してゐた。おあきは俯向いたまゝ、身を震はせてゐた。

硝子越にすかされてゐた空は急に暗くなつて來た、時雨らしい。稲光が走つて、雷が鳴つて來た。おあきも江藤女史も思合したやうに、窓の外を眺めたが、外は驟雨に逃げまどう往來の人の叫聲で頗る騒しかつた。警察の構内に迄逃込んで來たものもあると見えて、受付の方も頗るにぎやかになつた。

然し署長は流石落付いたもので、わざとさうしてゐるのかも知れないが、頬の筋肉を微動もさせないで、自分が吐き出す煙草の煙を見詰めてゐた。

又一つ大きな雷が鳴つた。その響に室内の空氣が激しく震動した。雨は篠をつくように降つて來る。

その瞬間に、應接室のドアを開いて、這入つて來た三人連の壯漢があつた。その一人を見ておあきは忽ち頸をすくませてうつむいてしまつた。それは誰あらう、彼女が今迄抱へられてゐた若竹樓の牛太郎であつた。到頭掴えに來たな、とおあきは心のうちで、考へたが、そんなことは口にも出さないで、黙り込んでしまつた。そのうちの一人で、頭を角刈にしてゐる男が、ろくろ

署長におじぎもしないで、大聲で叫んだ。

「署長さん、此所にゐる娘はすぐ貰つて歸つてもよろしうございますか？」

そのぶしつけない言葉に署長がをこるかど江藤女史は手に汗を握りながら見てゐると、署長は返事もしないで、相變らず煙草の烟を見送つてゐた。署長はそこに江藤女史のゐるのを餘程氣にしてゐるらしい、いつもと態度が變つてゐる。さらばと言つて遊廓から來た男を追返す勇氣もないらしい。

彼等に視線だに注がないで、相變らず煙草の烟を見送つた。ぢれつたさうに三人の若者は署長につと寄つた。

「署長さん、今度此妓をもらつてかへらぬと吉原も娼妓が左傾してしまつて樓主の言ふことなんか聞かなくなつて、我々の言ふことなんか聞いて呉れるものがなくなつてしまふから、今度はどうなことをしてもつれてかへらぬと困るんですよ。昨日も一人逃げたし、今朝も逃げだしたものを二人ばかりつかまへた次第で、こんなに自由廢業が續々とあると、我々の方ぢやもう、商賣しても算盤に合はないですからなあ。」

江藤女史はそれを聞いてゐて、巧いことを言ふかと考へたのであつた。署長はなほも口をつぐ

んでゐた。牛太郎はおあきの傍に近寄つて來た。

それをすばしこく見て取つた江藤女史は、急に立上つておあきを自分の席の方に廻し、自分は牛太郎に近く席を取つた。そして大聲に言つた。

「署長さん、ではこれで失禮します。又御用があれば電話でお呼出し下さい。」

さう言つて江藤女史は平氣な顔をして、署長室の開いてゐたドアの方を指し、おあきに合圖をした。

それは、應接間の入口に壯漢が立塞つてゐるから、署長室の入口から出て行かうといふ合圖であつた。署長は急に立上つた。

「すると江藤さん、借金の方はどうなりますかなあ？」

落つき拂つた江藤女史は、左手でおあきに急げ急げと追ひやるやうな手眞似をして、自分は署長に向き直り、

「借金は借金で又お話にまゐりませう。今日は本人も疲れてをりますので、一寸歸つて休ませてやりたいと思ひます」

三人の壯漢は、その瞬間に江藤女史を掴へようと突進して來た。おあきはすきをねらつて署長

室に飛びこんだ。そして、すばしこく廊下に通ずるドアをあけて急足で表へ出てしまった。

若竹樓の牛太郎は彼女を追かけようと、入口のドアをあけて廊下に出たが、その瞬間におあきは廊下を横切りわざと司法主任の前を通つて、受付のドアの開いてゐた方に急足に近付いていつた。

牛太郎は跣足で廊下に飛び、彼女を追かけたが、それと悟つたおあきは受付の巡査の所へ舞戻つていつた。そして懇願するように頼んだ。

「私は自由廢業に來た者ですが、今歸らうとしますと、女郎屋の廻者があんなに私を追かけて來てゐますので、あなたの力で逃がしてくださいませることは出來ないでせうか？」

さう小聲に彼女は囁いた。牛太郎は受付のドアから一間ばかり離れた所に立止つてゐた。巡査はちらつとその方を見たが、彼は警官に遠慮して近寄つて來るらしくも見えなかつた。

「署長との話はすんだのか？」

若い巡査はそう早口に尋ねた。

「えゝ！ もうすみしました」

「それではこちらへ來給へ。」

要領のよい巡査は小聲でさういつた。そうして彼女を高等課の前を通つて、留置場の傍にある裏門の方へ導いてくれた。牛太郎は、その巡査が彼女を留置場の方へつれてゆくのを見て、その上追かけようとはしなかつた。たゞ遠くから彼女の後姿を見詰めてゐた。巡査は丁寧に裏門の戸をあけ、彼女を外側に送出し、また戸を閉めてしまつた。

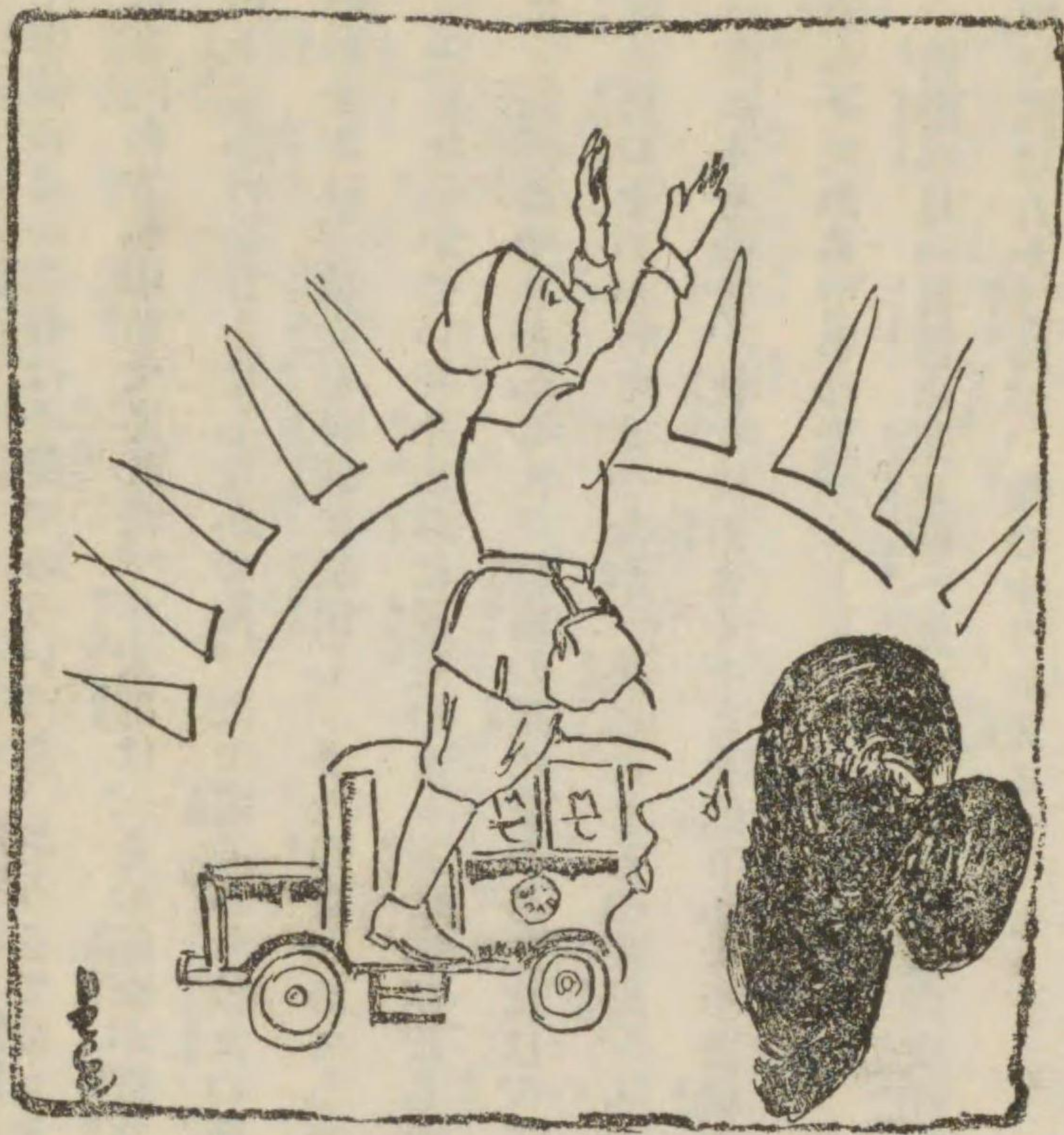
それと氣がついた牛太郎は跣足のまゝ表に飛びだした。けれども外は稲光と雷雨で思つたやうに、活動はできなかつた。警察の裏にまわる迄には、二丁以上もあつた。雨にぬれながら、牛太郎は裏口をめがけて走つたが、裏通にまわつた時、もう彼女の姿はそこには見えなかつた。

それもその筈、彼女は折よくそこを通りかゝつた圓タクを呼びとめて、東京驛の方に一目散に走らせたからであつた。

自動車は一目散に東京驛へ走つた。おあきは、文明の利器の効用をつくづくと有難く思つた。雨で洗はれた道路が、銀のやうに光る。

抜辨天から若松町に出ると、道も廣くなり、車は面白いほどよく走つた。何處までも眞直に敷かれたレールの上に、自動車の轍が乗つけられ、滑かに走つて行く心持よさが、危期一髪の處で警察署から逃れ出た嬉しさと相混つて、天にも昇る程うれしかつた。

雨が小止みとなり、雲も處々切れて来た。車が飯田町を走る頃には、所々に太陽の光線が美しい照明燈を照らし付けたやうに、街の上を浮彫のやうに見せつけてゐた。そんな時に限つて、人間の顔も、着物も、下駄も、瓦屋根も、堀割も、どぶ溝の上板までが美しく見えるものである。



おあきは、「ほんとに神様はある、祈願を籠めた通り、天地の神様は聞いて下さる。」そんな事を考へてゐる中に、彼女の自動車は三崎町の大通を真直に見詰めたがら走つた。神保町の交差点を通つた時、彼女は

「天のまことの神様、どうか私の妹もお救ひ下さい。私はこれから眞人間にたち歸ります。そして一生涯、人助けに精を出します。どうか不憫と思召して私をお助け下さい」

そんな祈を、両手を合して一心不乱にしてゐた。救世軍の本營の前を通つた時、そこで車を止めて飛込んで行かうかとも思つたが、却つて大勢の娼妓が世話になる處では、見付けられる危険も多いので、何處か個人の家に隠して貰へるとよいと思ふた。

車はお濠端に出た。そこはまた特別に美しく、枝垂柳ののんびりした青い影が、鏡のやうに光つてゐるお濠の水の上に反射して、何とも云へぬ悠長な景色を見せてくれてゐた。自動車は宮城前に出、馬場先門を東に一直線に走つた。その時だけは、おあきも、皇族のやうな氣持になつて、自動車に乗つて走ることの愉快さを泌々と感じた。自動車が止つた。巡査が止れの信號をしてゐる。電車が通る、自動車が通る、そして山程荷物を積んだ貨物自動車が通る、その後から、大勢の客を乗せた青バスが通る、その青バスの昇降臺に洋服を着た赤襟の女車掌が、平氣な顔をして乗つてゐる——いや止つてゐると云つた方がほんともかも知れない。

その勇しい女車掌の姿に、おあきはほんとに心を打たれた。

「一日も早くあんなに勇しい姿をして働いてみたいものだ。そしてお金が少し溜つたら、妹をうけ出してやりたい、青バスの車掌になりたい——」

巡査の手の振り方が違つた。今までの往來は止つて、おあきの方の道が開かれた。また自動車

が行く、自轉車が走る。馬場先門の大通は頗る景氣がいゝ。

さすがに丸の内は建築物が大きい。七階も八階もある大きなビルディングの前に自動車が五十臺も百臺も並んで置かれてある。まるで西洋の街に來たやうな氣がする。こんな處に初めて來たおあきは、珍しさと面白さに胸を踊らせた。自動車の運轉手が、

「汽車にお乗りですか？」

と訊いてくれたが、おあきは汽車の外に何があるか見當が付かないので黙つてゐた。すると自動車は驛前の廣場をくるくゝ廻つて、大きな入口の處へおあきを降した。彼女は辛じて、財布の底に残した三圓の中から一圓だけタクシー代に拂つた。自動車はすぐもう何處かへ行つてしまつた。

「さあ、これからどうしよう？」

彼女は一先づ大きな待合室の中へ這入つて行つた。何が何やらさつぱり見當が付かない。然し、おあきは電話を掛ける事だけを知つてゐた。

それは吉原で、お客を呼出すのによく電話を使つたからである。それで彼女は、本所の産業青年會に電話を掛けて、何處か個人の家に隠して貰はふと、公衆電話のある處を探して廻つた。

二等の待合の左側に、郵便局があつた。その奥に公衆電話のあることに氣がついた。然し、どの箱もどの箱もみな人が這入つてゐた。外には二三人も待つてゐた。待つてゐる間は、待ち遠しかつた。なか／＼順番が來ない。もう順番が來ると思ふと、また外の人からやつて來た。

生存競争の激しいのに、自動電話をかける様子の判らないおあきはまごまごしてゐた。半時間位はすぐ經つてしまつた。勝氣なおあきも、もうこんどは、人にとられまいと、一つの自動電話の前に付ききつてゐた。

硝子越しに中を覗いてゐると、なか／＼出て來ないのも道理、その人も自動電話をかけることを充分知らないらしい。然しおあきも、自動電話はまだ一度も掛けたことがないので、こんな時に稽古しておく必要があると思つたので、外側からちつとその人のすることを見てゐた。

後から西洋人風の男がまたやつて來た。そして、内に這入つてゐる四十格好の田舎風の男に、自動電話の掛け方を丁寧に教へてゐた。それでおあきもやつと自動電話の掛け方を了解した。

その田舎者が電話を掛けてゐる間に、おあきは電話番号を知らうと、電話帳をめくつてみた。然し困つたことには電話帳は全くすり切れて、少しも役に立たなかつた。で、彼女はいつもするやうに交換局で訊いてみた。

すぐ答があつた。教へられた通り、彼女は隅田の三七六番に電話をかけてみた。出て来た聲は明かに木村であつた。

激動の後

自動車は、赤坂新坂町の電車の停留所の近くで止つた。

『こゝは木戸公爵のお邸なんですよ、徳田さんは、木戸さんの持つてをられる借家に住んでをられるんです。』

さういひながら、木村は、自動車のドアをあけてさきに降りた。つゞいておあきは至極落着いた様子で箱のなかから出てきた。

木村が自動車代を拂つてゐると、彼女は財布の底をはたいて、五拾錢銀貨二枚を木村におしつめた。木村は笑ひながら、その金を取らうともしないで路地の奥へ急ぎ足ではいつて行つた。おあきは遠くから彼に續いた。

木戸公爵邸の正門の向側に、木でつくつた小さい潜戸があつた。そこを通りぬけると、市街とは思はれないほどの閑静な處があつた。喧しい程蟬が大きな森蔭に鳴いてゐた。おあきはその聲

に聞きいりながら、上を向いて立つてゐた。

木村は二軒目の平屋の玄關の、ベルを押した。すぐ玄關の格子戸が開かれた。そして、木村が豫期してゐたやうに、徳田夫人が微笑をもらしながら、愛想よく歓迎してくれた。木村は玄關の土間に立つたまゝ短い言葉で、つれてきた女性の境遇を説明し、一週間ぐらい世話してくれと頼んだ。それに對して徳田夫人は、いつもの笑顔で、

『私にできますことならば、何でもさせて頂きます。』

かういつてしまふと、すぐみづから表に出て、恥かしげにうつむいて立つてゐたおあきに近づいた。

『いらつしやいませ、さあ、どうぞおはいりください。蒸暑うございますね。もう一度さあつと夕立がくるといゝんですがね』

徳田夫人は、おあきの手をとるやうにして、綺麗に掃除した玄關を通つて座敷に上らせた。徳田夫婦は、去年の暮結婚したばかりで、家庭をもつてまもなくかつたが、夫人が女子學習院の幼稚科を教へてゐた關係で、市内でもこんな閑静な處に、小さい家を借りることができたのだつた。女子高等師範の圖畫科の出身で、日本畫に堪能であつた。夫君も西洋畫に優れた腕をもち帝展に

はこれまで數回入選するほどの力量をもつてゐた。

二人とも震災當時からの熱心な「イエスの友」で、意氣相投合して結婚したのであつた。さうした關係で、木村はなんの遠慮もなく、彼女におあきをまかすことができた。

「イエスの友」といふのは、キリスト教會に關係のある各派の同志が、教會に奉仕するための團體で、震災前から敬虔、勞働、純潔、平和、奉仕の五ヶ條の約束をたて、日本各地の貧民窟に、あるひはまた各地の開拓傳道に努力してゐた。殊に、大震災直後には、隨分彼等は東京で働いたものであつた。

夫婦とも藝術家であるだけに、壁にかゝつてゐる油繪や、机の上におかれた花瓶までが至極落着いてみえた。おあきが遠慮して、玄關から動かないのを、無理にも表座敷に通し、徳田夫人はお茶の用意をした。

「徳田さんは、今日は寫生にでもお出かけですか？」

木村の間に、徳田夫人は茶を急須から茶呑茶碗にうつしながら答へた。

「近頃毎日、近くにある小學校の畫室を借りて、帝展に出すんだといつて、お晝も歸らずに一生懸命になつてゐるんですよ」

座敷の入口にすはつたおあきは、ぼんやり考へこんでゐる様子だつた。うつむいたきり顔もあげないで、手をもぢ／＼させてゐた。

徳田夫人から受取つた茶碗を、茶敷とともにおあきの方にすゝめながら、木村はいふた。

「徳田さん御夫婦は私達の同志なんですから、こゝは産業青年會と同じやうに思つて、あまり堅くならないでいらした方がいいでせう。」

おあきは、「ふふふん」と吹き出した。

「何も堅くなつてゐやしないんです。たゞ妹の事が氣になるものですから、つい氣が減入つちやつて仕方がないんです」

徳田夫人は、おあきの顔をみつめた。

「妹さんつて、何處にいらつしやるんです？」

おあきは沈黙してゐた。で、木村がおあきにかはつて答へた。

「やはり吉原に勤めていらつしやるんです。山口さんはその妹さんをも救つてあげたいといつて一生懸命になつてゐられるんです。」

「さうですか、そりやお氣の毒ですね、早くお助けしたいものですね」

『私は明日からでも青バスの車掌になつて、少しでもお金をためて、妹をぜひ自由の身にしてやりたいと、今日決心しましたんです』

木村は、その言葉に刺戟せられて、うつむいてゐるおあきの横顔をぢつとみつめた。

『昨日まで遊んでいらしたた身体で、あんな激しい労働ができませんかしら』

『できませんとも、遊んでゐたのは半年かそこらですから、少しも無理ぢやないんです。妹があまり深入りしない中に早く、救つてやりたいのです。』

その殊勝な言葉に、徳田夫人も感心してゐる様子だつた。しかしおあきが悲しむと思つてか、深くきゝたゞさうとはしなかつた。

木村は、床の間にかゝつた葦にとまつた『葦切』の非常に寂びた掛軸をみて、木村は如何にも感心したやうな口調で、徳田夫人にたづねた。

『これは、どなたがお描きになつたんですか？』

『これは川端瑞穂さんが描かれたんです。いゝでせう？』

『日本畫にもなかくゝいゝ處がありますね。西洋畫とちがつてなんだかあつさりしてゐて、胸がすうとしますね』

木村は床の間から視線を後の壁に、後の壁から左手の襖の前にすえられた茶棚に移した。

茶棚には四つにさけた柘榴の實が一つ、瑠璃色の一輪挿の花瓶につゝこまれてあつた。茶褐色の後の襖と、茶棚に敷かれた紺染の布片と、瑠璃色の花瓶と、赤茶けた、柘榴の色彩がなんともいへぬ美しい調和をみせてゐた。

『おや、もう柘榴がみのりましたかね』

木村は思はず大聲で叫んだ。

『はア、徳田が何處からか貰つてきましたね、大事にしてとつてゐるんですよ。柘榴つてほんとにいゝもんですね。聖書にもありますわね、なんぢの頬は面帕の後にありて、柘榴の半片に似たりつて。ユダヤでも柘榴はよほど美しいものとされたんでせうね。』

『そんな言葉が、聖書にありましたかね。』

『私はこのあひだ讀んだばかりですから、覚えてゐますわ。たしか雅歌四章に書いてあつたと思ひましたよ。……然しこの方も随分血色がおよろしいですね。それこそ柘榴の半片のやうな頬をしていらつしやるぢやありませんか』

さういつて徳田夫人は、おあきの頬べたをみた。實際おあきの二つの頬は遊廓に働いてゐた女

としては珍らしいほど美しく、若かつた。

二人が笑つてゐるにもかゝはらず、おあきは物思ひに沈んでゐるとみえて、微笑だにしなかつた。半片つていふことを變にとつて、こんなことをいふた。

「奥様、半片ぢやしかたがございませんわ、もう一つの半片を早くつれ出してきたいんです」
その言葉に徳田夫人もほろりとした。おあきは、自分が柘榴の半片で、妹がもう一つの半片であるところをつけてゐるのであつた。

「新見さんはお達者なんですか？」

徳田夫人は臺所からもち出してきた梨の皮をむきながら、木村にたづねた。

「はア、お忙しくて飛びまわつてをられますよ。まだ山口さんとも會つていらつしやらないんです。」

「さうですか、それぢやア、新見さんは山口さんを少しも知つていらつしやらないんですね？」
「いゝえ、手紙は數回往復なすつたんですが、お會ひになつた事は一度もないんです。昨夜も大久保の教會で講演があつたものですからね、行違ひになつたんです……東京の市内にもこない、静かな處があるんですかね。まるで箱根か輕井澤あたりへ行つた氣がするぢやありませんか。」

驚きましたね、この森の深いのには。」

「ほんとにいゝでせう。」

「お家賃はすゐぶん高いんでせうね。」

「それが、びつくりするほど安いんです。これだけで二十三圓なんですよ。部屋が五つあつて、あんな廣い炊事場がついてゐて、だからすゐぶん市内としては安いですわね。よそでしたら五六十圓とりますわね」

「そりや、もちろんです」

皮をむいた梨を、おあきと木村にすゝめながら、徳田夫人はまた言葉を續けた。

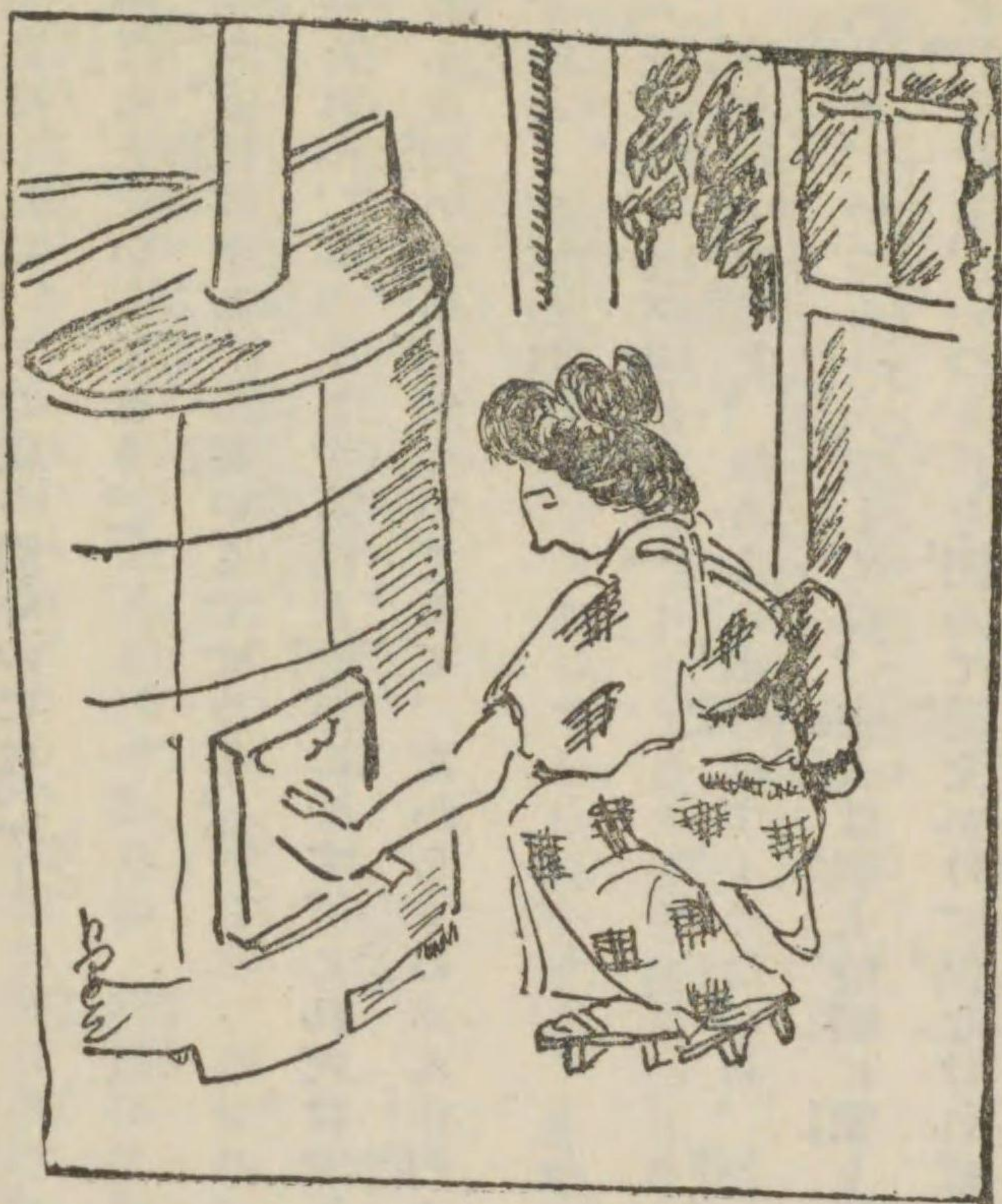
「私も、いつも一人でしてね。主人は朝七時頃に家を出て、晩でなければ歸らないでせう。買物に行くにも、いつも戸を閉めて鍵をかけて出なければならぬので、ちよつと外に行くにも大儀なんです。山口さんにも留守して頂いたら随分助かりますわ。」

さういつてゐる處へ、ひよつくり主人公の徳田が表から歸つてきた。夫人は玄關へ飛出して行つた。すぐ徳田夫妻は、表座敷にはいつてきた。それを機會に、木村は、歸るしたくをした。

「まあいゝぢやありませんか、木村さん、少しゆつくりなさいましよ」

徳田夫人はやさしく木村をひきとめた。主人もそれに和した。
『ねえ、木村さん、もう少しいでせう。またなか／＼會へないんですから、ゆつくりしていらつしやいよ。』

西側の大きな森のなかに、蟬がみん／＼鳴きつゞける。



『あの聲聞くと、どうもせき立てられるやうな気がしますから、今日はこれで失禮しませう。明日十萬枚のリーフレットを市内に配る計畫をしてゐるんですから、今日はその準備をしなければならぬんです。』

『あゝ、明日は震災記念日でしたね。畫を描いてゐると、日がわからなくなりましてね、ぼんやりしてゐました。』
それからすぐ木村は、徳田の家を辭し

た。おあきはかひ／＼しく臺所にまわり、風呂をたく手傳をした。その心得のよいのに、徳田夫人も感心したとみえて、庭の植木の虫をとつてゐた徳田の處にやつてきて小さい聲で囁いた。

『あの妓は、少しも吉原にをつたやうな處がありませんね、時代が進んだのでせうか、それともあの妓が偉いんでせうか？』

赤坂の徳田さんの屋敷は、大久保百人町の婦人ホームにくらべて、一層もの靜かに感ぜられた。家の周囲の森は晝の日中でも、木曾の山中にでもゐるやうな感じをあたへた。

もちろん吉原などにくらべて、非常に落ちついた感じがあたへられ、朝起きてから晩迄、初めて自分の魂が自分の心におさまつたやうな気がした。それで、おあきは毎日のやうに、朝早く起きて、臺所の手傳ひや庭掃除に忙しく働いた。

徳田夫人は、絹のやうに柔かな言葉づかひをするし、いつもにこ／＼として彼女に對つてくれるものだから、吉原にゐた時のやうな毒氣は、家の何處にも見つからなかつた。

主人公は、言葉数の少ない人で、朝の禮拜の時に聖書を読むことのほかは、夫婦の間でも言葉を交されない様子であつた。たとひ言葉を交しても、ほとんど人に聞えないほど小さい聲で、一聞と離れてゐるおあきには、その言葉が聞えなかつた。

そのすべてが藝術的にみえた。彼等夫婦はほとんど繪のなかに住んでゐた。今迄なげ出しの、うつちやらかな生活を見てきたおあきには、日本にもこんな清らかな生活を送つてゐる人があるかと思つて、感心させられることが多かつた。

臺所にはいつでも雑巾がきちんと洗濯されてある、大久保の百人町でも感じたが、こゝでも特別に感じたことは臺所が畫室のやうに光つてゐるといふことだつた。すべては、繪のやうに取扱はれてゐた。押込のなかをあけても、罐詰のあき罐までが藝術的に配列されてゐた。

家の周圍はしーんとしてゐるし、主人公はだまつてゐる。夫人だけが折々慰めるやうに美しい江戸つ子辯で、絹のやうな言葉をはくものだから、言葉をかけられる度毎に、おあきは自分の魂がきよめられるやうに思ふた。徳田夫人は、日本畫が上手で二枚折の屏風に描いたものなども、おあきを吃驚させるほど上手にできてゐた。

そのためでもあるか、徳田夫人の着てゐた裕衣と帯の配合、半襟と帯留の色の調和が、吉原あたりでは見られないやうなすつきりしたものであつた。

主人公は朝早くから寫生に出た。夫人は夏休みで、學校に行く必要がなかつたけれども、朝早くからオルガンの譜を、こくめいに寫してゐた。

それでおあきは、する仕事がなくして手持無沙汰でこまつた。しかし、吉原にくるまで働く癖のついでに彼女が、ぢつとしてゐるのが嫌ひだつた。彼女はまづ玄關の敷居から拭き始めて、椽側、浴室、臺所の板間、およそ木といふ木の平面になつてゐる處は、框でも鴨居でも、板間でも、闕でも、拭いてふいて拭きまくつた。

それがまた彼女の吉原における恨みをまぎらせる理由にもなると、思つたからであつた。

第一日の日は、朝から晩までたゞ一人の面會客もなく、彼女は仕事のあひまゝに初めて、聖書といふものを讀んでみる氣になつた。

臺所の隅ついで、彼女はたちながら、新約聖書の第一頁を開いてみた。彼女は、聖書があると、いふことを本でも讀み、吉原でも知つてゐたが、最初それをみたのは、婦人ホームの二階であつた。しかし彼女はそこで、聖書を讀む機會がなかつた。こゝで初めて食堂の片隅につままれてあつた、小型の聖書をかりて讀んでみる氣になつた。

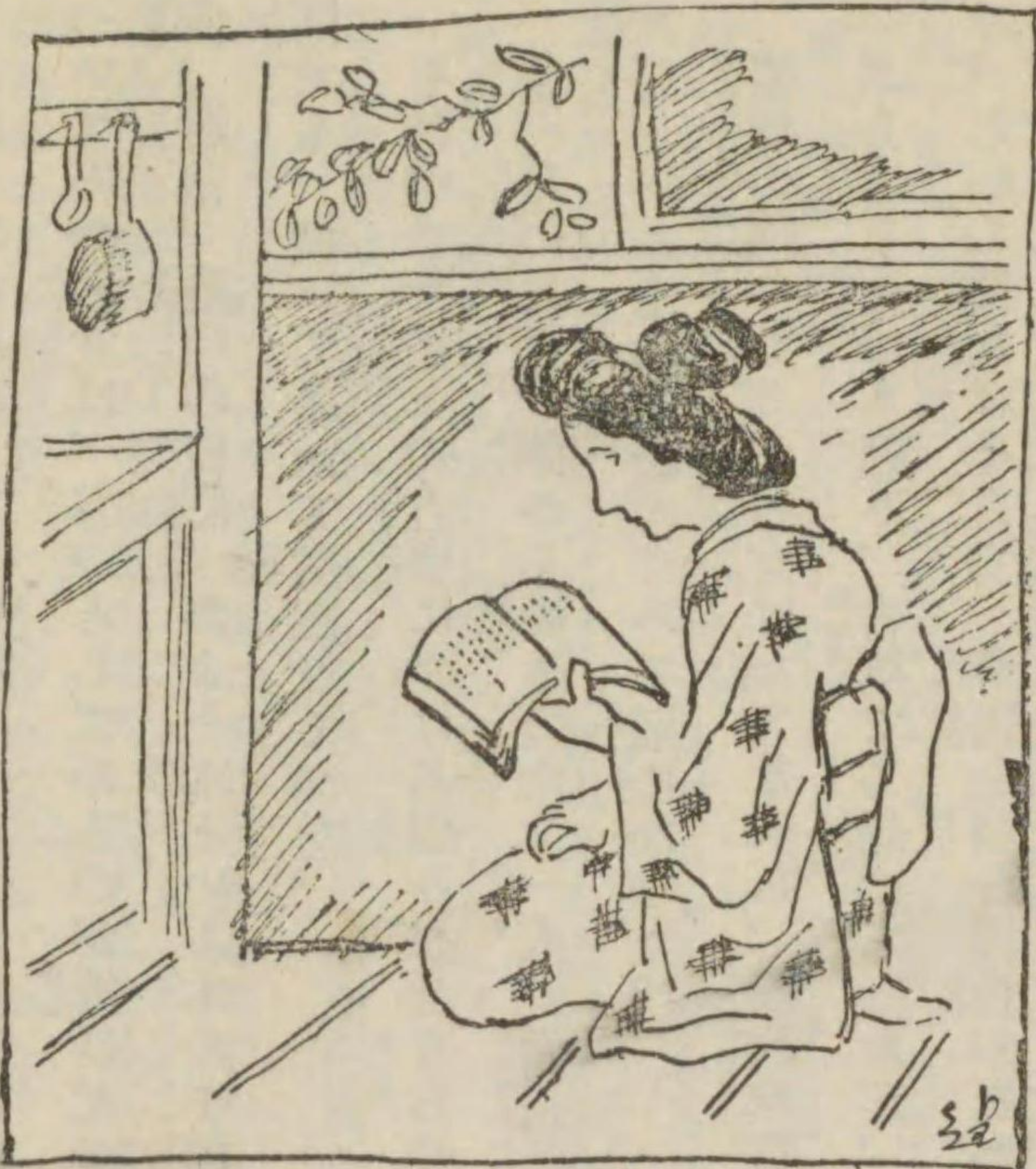
それは徳田夫人のものらしい。徳田愛子と女の手で署名してあつた。なかはペンで筋を引いたり、赤鉛筆でマークをつけたり、それはよく讀まれてあつた。しかし、開卷第一頁は假名ばかりならんでゐて、何のことだかさつぱりわからなかつた。

それだけはわかつたが、その後はなにが、なにやらさつぱりわからない。假名のところをとばして平假名のところをみたが、夢物語や、處女が男と關係せずに、子を生んだ話が書いてあつた

ので、なんだか講談本を讀んでゐるやうな気がした。

ぴんと胸にこない。文字が小さすぎる。頭のなかに強い良心のさけびが響いてこない。聖書を見れば、神の姿があらはれてくると思つたが、それも望がないらしい。

しかし、おあきは失望しなかつた。板間の上にすわつて、ぼち／＼讀み出した。マタイ傳第五章になつて、初めて沙漠のオアシスにいたやうな気がした。



『幸なるかな、心の貧しき者、天國はその人のものなり』

この言葉がほんとに嬉しかった、ほんとにさうだと思つた。

『幸なるかな、悲しむ者、その人は慰められん』

彼女はほつとした。これでもう充分だと思つた。臺所の東窓に、柘榴の大きな枝がのぞきこんでゐる。そのあひだから赤い光線が、すかしてみえ、臺所の板間の上に緋のやうな模様がまばらに描かれた。おあきは、

『さうだ、ほんとにさうだ、私は悲しいが、私の悲しんでゐるのは、眞直な人間にならうと思つてゐるから悲しんでゐるので、かうして悲しみ苦しむところに人間としての生きがひがある。嬉しい、嬉しい、必ず眞人間になつてみせる！』

彼女は新約聖書を膝の上におき、しばらく天井裏を見つめてゐたが、みるみるうちに、その臺所が天國のやうにみえ、自分は、後光に包まれてゐるやうな気がした。

『もつたないない、もつたないない、自分のやうな汚れた體が、神の恵によつて生れ變ることができるといふことは、何と仕合せなことであらう』

彼女は、今までかつて経験しなかつた神の恩寵を、甘露のやうに味はふたのであつた。

その後一週間たつてしまつた。

それは彼女の生涯にとつて、忘れがたい静かな一週間であつた。それ以後、彼女は、生活が藝術であることを多少なりとも味はうことができた。

しかし、吉原遊廓をとびだした激動もさり、神によつて新生涯を送れることの確信もついたから、何だかちつとしてゐることが、神様に對してもすまないやうな氣がしてならなかつた。

それで、彼女は初めから志願してゐた青バスの車掌になることを一刻も念頭からはなさなかつた。けれどどんなにして何處へ申込んでいゝのかさつぱり見當がつかない。今まで、毎日だらだらしてゐた彼女が、あの激しい労働に従事できるか否かが、問題であつた。第一髪の毛から、變へてかからなければならぬ。徳田さんの家に世話になつてから、八日目の朝だつた。彼女は斷然今まで結ふてゐた銀杏返しを、小學校時代に結つてゐたやうな束髪に、結ひかへた。何だか銀杏返しと別れることが、嬉しかつた。しかしまた淋しくもあつた。その朝、彼女は決心して徳田夫人にたづねてみた。

「奥様、あの、青バスの事務所は何處にあるのでございませうね」

徳田夫人は、今朝から幼稚園に出るのだといつて、着物を着かへてゐるところであつた。

「青バスつて、あなた市電のこと？ 市電だつたら市の電氣局でせうね」

着物を端折つて、細紐でしめつけてゐた徳田夫人は、澄みきつた聲でさういつた。

「たしかに市の電車のほかに、もう一つありましたね？」

「あ、あれですか、あの事務所なら、上野の車坂ぢやないの、あしこへ行けばきつとわかりますよ」

敷居をへだて、次の部屋にかしこまつてきてゐたおあきは、喜びの目をみはつた。

「あゝ、あゝ、あそこに乗合自動車の車庫がありましたつけね、あしこですか？」

「あしこには女車掌の寄宿舎もあつたと思ひましたよ」

徳田夫人は紺地の袴をとりあげて、はいてゐる。

「あしこへ行くのには、電車で行けばいゝんでせうね」

「ここからであれば、さうね、青山一丁目から、赤坂見附へ出て、そこで萬世橋行きに乗りかへると、もう一度萬世橋で上野行きに乗かへるといゝんですよ」

「私は田舎者ですから、赤坂見附が何處にあるのか、青山一丁目が何處にあるのか、さつぱり見當がつきませぬのですが。」

片手を膝の上におき、片手で襖のはしを握つたおあきは、自分の無智を恥ぢるやうであつた。

「あなた、ぜひそこへ行きたいの？ 何なさるの？」

「おほ、おほ、ちよつと考へがあるのでございますよ」

「誰かしつてる人がゐるんですか？」

「いゝえ、ねえ、私は青バスの車掌になりたくて仕方がないんです。それで一度たづねてみたいと思つてゐるんです」

「それは勇氣がありますのね、おできになるかしら？ あなた、さうお急ぎにならなくとも、私の家でかまはなければどんなに長くゐても、大歓迎なんですよ。あなたもよく働いてくださるし、家には留守がないでせう。あなたと私と一緒にいければ、後は戸をしめて出なければならぬし、徳田はあんなに朝早くから寫生に出て行つてしまふでせう。もう少しゆつくりして、身體をお休めになつたらうどう？」

徳田夫人は、桐の箆笥の引出しのなかから財布をとり出して、それを懐にいれながらさういつ

た。

「有難いんですけれども、私もかうしておいていたとくと、暇すぎてこまるんです。少し激しい働がしてみたいと思ふもんですから、青バスの事務所に行つて、私にできるかできないかたづねてみようと思つてゐるんですの」

「私は、あなたの身體が續くかどうか心配しますよ……あなた、かうしちやどう？ 明日の朝、徳田が寫生に行く前に行つてもらつたらどうです？」

徳田夫人は、おあきのところまで出てきてゆつくりした口調でさういつた。

その翌日、おあきは、徳田が、姉の病氣で、急に關西に立たなければならぬことを知つた。それで彼女は徳田夫人が家を出る前に、とにかく、上野まで行つてみることに、きめた。徳田夫人が親切に、着がへにせよと出してくれた、矢絣の單衣をきて、彼女はとぼ／＼青山一丁目まで歩き、そこから電車にのつて、教へられた通り、赤坂見附で乗換へ、萬世橋まで出た。田舎から眞直に吉原遊廓にきてその後あまり街に出たことのないおあきにとつては、すべてが、物珍しくもあり、また混乱してみえた。萬世橋で少しまごついたが、やつと親切な學生風の青年に教へられ、上野車坂町の停留所で降りることができた。そこには大勢の女車掌が、活潑な洋服をきて

楽しさうに男の運轉手と交代のくるのをまつてゐた。

受付口は、車庫にみちびく廊下のかたはらにあつた。

そこはどす黒いところで、なんとなく陰氣くさく感じた。しかし、元氣なおあきは、ちさいガラス窓を自分であけて、

『一寸お願ひいたします』

と、さえきつた聲で、遠くにゐた事務員をよんだ。三十格好の、鼻のしたにちよつぱり口髭を生じた機敏さうなその男が、すぐ窓際にやつてきた。

『私は車掌になりたいのですが、ご採用くださるでせうか？』

『あゝしますがね、明後日が試験ですから、その時にゐらつしやい。採用願の書式がありますから、これをもらつてかへつて、保證人の判をついてもらつてもつてきなさい』

さういつて、その男は机の抽出から書式の紙を二枚わたしてくれた。

その用紙をうけとつた時、おあきは、もう車掌になつたやうな氣がした。しかし、試験にとほるだらうか、といふこともまた心配になつた。もしや、自分が娼妓をしてゐたことがしれるならきつと採用されないだらう。そこは、上手にかかねばならない。

そんなことを考へながら、彼女は受付口でほんやりその印刷した採用願をみてゐた。受付の男はほかに用事があるとみえて、すぐあちらへ立ちさつた。それで彼女も勢をつけてまた車庫の入口をでていつた。

そこには、多勢の女車掌が一かたまりになつて、何か面白さうに話してゐたが、いまに自分もあゝした人の群にはいるのだと思へば、うれしくてたまらなかつた。

けれど、考へてみれば、赤坂に歸つても家には鍵がおりてゐるはずで、保證人になつてもらふにしても、徳田は寫生に出て晩でなければ歸つてこないから、今日のまにあひさうもなかつた。

それで、彼女はまた本所の産業青年會を訪問して、木村に保證人になつてもらはふと即座にきめた。さう思つて、ほんやり車坂警察署の前に立つてゐると、青バスがパタツとそこに立ちどまつた。

『あゝ電車にしないで、今日はこれにのつてみよう。どんな風に呼聲をかけて、どんなにして切符をきるか、それもよくみておかう』

さう思つた彼女は、機敏に青バスのなかにとびこんでいつた。

『次は稻荷町でございます。稻荷町でお降りの方はご用意を願ひます』

腰を革帯で締めあげた脊の高い女車掌は、すみきつた小聲で、さうよばつた。そして、おあきの前までやつてきた。

『中の郷元町は十四銭のただきます』

そういつて、腰のカバンの口をひらいた。

髪を、皮帽子のなかにきれいにかくし、二つの頬ぺたに紅をぬつたやさしい女車掌は東北の女とみえて皮膚まで美しかった。女給にでもすれば、さぞかし収入もよからうと思はれるほど、縹緞もよかつた。

こんな美しい娘が、どうして女車掌になるかといふことも、彼女には疑問になつた。膝から下の足の曲線がすつきり美しく、腰のスカートとつりあひがとれて、現代的なその顔の形と、よく配合されてゐた。

車は左右に激動する。砂ぼこりを立て、電車軌道の上を一直線にはしる。車がレールをはずれると、車體は上にとびあがつた。その時、女車掌は頭の上のニツケルめつきの横棒をつかまへて、平氣でゐる。

たまらないほど、痛快にみえたその軽快な様子に、おあきはちつと視線をはなさず、女車掌の

横顔にみとれてゐた。頭痛する日、客がこむ日、金の計算がたらない日、意地悪るな運転手と乗り合はせた日、あの人達はどうするだらう、となほもおあきは、その女車掌をみまもつた。

本所中郷元町でおりたおあきは、自動車でいつた時と見當がちがふので、二三度産業青年會のあるところをたずねた。

最初きた晩は、なんだかおちつかない氣持でみたものだから、珍らしく大きい家のやうに考へてゐたが、落ちついてみると、あまり大きい家でもなかつた。

木村は、おあきが自動車の車掌にいよくなることをきいて、喜んで保証人になつてくれた。それをもつて彼女はまたふたたび、車坂町までひきかへした。そして、一安心した氣持で赤坂新坂町まで、遅い電車で歸つてきた。そのとき、もう徳田夫人は家に歸つてゐた。

『うまいこといきましたか』

『お蔭様で、どうにか仕事の見鼻がつかれました。あす試験があるんですつて、何んだかおつかない氣がしますわ。どんなことを聞かれるんでせうね？』

それからかの女は、徳田夫人の忠告にしたがつてまづ、東京市の地圖を勉強しだした。のみこみのよいおあきは主要な乗替場所をみな暗記した。

翌日試験にいつてみると、徳田夫人の忠告は間違つてゐなかつた。試験といふのも全く常識試験で、東京市の主なる公園をお書きなさいとか、郊外に連絡する、重なる電車線路の名を記せとか、最も混雑する電車の乗換場所をお書きなさいとか、あなたは、なぜ車掌になりたいと思ひますか——といったやうな種類であつた。きのふ半日かかつて勉強したおあきにとつて、そうしたことは容易であつた。

かの女は一時間もたぬに答案を出していつてしまつた。翌朝、青バスの事務所から採用のがきが、赤坂新坂町の徳田の氣付で、おあきの許にとよいた。

小學校を卒業してから、試験を受けた最初であつただけに、おあきは採用通知の葉書を見て、こをどりして喜んだ。その朝、かの女は、ろく／＼食事もしないで、徳田の家を飛び出した。そして、青バスの事務所につくと、監督がすぐ、かの女を寄宿舎の方に案内してくれた。そこには、六人ばかりの地方から出てきた婦人の乗務員が、寄宿してゐた。洋服がわたされた。これまた生れて始めての洋服であるし、それを着たくて困つてゐたおあきには、それほど嬉しいことは無かつた。

『あなたよくうつてよ』

同室の柏原時子といふ秋田生れの娘が、そう批評してくれた。それから毎日晝と晩と二交代となつて、車掌に必要な學課が始まつた。

おあきはあらゆる苦難に耐へた。すべては、吉原の貸座敷にゐるより愉快であつた。友達も親切であるし、運轉手のなかにも、意地悪い人はさう多くなかつた。

たゞ最初の程車が動揺することに多少めまひがするやうに感じられないでもなかつたが、これも職業の一部分だと考へたとき、村にゐて機ををるより、かへつて愉快であつた。

今はもう早く熟練して、金をため吉原にゐのこつてゐる妹を、自由な身にしてやりたいといふことだけが、彼女の祈になつた。

彼女は、仲間の誰よりも朝早くおきた。そして、徳田夫人からもらつた新約聖書を一章づゝ讀んで、妹が早く自由の身になりますやうにと、そのみ祈つた。

労働は愉快であつた。銀座をはしるとき、車坂から淺草までの直線道路をはしるとき、運轉手のかたわらに立つて、労働の愉快さを、しみ／＼と感じた。

彼女は、すべての客に親切に一錢の金も間違はないやうに、満全の策をつくした。吉原の客に相手になる親切さがあれば、乗合自動車の客は、みな笑顔を作つて出て行くのであつた。

客がおとし物をして行く。ひろつてやる、客がお辭儀をする。客が忘れ物をする。注意をしてやる、客がお辭儀をする。彼女は乗合自動車の車掌ほど社會奉仕にいゝ仕事はないと思つた。

宗教講演會

他の車掌は疲勞して休むことも月に何回かあつた。しかし、彼女は、どんなに頭痛がしても、どんなに苦しいことがあつても、決して休まなかつた。それで、毎月精勤の賞與と割増金をもらつた。そして車にのり出した最初の月から、最もよく働く女車掌の一人に、數へられるやうになつた。

上野の櫻の葉が赤くなり、銀座のプラタナスの葉が、ぼたりぼたり落ちはじめた十月の終には彼女はもう立派に一人前の女車掌になりおほせた。身體も青バスにしつくり合ふやうになり、身體の關節も、車體の動搖に充分調節できるやうになつた。

洋服も、がつちり身體にあふやうになり、朝起きてから夜ねるときまで、洋服ばかり着てゐて全く不便を感じなくなつた。それで初めて二月月に洋服をきたまゝ、徳田さんの宅を訪問してみた。

それは十一月の第二の金曜日の晩であつた。徳田夫婦はその晩、赤坂の靈南坂で開かれる、新見さんの講演會に行く處だといつて、玄關口まで出かけてゐた。そこへおあきが顔を出したものだから、びつくりしてゐる様子だつた。

『まあ、お變りになりましたね、あなた洋服を着ると、随分背が高いやうに見えるのね、まるで別人のやうに見えるわ、よく似あつてよ、いつも洋服ばかりでいらつしやるの？』

『えゝ、だつてこのほかに着物がありませんもの、持つてきたところに着物も何もすつかりをいたきたものですから、着物を買ふのは面倒くさいし、洋服きてゐた方がすつと便利ですし、もう洋服ばかりきてゐることにしたんです』

『あなた、新見先生の講演を聞きにいらつしやらない？ 新見先生にまだお會ひになつたことないんでせう』

『つれて行つて下さいますか？』

『行きませう、行きませう』

徳田夫人は、さういつて玄關の簀戸に内側から錠をかけ、裏口へ廻つて、そこに錠をおろし、無口な徳田と無言のまゝ立つてゐたおあきの處に近づいた。

『お待ちせしてすみませんでした。さあ行きませう、行きませう』
三人は赤坂新坂町から電車にのり、六本木のりかへ、福吉町であり、丘の上のまがりくねつた道を、靈南坂教會にたどりついた。そこには、もう元氣のいゝ讚美歌が始まつて、硝子窓からもれてくる光が、何ともいへぬ神秘的な光をもらしてゐた。
『……………さくら咲く國よ』

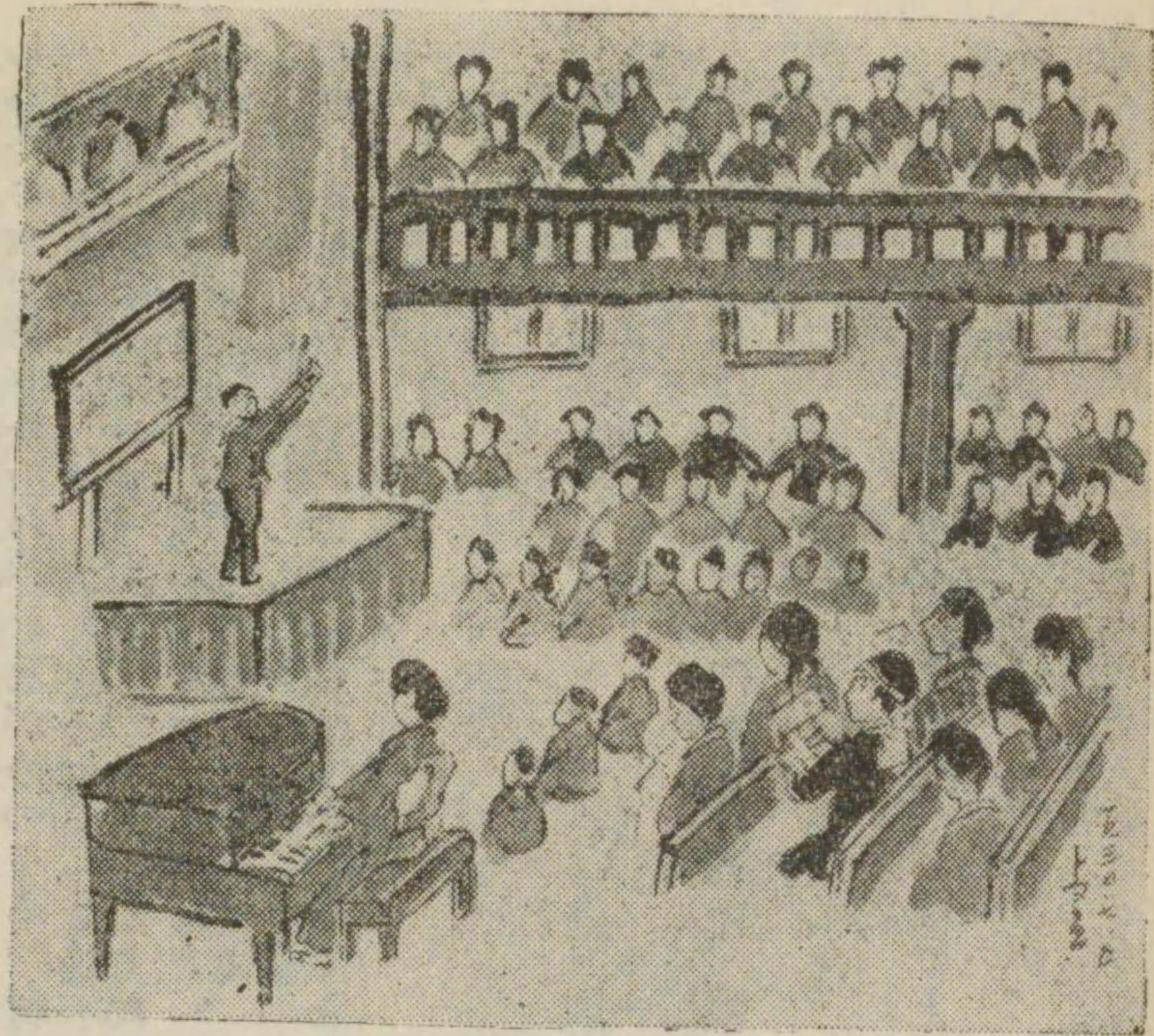
罪の雲その民を閉ざせるは如何に』

おあきは玄關口にはいつた時、會衆はさうした文句の歌をうたつてゐた。かの女は、その文句に非常に心をうたれた。それは、上野の櫻と新吉原の罪惡をすぐに聯想させた。
場内にはいると、廣い會堂はぎつしり若い青年男女で一杯になり、讚美歌の指導者が壇上で兩手をふりながら、會衆の歌ふ歌の調子をとつてゐた。

さうした光景は、おあきには初めてのことであつた。すべてが珍しく見えた。

『あゝ、み光、日の本にいよいよ輝きて』

あゝ、心の雲霧を
拂ひさらしめよ』



後からきたためであつたか、ずつと婦人席の前に案内せられた徳田夫人とおあきは、ピアノに近い、前列から二番目の席について、勇しい讚美歌の曲についていつた。

『この、譜のついてゐる歌よ』

おあきが入口でわたされた讚美歌の紙を裏表にかへしながら、どれを歌つてゐるのかともじくしてゐると、徳田夫人は親切におあきをかへりみて、小聲に讚美歌のついてゐるところを教へてくれた。

『奥さん、こんなむづかしい歌、歌へやしませんわ』

小聲におあきはさう返事した。

『松の木は歌うたひ 山はどよめけどみ救の幸を知る人の數いくそ』

會衆は神の國運動讚美歌の「百萬の魂を神に捧ぐ」といふ歌の、第二節を歌った。

その文句が、おあきの胸をえぐるやうだつた。おあきはすぐる日、秋田の田舎を出たとき、美しい松の木や秀でた山の姿をながめつゝも、村に里に罪惡でみちてゐたことを、すぐ聯想した。また吉原に出てきて、正月の七五三飾りに松の木や青竹と梅の枝と三つそろへて飾つたけれども、それは街頭だけであつて、一旦戸口のうちはい

れば、そこは百鬼夜行の罪惡の巢であつたことを、思ひ出した。

『あゝ、み光………
心の雲霧を………』

拂ひ去らしめよ』

よう歌はないけれども、その調子の高い、魂の底からつき出てくるやうな讚美歌に、おあきは涙が二つの眼に、しみ出てくることを覺えた。

徳田夫人の聲は小さいが、その美しい聲で上手に歌をうたつてゐた。それで彼女も、徳田夫人のまねをして、大きな聲で歌はうと思つたが、みんなと寄宿舎で歌ふカフェーの俗歌は、三つも四つも自由に歌へるけれども、讚美歌はどうしても歌へなかつた。

しかし、コーラスが二度三度とくりかへされてゐるうちに、だん／＼歌へるやうになつた。それで彼女は、第五節のをはりには大聲で、

『あゝ、心の雲霧を
拂ひ去らしめよ。』

と歌つた。

それは、自分の魂によびかけた自分の讚美歌として歌つたのであつて、人にきかすために歌つたのではなかつた。今までの淫亂の吉原の生活をすつかりはらひさり、心の雲霧を全くきりひらきたいと思つて、さう歌つたのであつた。

『あなた歌へるぢやないの、なか／＼上手よ』

徳田夫人は二つの頬に微笑をたゝえながら、おあきをかへり見ていつた。

讚美歌がすんで、聖書の朗讀があり、祈禱があつた。そして中背のすらりとした小崎若牧師がその夜の講演者新見先生を紹介した。

おあきが新見先生の顔を見るのは、今夜が初めてであつた。新見先生を訪ねて本所に行つたがそこでもあはず、新見先生のお友達の家のお世話になつたけれども、たうとう今まで一度も顔を



みることができなかつた。書物の上では、親しくなつたゐたけれども、顔を見て一層嬉しく感じたのであつた。

おあきは、講壇の上に黒板代用の紙をはりつけてあるのを、初めから變だと思つてゐたが、新見先生が話をしては、その上に墨で文字やいろ／＼な圖表をかいに行かれるのが、ずゐぶん變つたやうに考へられた。

なんだか、壯嚴をやぶるやうにも思へたが、話のはつきりして合點の行くこともあつた。

話は、おあきにはわかる場所もあり、わからぬ場所もあつた。をりをり、新見先生が關西辯て破戸漢の話をするのがかしくて、その次の話をききのがすこともあつた。

熱してくると、新見先生の語尾が、舌にもつれて、吐切れてしまふものだから、なほわからぬところもあつた。新見先生は、貧民窟の淫賣婦が改心した話をしてをられた。そこだけは特別によくわかつた。

新見先生が、マタイ傳第廿一章——卅一節「取税人と遊女とは汝らに先だちて神の國に入るなり——」といふ聖書の句を、はつきり大聲で讀みあげ、うすい革表紙の聖書を兩手でとち、聴衆をみまわした時、おあきは、その聖句が特別に自分のために讀まれたかのごとく思つて、全くび

つくりしてしまつた。

おあきは、そんな文句が聖書にあるとは、知らなかつた。

『もしかすると、新見先生は、私が今夜くることを誰からかきいてゐて、わざとあの一節を讀んだのかもしれない、誰にもいはなかつたはずだし、誰もしらないと思つてゐたのに』

そんなことさへ彼女は考へた。彼女はそれからあとのことは、ほとんどぼんやりきいてしまつた。

『ありがたいことだ。キリストはほんとに私の救主だ。そんなにまでつまらぬ娼妓縁ぎの女を思つてくださる方が世界にかつてあつたか』と思ふと嬉し涙で、自分の顔がべた／＼になるのを、徳田夫人にみせることさへ恥かしかつた。

おあきは、そつとハンカチで顔全部をふいて、新見先生の話をききなほさうとしたが、もうあとは聴くことができなかつた。繰かへし繰かへし不思議な攝理で、遊廓から車掌になるまで、何だか神の手が自分を引張つてくださったやうに思はれて、ありだたくて有難くて、泣かないではをられなかつた。

それで、もうあとはあまり、きかないで、顔を前列にすわつてゐる婦人のかげに隠し、うつむ

きこんで、こんどは妹を助け出す工夫ばかりを考へてゐた。

やつとのことで説教がすんだ。すぐ祈が始まつた。その祈に、おあきはまた泣かされた。新見先生の祈のなかにこんな文句があつた。

『――父なる神様、罪なくしてどん底にしづみ、罪惡の犠牲になつて貞操を蹂躪されてゐる多くの女性達をあはれませ給へ――』

その祈が、自分の妹のために特に祈られてゐるかの如く考へられて、おあきはベンチの下で、
『――ほんとです。神様、ほんとです。遊廓にきてゐる半分まではさうなんです。八割迄はさうなんです。どうかあの可哀相なお友達を憐んでください。特に神様、私の妹の文ちゃんを救ふてやつてください。どうぞ、どうぞ、これだけは早くお願いします――』

心よりの祈におあきは、みなと心をあはせて一緒に祈ることの嬉しさを、感謝した。

新見先生が祈をやめられた時も、おあきはまた妹のために祈りつゞけてゐた。

また「あゝみ光」の讚美歌が歌ひ出された時、おあきは祈をやめて、ベンチにまつすぐ坐つた。報告がすんで會衆は散つた。

しかし徳田夫人が、ぜひ新見先生にあつて行けといはれるので、あとまで残ることにした。

ama
boy

新見先生は講壇からおりて、多勢の人に次から次にあつてゐられた。たうとう順番がきた。

徳田夫人は、おあきを新見さんに紹介した。おあきは泣いてゐた眼をみられまいと、下向きになつてゐたので、新見先生はたゞ握手して、だまつてそこに立つてゐらした。

しかし、木村さんから話をきいてゐたとみえて、新見さんはおあきのことをよくしつてゐた。それで、おあきはなほ恥かしくて、顔があがらなかつた。

けれど、おあきは一つ頼まなければならぬことがあつた。それは妹のことであつた。おあきは顔をあげて、新見先生に依頼した。

『先生、一つお願いがあるんです。ほかでもありませんが、私の妹のことなんです……』

そこらあたりにはもう人影もなく、小崎老先生が反對側の事務室の前に立つてゐられたばかりだつたので、きかれても恥かしいと思はなかつたから、おあきは小聲でつゞけた。

『先生、私の妹も同じところにあるんです。それが氣にかゝつて仕方がないんです。また産業青年會にお世話になつてもいいでせうか？ 近いうちにぜひさうさせたいと思つてゐますからよろしく願ひいたします』

『いいですとも、いいですとも。』

鍛くちやになつたコールテンの服をきた新見さんは、トラホームで潰れかゝつてゐるやうな悪い眼をしばたゝきながら、親しみのこもつた聲で答へた。

妹の脱出

それから一ヶ月は、まもなく過去つてしまつた。復興事業に忙しい東京はすべてを全く區劃整理と建築のためにそそぎこんで、他のことを忘れてゐるかのごとく見えた。

新見も、毎日毎夜うち續く宗教講演會に、おあきのことを全く忘れてしまつてゐた。そして産業青年會の木村もその點において變りはなかつた。

しかし、おあきとしては一刻も妹のことを忘れることはできないで、いろいろの方法をとつて妹と通信を交してゐた。

若竹樓からにげ出した姉だと氣づかれては、折角の努力も水の泡になると思つたおあきは、わざと男の名前を使つて、妹と通信をつゞけた。それで若竹樓は、少しもおあきの通信を感じないでゐたらしい。姉はくわしく逃げ出す方法を手紙に書き、産業青年會に行く道順まで、くわしく書いて送つた。

十一月になつて、上野の櫻もみな葉がちつてしまつた。隅田川の水も水準が五尺程減つた。吉原も暮を前に控へて不景氣の日がつゞいた。

しかし、おあきの妹は廓に來てから日もまだ淺かつたために、遊びにくる人も多く、若竹樓にとつては大事な娼妓であつた。それだけ彼女には、苦しみも多かつた。けれど姉が吹きこんだ人間としての道は、彼女にとつて錢金に換へられない、貴い道筋を彼女に教へた。今日廓を逃出さうかと、そればかり氣に病んで、彼女は娼妓の生活にもうあきあきしてしまつた。

時がきた。ちやうどその日は、師走のつめたい雨のふつてゐた晩で、二日もつゞけの客が歌舞伎座を見物に行きたいといひ出した。若竹樓では、もちろんそれを否むことはできなかつた。それで客と牛太郎と彼女の三人は一つの自動車に乗りこんで、歌舞伎座に急いだ。

おあきの妹は、芝居に興味は少しもなかつた。たゞ牛太郎にうんと酒を吞ましておいて、この機會に逃出してやらうといふ計劃だけを、腹のなかにきめてゐた。

それで、客と牛太郎を食堂につれこんで、牛太郎の好きなウキスキーをうんと飲ませた。客も牛太郎も前後もわからぬほど酔潰れてしまつた。酔潰れた二人の男を二階観客席に送りこんだ彼女は、便所に行つてくるといつてすうつと劇場をぬけ出してしまつた。

その時、外はからからに晴れて、師走の寒い風が、襟筋から肌の方にしみこんだ。妹は注意ぶかくあたりをみまわした。けれど、別にあとをおつけてくる様子もなかった。で、思はずほつと息をついたのであつた。

とにかくおあき姉さんのところへ……

彼女は電車線路を二歩あゆみながら、どちらの方へ行けばよいのだらうかと思案した。「天の神様が助けていらつしやるのだ」



口のなかでそんなにいひながら、彼女は、歌舞伎座の前を通つてゐるタクシーをすぐ呼びよせ、素早くとびのつて、クツシヨンのなかに身をしのばせながら、姉のとまつてゐる下谷車坂にある青バス車掌の寄宿舎へ、と急がせた。

氣にかゝるのか、妹はたびたび小さい後の窓から後の方をふりかへつてみたが、一向それらしいものもみあたらないやうだつた。

妹を乗せたタクシーは三越の前から萬世橋のガードをくぐつて、勢よくかけていった。初めて訪ねてゆく姉のすんでゐる寄宿舎とは、どんなものだらうか、といろいろ考へてみたが、吉原以外はどこをも知らない妹には、全く想像がでなかつた。

タクシーは寄宿舎の前にとまつた。

『本所まで行くんですから、一寸まつてください』

妹は、なげつけるやうな早口で、運転手にいひのこすと、すぐ降りて、案内を乞ふた。姉はおどろきながら飛び出してきた。

『まあ……』

『早かつたでせう。自動車がまたしてあるの。すぐ本所へね』

『え、それがいゝわ。それでも逃げられてよかつたわね』
車掌服を着てゐる姉のおあきは、妹の手をかたく握りつゝ、自分から自動車のあるところへ急いだ。

『本所松倉町にあるキリスト教産業青年會へ急いで頂戴』
姉妹をのせたタクシーは、赤いテールランプを明滅させながら、本所へと急いだ。まもなく産業青年會についた。

おあき姉妹が、本所のキリスト教産業青年會の前でタクシーからおりた時、事務所の中は眞暗だつた。

『姉さん、こんなとこなの？、誰れもゐないの』

『ゐるわよ』

妹は、もの珍らしさうにバラック式の會館をみあげてゐた。姉は急いでドアをあけてみたが、その部屋には誰もゐる様子がなく、電燈も消えて暗かつたが、前にきたことがあるので、奥の方へとすん／＼歩いて行つた。妹は、たゞ黙つて姉のあとについて行つた。

その時、木村は、西側に建つてゐるバラックの自分の部屋のなかで、新約聖書コリント前書の註釋を、靜かに読みふけてゐた。木村にとつて仕事の終つた夜の時間を、聖書の研究に費すが、かれの日課の一つでもあり、樂みの一つでもあつた。

姉妹は木村の部屋の前で立ちどまつた。おあきは後を振りかへつて、妹に目くばせをした。

妹は微笑ながら軽くうなづいてから、襟をかきあはせたりおくれ毛をなでつけたりしてゐた。おあきはノックした。

『どなた？ おはいり下さい』

ききおぼえのある木村の柔かい聲が、戸の隙間からもれてくる光にとけあつて、響いてきた。おあきは扉のハンドルに手をあてて、ぐつと廻しながら引きあけやうとした時、もう一度妹の方に首をむけて、素早く相圖をした。妹は笑つてはゐなかつた。ある眞劍さが可愛い二つの眼底にくつきりと焼けつくやうに輝いてゐた。

『先生。とうとうきました』

おあきは、これだけいつてしまふと、急に胸がつまつたやうに感じたかと思ふと、思はず涙がこみ上げてきさうになつた。

『やあ、よく出てこられましたね。さ、遠慮しないでおかけなさい』

木村は急いで椅子から立ちあがると、姉妹のために椅子の用意をしたが、車掌服を着てゐるおあきの後に立つてゐる、令嬢風の美しい着物をきた女が、おあきの妹であることを直感した。

『さ、遠慮しないで。もう大丈夫ですよ。ここにはあなた方を苦しめる連中は誰れもゐませんか

ら』

木村は、つとめて自分からうちつけていつた。

『それでは失禮させていただきます』

おあきは軽く木村に會釋をしながら腰をおろしたが、それと同時に妹も腰をかけた。妹は兩手をつつましく膝の上において、じつと木村の様子をみつめてゐた。自分が、かやうに早く、こんな所へこられやうとは夢にも思つてゐなかつたので、もし木村から何か質ねられたら、なんと答へやうかしら、などと、小さい胸を軽く苦しめてゐた。

この前の經驗もあり、産業青年會にゐることは、至極危険であると氣づいた木村は、赤坂の徳田夫妻の家が、おあきの妹の隠れ家に最もよいと考へたので、その晩は一ト先おあきの妹を徳田氏宅にかくすことにきめた。

それで、三人はまたタクシーを走らせて、赤坂新坂町の徳田夫妻の家までやつてきた。

静かな静かな藝術家の古巢を愛慾の双で掻きみだすことは、すこぶる耐へがたいことであつたが、そこは宗教的訓練をうけてゐるだけに、徳田夫妻も心得てゐた。

おあきが、妹のふみ子をつれてきた時でも、徳田夫人は妹が、郷里から新しくきたかのやうに

歓迎した。そして徳田も、新しい客が加はつても、何等生活の様式をかへることはなかつた。彼が寫生したダリアの繪は、秋の帝展に入選したばかりでなく、特選にいり、そして長き邊りのお買上品となつた。

水のやうに恬淡な徳田は、自分の家がせまいので、近所の小學校の書室をかりて、あひもかはらず毎日のやうにそこへ製作にでかけた。そして徳田夫人も朝早くから幼稚園の先生として家をあけた。その留守の間にふみ子は田舎でしてゐたやうに、臺所をかたづけ、家の拭掃除をすませて、徳田夫人が午後三時すぎにふたゝび家に歸つてくるまで、洗濯をしたり、雑誌をよんだり、一人で留守番をした。

こんな静かにしてゐるふみ子とは反對に、新吉原の方では大騒ぎであつた、淺草區會議長をつとめてゐる蟹屋樓の主人湯島時行は、ふみ子が行方不明になつた翌日、若竹樓の女將の訪問をうけた。

『かう毎度々々、自由廢業が多く出ちやもう商賣になりませんから、どうにかあなたのお力で、自由廢業のできないやうな法律を一つ作つていたゞくんですね』

さう女將が半分おべつかをまぢへて湯島にいふた。若竹樓の女將は、もとく品川で鳴らした

花魁だけあつて、どことなく玄人筋の顔つきをしてゐた。着るものも普通とは違ひ、襟に黒縹子をかけてゐるなどは、今時廓の外側ではみられない風采であつた。長く島田髻を結ひならしてゐた關係でもあらう、額を馬鹿に氣にして、眉毛と眼の間が一寸以上ものびてゐた。近頃の若い人々は、書物に熱心になるためでもあらう。不思議に眉と眼の間が短くなり、色町の人々とはちやうど反對の傾向をとつてゐるが、若竹樓の女將は、一目みてすぐそれと感づくやうな眼と、眉毛をもつてゐた。

蟹屋樓の主人

女將は湯島がよい返事をしてくれると思つてゐた。ところが、案外その答は彼女の腑におちなかつた。

『おせきさん、もうそろ／＼我々も考へにやアならんぜ、いつまでもなア、文化文政の時のことを考へて、吉原中心の文明がつよくと思つたら間違だぜ。あなたもしつてるだらうが、國際聯盟といつてな、世界中の國々が組織してゐる一つの組合のやうなものがあるんですよ。それが申合せてな、公娼制度はぜひ近い中に破壊したいときめてしまつてゐるんぢや。だから、おそかれ早

かれ、この吉原もお上の命令で叩きこわされるのは、もうみえすいたことなんぢや。だからさ、いつまでも娘の血をすふて、うまいことをするといつたやうな考へをしないで、もうそろ／＼こんな悪い商賣から手をひくやうな計畫をたてんといかんと思ふがなア』

若竹樓の女將のおせきは、びつくりしたやうな眼をみはつて、

『旦那、するとなんですか、逃げられたものは逃げられ損ですか？』

『まあそんなこつたね、まさか自由廢業に保険をつけるわけにもいかんだらうしなア』

『それはこまりますね。私のところは高い日歩をはらふて、やつといゝ「玉」を手に入れたと思つたら、わずか半年もたゝぬうちに逃げられたものだから、まるで二千五百圓棒にふつてしまつたやうなものですよ、訴へて行くところはなし、娘の在所は不明だし、警察はしらんといふしあなたにでも泣ついて、どうかしてもらひたいと思つてゐるのですけれど、あなたがさういふ御意見でしたら、もう首吊るか身投げするよりほか仕方がありませんね』

湯島は口にくわへてゐたシガレットの灰を長火鉢のなかにたゞきおとし、また言葉をつゞけた。『だけれどね、おせきさん、時代の趨勢つていふものには勝てんよ。わしがよく組合でもいふやうに、もう時代がかうなつてきたんだから、いつでも店が畳めるやうに準備しておかなくちやい

かんよ。つまり何だね、女郎屋の稼業も、こゝ十年とはつゞかんだらうね……」

おせきは、びつくりしたやうな目つきで疇高くさげんだ。

「そんなに短いもんでせうかね、お宅様のやうに、借家を何百軒といつてお持ちでしたら、さしづめお困りにはならんでせうけれど、私方のやうに日歩の金をやりくりして小さい店を張つてゐるところでは、そんなことがあつたら大變ぢやありませんか」

「さあ、そこぢやつて、九州の人見君などは頻つて、遊廓聯盟をつくつて國家は須らく遊廓を保護せよなど、大きなことをいつてゐるけれども、あんなことは僕は感心せんね。僕は元來、遊廓などは人の前で大聲でいふべきものではなく、元來が不道德なことをすゝめるのだから、それを如何にも不道德でないかのやうに、人の前に出しやばるのはよくないと思ふね。國家としても、不道德だけれど、仕方なしに許してゐるのだから、あまり公にしないで、こつそりと營業してゐればいゝんですよ。それを裁判所に訴へたり警察署に出たりしてゐると、かへつてそのために輿論が高くなり、それが新聞に出る、若い娼妓がそれをよむ、するとまた自由廢業が出るといふ具合で、秘密のことを秘密にせんから、經濟が持たなくなるんだと僕は思ふね、遊廓聯盟は結局蝮蛇に終るにきまつてゐるよ。……おせきさん、あなたのところも遊廓聯盟に入つてゐるだらう？」

おせきは逃げられた娼妓のことが氣になつて仕方がないけれども、新吉原の習慣として女將ともいはれるものが、女俠客の態度を失つてはならぬと人にもいはれ、自分にも考へてゐるところから、わざとど膽をすえてそこにすてられてあつた長煙管と煙草をとりあげ、やけ氣味になつて煙草をすひ始めた。ところが、新吉原でもみんなに尊敬せられてゐる蟹屋の主人公までが、自由廢業に賛成するものだから、おせきは氣がきちやなく、その上遊廓聯盟のことまできかれるので、何のことだかさつぱりわからないで、

「一體、あれは入つたらいけないのですか？ 毎月私のところは五十錢づゝ會費をかけてゐるんですが、お隣の明春樓さんはいつておけ、はいつておいた方がいゝといはれるもんですから、毎月會費だけは納めてゐるんです」

「僕は感心せんね、結局、あんなことをして毎月何千圓か金をあつめて馬鹿騒ぎしたところで、自己の不名譽と不道德を世間にさらけ出すやうなことになるのだから、世間の進歩に順應して、今までかけてゐる資本が損にならんやうな程度で、一日も早く廢業するやうな準備をするといゝと思ふがね」

『さうなると、何ですか、あの玉の井のやうな風にでもやつて行く方が賢いのですか？』
『さあ、どうなるかわからんけれども、結局は日本でも、早晚女郎屋が全部なくなつてしまふ日がくると思ふから、自由廢業といふものは、これからいつでもあることと思つて腹をきめておかんといかんね』

おせきは蟹屋の主人公の言葉に弱つてしまつた。それが實際人間としての正しい道であるとは考へられる。それに對して一言も反對すべき理由がない。

しかし、さういふてゐては、高い日歩の利子をはらへないのみならず、新吉原から夜にげでもしなければならぬ。世間のことにくらい年増女は、どこに行つて落つかうといふめあてもつかず、結局人の血でもすすつて、生きて行くより道はない。悲觀してしまつたおせきは、もう一度ききなほした。

『大將、さうすると、なんですか、新吉原も近いうちに閉鎖せよといふ命令が警察からでもきますか』

『いや、さ、そんなにさしせまつた問題でもないけれどな。一昨年の縣會では、福島縣と福井縣と埼玉縣と秋田縣の四縣が、公娼撤廢の決議案を通過さしてゐるし、去年もなか／＼地方の縣會

ではやかましい議論があつて、一、二縣公娼廢止の決議案が縣會を通過したと思つてゐるがね。さういつた風に次から次に各縣がきそふて公娼制度を廢止するやうになれば、いつの日にか必ずそれが新吉原に飛火するのはあたり前だから、この大勢には勝てんよ。そのことをしつておかん、と、いざといふ時に慌てるからな。あなたのところだけでない。たゞ慾だけに目がくらんで、大勢に順應せんといかんと、僕は思ふんだよ。こないだでも見給へ。あのさ、鳥井君がやかましくいつて、君のところの花魁が逃げたときに、あれだけ騒いだけれども、結局何もならなかつたぢやないかね。そののみならず新聞には大きく書かれる、娼妓が面白がつて、あれを讀んで、あれから一體何人逃げたかね。あんなに大きな問題にしなければかへつて僅かの損害ですませるものを、あまり大きく騒ぎたてるものだから、事件が擴大して吉原だけでも、あれからのちに十人以上も逃げたらうなア。だから逃げた場合にはあまり大きく騒がないで、親元とこつそり相談するなり、損をしない程度で貸借關係はあつさり片づけた方がいゝね』

神田あたりの私立大學を卒業したといはれてゐる蟹屋の主人公は、なかなかわかつたことをいふのだつた。おせきは全くたまげてしまつて、開いた口がふさがらなかつた。

『大將、ぢやア、私も女郎屋なんかやめて、堅氣な商賣にでもうつりませうかね』



『まあさうしたがいいね、早く。いやさ、この間もね。惠美須樓の息子がこんど中學にはいらうといふんで、親が私のところに保証人になつてくれといふてきたから、私はことわつたのだよ。子供も女郎屋の亭主に保証人になつてもらつたといふのでは肩身がせまいし私は誰かしてゐる者があれば、堅気な者に保証人になつてもらへばいいといつて、歸つてもらつた次第だがね。實は家の子供も明治學院の中學部の四年生にはいつてゐるんだがどうも子供の煩悶をみるにつけても、早くこの商賣をやめたいと思つてゐるんだよ』
鬼のやうな心をもつてゐたおせきも眞剣になつて、湯島が話するものだから、

『なるほど、ごもつともです。さうでしたね、お家には大きな坊ちやんがいらしたたのでしたね』
さうおせきはいつたものゝ、さきにはおあきで千六百圓損し、こんどまたふみ子で千五百圓棒にふるといふことが、如何にも苦しいので、それをどうして高利貸しに拂はうかといふことのみが頭のなかに一杯であつた。湯島はすこぶる眞剣で、なほも言葉をつゞけた。

『うちの子供はできるだけ家に歸つてこないやうにすすめてゐるんだが、このあひだもキリスト教の洗禮を受けたいといつてきたものだから、そりや善いことだ、お父つあんはこんな罪な商賣を親爺から受けついで、面目なくてこまつてゐるから、お前だけでも本心に立歸り、眞直な道をふんでくれといつた次第だつたがね、私はもう整理がつき次第吉原から足をあらはうと思つてゐるんだよ』

おせきは、湯島の大將が眞面目になつて女郎屋廢止の話をつづけるものだから、氣も滅入つてしまひ、湯島の顔をちろ／＼ながめながら、どんな挨拶をしていゝかわからなくなつてしまつた。

『大將のいはれるのがほんとうですね。だけれど私は何だか耶蘇がきらひでしてね。性分にあはないやうな氣がするんですよ。アーメンとかソーメンとかいつて、口のなかでぶつ／＼いひます

ね、あれが癪にさはりましてね、……それに誰をみても罪人よ罪人よといつてゐるやうですがあれは一體日本の國をとりよきた宗教と違ふんですか？」

「いまどき、そんなことを考へていちや、おせきさん、困るね。耶蘇教はいゝ宗教ですよ。おせきさん、あの道端で説教してゐるのは通りがかりの人に説いてゐるだけで、奥の奥まで教へてくられてゐるんぢやないがね、あんたも少し暇があつたら聞きに行つてごらんよ、耶蘇教ではな、天地の神様つていふのが根本なんだ」

「ふん、さうですか、やはり神様をやかましくいふんですね。すると御本體は神様ですね。その神様といふのは名前は何ていはれるんですか。あのキリスト、キリストつていふのは、あれが神様ですか？」

「おせきさん、耶蘇教の神様はね、天地の神様が中心で、世界中をつくつた神様が御本體で、それを信仰してゐるんですよ。それは人間でもなければ、人間が名前をつけるやうな小さい神様ぢやないんだよ。だから、日本の村々町々に神様があるやうなのでなくて、天地の神様が一人しかないといつてゐるんです。あのキリストといふのは、天地の神様のお使ひとして地上にお生れになつた方をいつてゐるんですよ」

「蟹屋の大將も、ずいぶん深いことをしつていらつしやいますね。折々教會にでもお行きになつたんですか？」

「いや、息子がね、こんど洗禮を受けるといふもんだからわしも決心したんです。それでわしも息子から、キリスト教のバイブルといふものを借りて、まあ讀んでゐるわけなんですなア。それでもうこんなことをしてゐるのが厭になつてしまつて、買手があればできるだけ早くこの店をゆすつて、山奥へでもはいつたりしてみたいと思つてゐるんですよ。アハハハ……いや人生といふものは、うるさいもので、ことにこんな稼業をしてゐると、人生はあまり悲しいから、私も洗禮を受けて改心したいと思つてゐるんだが、おせきさん、一つ私と一緒に改心せんかね」

フランス流にかりこんだ髪をなでながら、四十を僅かこしたばかりの、吉原きつての顔役、湯島時行は至極眞面目にさういつた。

おせきは、からからつと軽く笑ひ、よく玄人の女がするやうに襟をちよつと突かせて、煙管の雁首に刻み煙草をつめながら答へた。

「大將、改心しますが、五千圓ばかりの借金をはらつてくださいますか、さうすればもう今日から改心します。改心しても高利貸が追駆けてくるんぢや、何の役にもたちませんからね。何か

その邊り、うまいことをする工夫はありませんかね？」
さういつてゐる處へ若竹樓の牛太郎がはいつてきた。

「おかみさん、警察から電話ですぜ。あなたでなければわからんさうぢやから、はやく歸つてく
ださいよ」

内庭から牛太郎は大きな聲で、
火鉢の前のおせきを呼ばはつた。

「また呼出しかなア、抱えには逃
げられる毎日毎日呼出しはくふ、
ほんとにこれぢや全くたまりませ
んな、ねえ旦那、お願いだからさ
うあなたも仰つしやらないで、一
つ骨折つて下さいよ」

急ぐといつてゐた牛太郎は、のこくあがつてきた。そして火鉢の前に坐りこみ、

「おかみさん、話はどうきまつたんです？　あまり腰がよわくつちやア、次からつぎに女郎に



げられますぜ、わしはほんとに、あの日本堤の署長をぶんなくつてやらうかと思つてるんだがな
ア、いつも女郎の方ばかり味方しやがつて、こんなこつちやどうも仕様がないですよ。お女將さ
ん、話はどうきまつたんです？」

牛太郎はそばにすてゝあつた「朝日」の袋を無断でひきよせながら、その袋のなかから一本の
巻煙草をとりだした。

「こちらの旦那がいはれるのにさ。あまりちたばたしても時世が時世だから、おちついてやれと
いはれるんさ」

長火鉢で巻煙草のさきに火をつけかゝつた牛太郎は、

「おちついて？　次からつぎに女郎に逃げられて、おちついてもおれんぢやないですか。しかし
困りましたなア、旦那、こんな時に一つ肌ぬいでもらはんと、小さい店は、もうもつてゆけませ
んぜ」

さういつてゐる處へ、蟹屋の女將たき子がいつてきた。おせきにも牛太郎にも叮嚀にお辭儀
をして、小さい聲で夫にさゝやいた。

「貞彦からいま電話がかゝつてきたんですがね、修學旅行にゆくから小遣を二十圓くらゐ呉れと

いつてきましたか、やつてもよろしうございますか？』

『うム、誰かにもたせてやるのか？』

『いえ、私がつてこようと思つてゐるんです。だん／＼寒くなりますし、外套もいるだらうと思ひますから、ちよつと寸法をとりにつてこようと思ふんです』

湯島の妻は貸座敷の女將とは考へられないほど、しまりのいゝ顔をしてゐた。學校も府立の第三高女をでてゐる位で、子供の教育には熱心であつた。彼女の注意の結果、長男の貞彦をわざわざ麻布森元町に住まつてゐる佐藤博先生に預けたのだつた。

佐藤博先生といふのは、長らく麻布の小學校の校長をせられてゐた方で、湯島の妻たき子が小學校で教はつた人であつた。佐藤先生は熱心なキリスト教信者で、たき子もかつては佐藤先生の教へてをられたキリスト教の日躍學校に出席したことがあつた。さうした關係もあつたために蟹屋に縁づいてから、子供の教育についてほんとに心配した。

そして、子供が中學校に出席するやうになつてから、新吉原においてをくことが非常に心配になつたものだから、特別にキリスト教の家庭をえらんで、教育したいと考へたたき子は、貞彦を自ら佐藤先生のところにつれていつて、そこから明治學院の中學校にかよはせた。蟹屋の主人公

が、時代をとくのは全くかうしたことが原因の一つになつてゐた。おせきは、愛想よくいつた。

『もうお坊ちゃんはそのなになに大きくおなりになつていらつしやるのですか、お楽しみですね』

『お蔭様で身體だけは大きくなりましたけれど、稼業が稼業だものですからね、どうも氣がおちつきませんで、近頃は父の稼業を心配してきまして、早く廢めてくれやめてくれといつてきますんですよ。なんでも、肩身が狭いんですつて。父の職業をきかれると、貸座敷と書けないもんですから、地主とかいてみたり、金貸業とかいてみたり、いろ／＼苦心してゐるさうなんです。』

ほほほ……』

たき子は相手の氣持をはかりながら、軽く挨拶をしてしまふと、奥にはいつてしまつた。おせきが座をたつて牛太郎と二人で家に歸らうとすると、表から鳥井がはいつてきた。

『おせきさん、あらアやつぱり駄目ぢやなア、署長はどうしても聞いてくれんよ。執達吏をあの家にやつて差押へでもするか？ さうしてもあまり効目がないしなア』

脊の高い細眼の鳥井は、風邪をひいたのか、ガーンを頸にまいて元氣なさそうにさういつた。『一體、法律といふものは役に立たんものぢやなア、金を千圓も千五百圓も貸しておいて、その金がとれんといふのはをかしいことぢやなア』

牛太郎は、散髪したばかりの角刈の髪を、上になであげた。

「一つ警察であられるかな」

「そんなことをしても駄目だしなア、結局は公娼制度は破壊せられるものと考へて、準備せんといかんものかなア」

若竹樓の女將と牛太郎と鳥井の三人が、蟹屋の玄關を立ちさつた後、電報配達夫がいれかはつてはいつてきた。蟹屋の女將たき子がそれを受とつて、夫に手渡すと、夫は色をかへて、

「人見君も無茶をいふなア」

たき子は、夫が投げすてた電報をとり上げて、それを讀みくだした。

「ゼンコクユウカクゲ フシヤノケツソクヲハカルヒツヨウアリ」コウベニテタイカイヲヒラク」ホツキニシナラレタシ」

「なんですか、つまり全國の貸座敷の商賣してゐる人達だけで大會でも開かうといふのですか？あなたお出ましになりますか？」

「人見君はこんなにして騒ぐのが好きなんだね。騒げばさわぐほどかへつて輿論を喚起して、自分の手足を縛るやうになるんだが、人見君にはわからぬのだね」

「やはり發起人におなりにならない方がいゝでせうね。私はこの際すつかり店をたたんだ方がいいと思ふんです。少し位損してもいゝぢやありませんか、こんな汚はしい商賣をしてゐては、子供の教育になりませんから」

「しかし、なんだぜ、お前、この不景氣にこの大きな店を買ふてくれる人はないよ。やめるつもりなら五、六萬圓損することを決めておかんと、賣れるつもりにしてをれば、いつまでたつても埒があかないぜ。お前にそれだけの金を損するだけの勇氣があるかい」

長火鉢の前に坐りこんだ湯島時行は、妻のたき子の顔を見つめながらさういつた。

「私は、襤褸をきてもいゝですよ。早くこんな商賣をやめてしまひたいですわ。人の貞操を弄んで儲けた金ですから、みんな抱へにわけてやつて、家の始末をすると思ひますね」

妻の急進論に湯島はだまりこんでしまつた。そこへまた日本堤の高等刑事、藤田泰一が、のこくとはいつてきた。彼は、如何にも高等探偵らしく、頬ににがみの走つた皺が寄り、眉間には不規則な縦皺が三本もはいつてゐた。

「湯島君どうだね。近頃は娼妓が瀧々と逃げるね、警察でも處置にこまつてゐるんだが、組合長としてどんな意見をもつてをられるんだね」

高等特務の藤田は長火鉢の傍に坐りこんだけれども、湯島は彼の顔さへみなかつた。そして、相變らず物思ひに沈んでゐるかの如く、妻のたき子と瞳を合せて考へこんでゐた。

高等刑事の訪問は、近頃ほとんど毎日のことで、湯島にとつてはあまり珍しいことでなく、多少うるさいといふ氣持もあつた。それに藤田は女にはきたない方で、新吉原でもあまり評判のいゝ刑事ではなかつた。

そんなことから湯島は、彼を排斥するでもなければ、歡迎もしなかつた。それで無案内ではいつてきた藤田に對し、ろくろく挨拶もせず、すました顔をして他處見してゐた。しかし、藤田はまた平氣で豪然とそこに坐りこみ、面白さうに話題を若竹樓の自廢問題にもつて行つた。

「若竹樓のおせきさんは、ずるぶん弱つてゐるやうだね、震災記念日の前の晩に逃げたおあきの妹がまた逃げたんだつて？ 泣つ面に蜂といふのはあのことぢやろな。あなたは何とかおせきさんのためにしてやらんのですか？ 署長の意見ではあなたの態度さへきまれば、どうにでもするといつてますよ。それで署長が私にきいてこいといはれるのだから、あなたの意見をききたいと思つてきたんですがね、署長にどういひませうか？」

やうやく湯島は鈍いモーションをとつて、首だけ、藤田の方にまわし、かれの顔をちよつとみ

て、また火鉢のなかをのぞきこんだ。

「しかし、時代が時代だからね、藤田君、騒げばさわぐほど、この問題はわれ々には不利だね。元來が大きな聲で人の前でいふべき商賣ぢやないんだから、あまり表だつて騒がない方がいいんだ。すでに今年の春の縣會では、埼玉縣も秋田縣も、福島縣も福井縣も、みんな遊廓廢止の決議を通過させたんだから、もう時代の趨勢には勝てないと思ふね。かりに僕らが腹をきめてあくまで大衆を相手にして戦ふにしたところで、天下の輿論が自由廢業に賛成ならいくら騒いだつてだめだよ」

朝日の袋から、寒煙草一本をとり出して、いかにもうまさうに吸ひ出した藤田は、
「えらい湯島君も腰が弱いね、そんなことをいつとつたら、新吉原七百の娼妓がみな逃げてしまふよ。そしたら君らはどうするね」

「あゝ、逃げなければ逃がすさ。その方がすつぱりしていゝぢやないか。僕らは何も好きでこの商賣をしてゐるわけぢやないし、親がこの商賣をしてゐたから、うけついでまでだし、不幸なことには親爺がつまらぬ大學にいられたものだから、鋤はもてないし、鉈はもてないし、こんな不淨な商賣にかちりついてゐて飯を食はしてもらはなければ食へないから、やつてゐるので、僕の眞

意は公娼全廢論者なんだ』

シガレットの灰をたきおとした藤田は、いかにも淋しさうな表情を表して答へた。

『うむ、君の公娼制度全廢論は今に始まつたことでないから、よくしつてゐるがね。しかし、高橋君などは、君の腰が少し弱すぎるといつて憤慨してゐたよ』

高橋といふのは大正十二年の九月一日の大震災當時新吉原貸座敷業の役員をしてゐて、地震のときに逃げて行く娼妓を逃がさないやうに、廓の大門を閉ざし、その結果數百名の娼妓が焼死するやうな運命になつた、その鬼親爺の高橋傳吉といふ男のことである。

そのことがあつてから、廓では「鬼傳」、「鬼傳」といふあだなが彼にあたへられ、娼妓仲間では、東傳に組合の重要な役をあたへるなら、ストライキをやるといつて騒いだこともあつた。

『うむ、高橋君は、あれは人見の子分だからそれくらゐの考はもつてゐるよ。けれど、今どき、あんな保守的の考をもつてゐちやア、娼妓の一人だつてこの廓に長續きしやしないよ。娼妓は、人形と違ふから、可愛がつてやりさへすればゐる氣にはなるけれども、機械のやうにこき使へば、みな逃げる氣になるんだよ。逃げたければ自由に逃がしてやり、をりたいものは、自由にをつて、親の借金でも拂へといへば、われ／＼の親切に共鳴して、決して逃げ出したりするも

んぢやないよ。その證據には、うちの妓どもを見給へ。僕が親爺の後嗣ぎしてから、もう二十三年になるが、自由廢業なんかするものは一人もないぢやないか。それどこぢやない、若竹樓にゐた抱えさへうちにきたいといつて、手紙を送つてきたものさへあるぢやないか。しかし僕は、他處の抱えをうちにとり込むことなんかいやだからね、そんなことは絶対にしないが、自由廢業をして逃げだすといふやうな家は、抱えの方よりか、抱えてゐる方に多分に缺點があるね。妓どもの方にはあまり金をわけてやらないで、計算をごまかしたり、娼妓の幸福は考へないで、休日花をやかましくいつたり、四年も五年も働いても、まだ借金が嵩むやうなことを、計算書に書きだすから、娼妓が怒つてしまふんだよ』

あぐらをかいて、うまさうに煙草の煙を鼻から吹き出してゐた藤田は、天井の方にのぼつてゆく煙草の煙をみつめながら暢氣さうにいつた。

『そら、たしかに君のいふ通りぢや。そらア、高橋さんのやうな無茶苦茶をいふと、娼妓もたまつたもんぢやないよ。しかし、君のやうにいふたら娼妓は、一文も拂はずにみな逃げだしてしまやしないかい？』

『わからんことをいふな、君も、こつちなぞは二十數年間に自由廢業をした女は一人もないとい

つたぢやないか』

『だが、高橋など、だいぶ逃げられたさうぢやね、最近四年間に六人位逃げられたといつてゐるよ。』

『そら、あたり前だよ。あすこはろくく娼妓に飯を食はさんぢやないか。食ひたければ、客にねだつて腹をこしらへるといひつけるさうぢやないか。それにあしこはすゐぶん首つるな、君』
長火鉢によりかゝつた湯島は眞鍮の金火箸で、灰の上に秋といふ字をくりかへしくりかへし書いてゐた。首つるといふことがをかしく響いたとみえて、高等刑事は笑つた。

『實際あしこはよく首つるなア、今年になつても二人か？ 一人は猫いらすを呑みよつたなア、去年が一人、一昨年が二人、いや僕が日本堤署に變つてきてから、もう五人かな、あしこは確かにひどいとみえるなア』

そこだと見究めをつけた湯島はすかさず藤田にきりこんだ。

『しかし、君は、高橋に女房を世話してもらつたんだらう？』

『世話してもらつたといふんぢやないはずだがね。まあ、さういへばさうもいへるがな』

藤田はあいまいな返事をした。湯島はさうした言葉を決して不思議とは思はなかつた。これまで

で藤田は、高橋の抱え娼妓が逃げるたびごとに、随分奔走してつかまへて歸つてきたことも二度や三度ではなかつた。

その關係で、藤田は高橋と親しくなり、高橋の妻の姪で、彼とは年が十一も違ふ若い娘を、先妻が死んだあとに二度目の妻としてもらつたのであつた。

根を洗はれた藤田は、少からず官僚氣質を發揮して、すんでのことで妙なことをいひ出した。

『ぢやあ、湯島君、署長にいふとくぞ。君の意見は公娼全廢論で、娼妓が逃げても放つとけといふ意見だつて』

『おい、おい、藤田君、僕は何も放つとけなんか、いやしないよ。たゞ大勢に順應するといつてるだけなんだ』

電話がかゝつてきた。妻のたき子が立つてきくと、それは高橋からの電話であつた。

『神戸の大會に行らつしやいますかときいていらつしやいますよ。高橋さんの御意見ではあなたが組合長であるだけに、せひきてもらはなければいけないといつていらつしやいますよ』

『組合の役員會でもひらいてからそれから決定するといつておけ』

師走が近づいた。世間は不景氣だといつて、農村には物々交換さへ行ふ時代がきた。そんなことに刺戟されたか、湯島の惣領息子貞彦は、十一月三十日に芝區白金臺町の日本キリスト教會で洗禮をうけるやいなや、父と母とに書留郵便をだして、それきり姿をかくしてしまつた。

その手紙の内容はかうだつた。父母の恩は深いけれども、神をあざむくことはできない。私は斷然意を決して神の子にしてみらつた關係上、人身賣買のはづかしい稼業にたづさはることは出來ない。それで私はこの際決心して、一生弱者貧民のために奉仕生活を送ることにした。それで、しばらくの間神に祈るために、日本を放浪するから私を死んだものと思つてくれ……

この手紙をもらつた父の時行も母のたき子も氣が氣ぢやなかつた。ことに母のたき子は、死んだものと思つてくれといふ文句が、自殺を意味してゐるのぢやないかと、非常に心配し始めた。

「あの子は正直な子だから、家の稼業が恥かしくなつて、東京にをれないんでせうね」

さういつてゐる瞬間にも、たき子は早や泣いてゐた。それから、時行夫妻は八方手わけをして貞彦の行方を調べ始めた。しかし、麻布の佐藤博先生は存外平氣であつた。

「御心配はいらんですよ。湯島君は眞面目な青年ですから、實際自殺なんかしやしませんよ。私の考へでは多分神戸へ行つてると思つてゐるんですよ。湯島君は學校にゐるよりも、一生氣の毒な無産者の友となつて、働きたいといつてゐましたから、多分神戸へ行つたんでせうよ」

さういつてゐる處へ神戸から電報がきた。

「ユシマキタツレニコイニイミ」

「これは、西宮から打つてあるから、多分新見さんの家へ行つたとみえるな。こんなことだと思つてゐましたよ。湯島君は眞面目だから、決して心配はゐらんですよ」

佐藤先生はさういつた。

「ぢやあ、私がつれに行きませう」

湯島時行がさう答へた。

「神戸に用事もありますし、そのついでに行つてくれればいゝでせう」

「恰度十二月一日から、各府縣會の解散されてゐるに際して、一種の示威運動をするために、全國の遊廓業者が神戸に大會を開いてゐた。

湯島時行は新吉原の組合長としてそれに出席しなければならなかつた。けれど、彼は九州の親

分の人見とは意見が正反對だつたから、大會に出席するつもりではなかつた。

しかし、自分の子供が遊廓反對の決意を示し、後身相續を拒否してゐる今日、同じ勇氣をもつて大會に公娼全廢論を主張してみようとしてゐたものだから、意を決して大會に一日おくれて出席することにきめた。

神戸驛におりた湯島時行は、會場が楠公前の八千代座で開かれてゐることを、すぐピラによつてしつた。

場所も場所、南朝の忠臣楠正成が葬られてある、別格官幣社から、八千代座は一丁もはなれてゐなかつた。

景氣をつけるために萬國旗が、劇場の表屋根から、向ひ側の屋根までひつぱられ、神戸市内の遊廓から寄贈された花輪が七つ八つ表に並べられてあつた。全國から千二三百人の代議員が集り入口では一々正宗の塚詰一本と、折詰の辨當がわたされてゐるのには、湯島も吃驚してしまつた。その日の神戸の新聞をみると、どの新聞も競ふて、この大會を大きく取扱つてゐた。縣廳からも代表者がきてゐた。そして何やら妙な演説をしてゐた。その演説といふのは、公衆衛生の立場から遊廓の必要を主張した、まことに、徹底しないものであつた。

例の九州の人見が、全國遊廓同盟の會長をつとめ、役員達は演壇の上にとらりとならんで、氣勢をそへてゐた。湯島は、白バラの徽章を胸につけさせられ、無理に演壇の上にとらせられた。午前中の議事はすこぶる妙なもので、自由廢業を防止するために太政官令の布告を撤廢すること、秋田縣、福島縣、福井縣、埼玉縣の縣會議員を訪問して「存娼運動」をすること、そのために會費を増額し毎月貸座敷一戸一圓の割にて運動費を積立てること、廓清會、婦人矯風會、廢娼聯盟に反對する聲明書を發表すること。それらの決議を通過するたび毎に、千數百の遊廓業者は割れるばかりの拍手を送つた。

しかし、無學な人が多いとみえて、大會の席上で煙草をすばく吸ふものだから、會場は煙がもうもうとして、演壇からは會場の後まで見通すことができなかつた。なかには、塚詰の栓をとつてちびくちびくやつてゐる豪傑連もゐた。

午後一時から廢娼反對、貞操擁護演說會といふのが同じ會場で開かれた。その演説といふのがまた振つたもので、出る辯士、出る辯士みんなが、遊廓を食ひものにする破戸漢や壯士ばかりだつたので、言葉のきたないこと、また論旨の徹底しないことは、多少心得のある湯島をびつくりせしめた。

廢娼反對と、貞操擁護をひつつけた理由が面白かつた。一口にいへば、こんなことであつた。娼妓があるから、強姦や姦通が少いので、娼妓がなくなると、婦人の貞操を擁護することができないから婦人の貞操を擁護するために、娼妓をおいておく必要があるといふのが、出る辯士がどれもこれもくり返す論旨であつた。

なかには、少しは本をよんでゐるものがあるともみえて、アメリカの少年審判所の名判事ジャツヂ・リンゼーの言葉だといつて、アメリカに、娼妓がなくなつてから、處女の貞操があやしくなつたと、「近年青年の反逆」といふ書物から言葉をひいて演説してゐるものもあつた。辯士のなかには、聴衆を昂奮させるために、わざ／＼警察の攻撃を始めるものさへあつた。

人見は湯島に演説することを要求した。そして、厭だといふものを無理矢理に演壇へ突出して、紹介してしまつた。演壇に立つた湯島は、眞面目になつて、大勢順應論を説き出した。酒をのんでゐた連中は、杯をそこにおいて耳をすませた。煙草をのんでゐた者も煙草の火をけした。

「私は、大會にはきました、必ずしも公娼制度全廢に反對するものではありません。」
彌次が大向ふからとんだ。

「婦人矯風會の手先、ひつこめ！」

二階の傍聴席に廓清會の支部員がゐたとみえて、「謹聴、謹聴」と怒鳴るものがあつた。平場に腰をおろしてゐる連中が、二階をみあげた。湯島はなほも言葉をつゞける。

「元來、遊廓などいふものは、公然と商賣すべきものではなくて、隠れてこつそり、商賣さしてもらふのが當然だと私は思ふんです」

また大向ふから罵聲がとんだ。

「辯士、引こめ！」

「廓清會の犬！」

「ど畜生！」

「社會主義！」

「賣國奴！」

湯島は淺草區の區會議長をしてゐるだけに、實に落ついたものである。彼はなほも大聲で論旨を發展せしめようとした。

「我々は、貸座敷業をしてゐるけれども、日本の國を危くしてまでも、我々の經營をつゞける必要はないのであります」

その言葉に、会場は總立ちになつてしまつた。神戸福原の破戸漢が、五六人ばら／＼と演壇に立上つて、湯島に詰問を始めた。二階から『自由廢業賛成！ 遊廓撲滅』の宣傳ビラをまき散らすものもあつた。

『婦人矯風會の手先を殴れ、廓清會をやつつけてしまへ！』

さういつて、數十人の遊廓の代表者が二階に飛上つて行つた。そしてコイル天の洋服をきた、髪の毛の長い、労働組合の組合員らしい男を二人、二階からひきずり落した。

彼等が出て行くと、またあとにこのつた数名の者が、同じ種類の宣傳ビラを二階から下になげつけた。それには『遊廓をぶつぶせ！ 五萬の娼妓を解放せよ。無産者の娘の血をすゝる遊廓業者を撲滅しろ！ 無産政黨萬歳！ 純潔同盟萬歳！』騰寫版で書かれてあつたそのビラが、遊廓業者の間になげこまれるや、また／＼一騒動がおこつた。

そこで牛太郎の連中は、また二階にとびあがつて、その青年たちをつかまへようとした。するとつかまへられた品のよい、何處かの専門學校の學生らしい青年が演説を始めた。

『――遊廓業者は、無産者階級の血をすゝつてゐる。彼等吸血鬼を撲滅しなければ日本は救はれない。』

さう叫ぶやいなや、鐵拳が彼の頭の上に礫のごとくふつてきた。会場は全く麻のごとく亂れ、收拾がでさなくなつてしまつた。ついに、署長は解散を宣告した。解散を宣告した瞬間に、まだ二階の左の隅つこにもぐつてゐた一人の青年があつた。

『遊廓業者を葬れ』『白色奴隸を解放せよ』『無産者の娘を救へ』『人身賣買を禁止せよ』『無産政黨萬歳』『純潔同盟萬歳』

と、これまた同じく騰寫版で印刷した宣傳ビラを、二階から階下にまきちらした。この組織的反遊廓運動の宣傳に、千二百の遊廓業者も、全くどぎもをぬかれてしまつた。そのために數萬圓費して全國から集つた折角の大會も、何のために開いたのか、わからなくなつてしまつた。

折角の遊廓業者全國大會が蹂躪せられたことを憤慨した東京吉原の鬼傳は、三度目に宣傳ビラをまいた青年を目がけて、二階に飛びあがつて行つた。そして、彼は弱さうな、十五六歳の青年をとらへるやいなや、荒々しくそこに蹴倒した。

しかし、その青年は、鬼傳がいくら暴行を加へても全然無抵抗で、殴り倒すと起上り、殴倒すとまた起上つてきた。遊廓業者の暴行に對して何ら制裁を加へなかつた巡查も、新聞記者のゐる手前をつくらふために、のこのこ二階へあがつてきた。そして、ビラをまいた青年を檢束すると

いつて、舞臺裏につれこんだ。

その年のゆかぬ青年は鬼傳に殴りつけられて、額と齒から血を出してゐた。けれど、存外平氣らしくにこくしてゐた。舞臺裏につれてゆかれたものは、彼一人であつた。他の者はみなすぐ警察に連行された。連行の巡查が彼の姓名をきくと、その青年は悪びれず、

「兵庫縣武庫郡瓦木村高木、新見榮一方湯島貞彦」

と明瞭に答へた。

湯島といふ聲をきいて、そのかたはらで茶をのんでゐた高橋傳吉は、

「なに、湯島？」

さういひながら、つかくと、青年のそばに近づいてきた。

「君は蟹屋の息子か？」

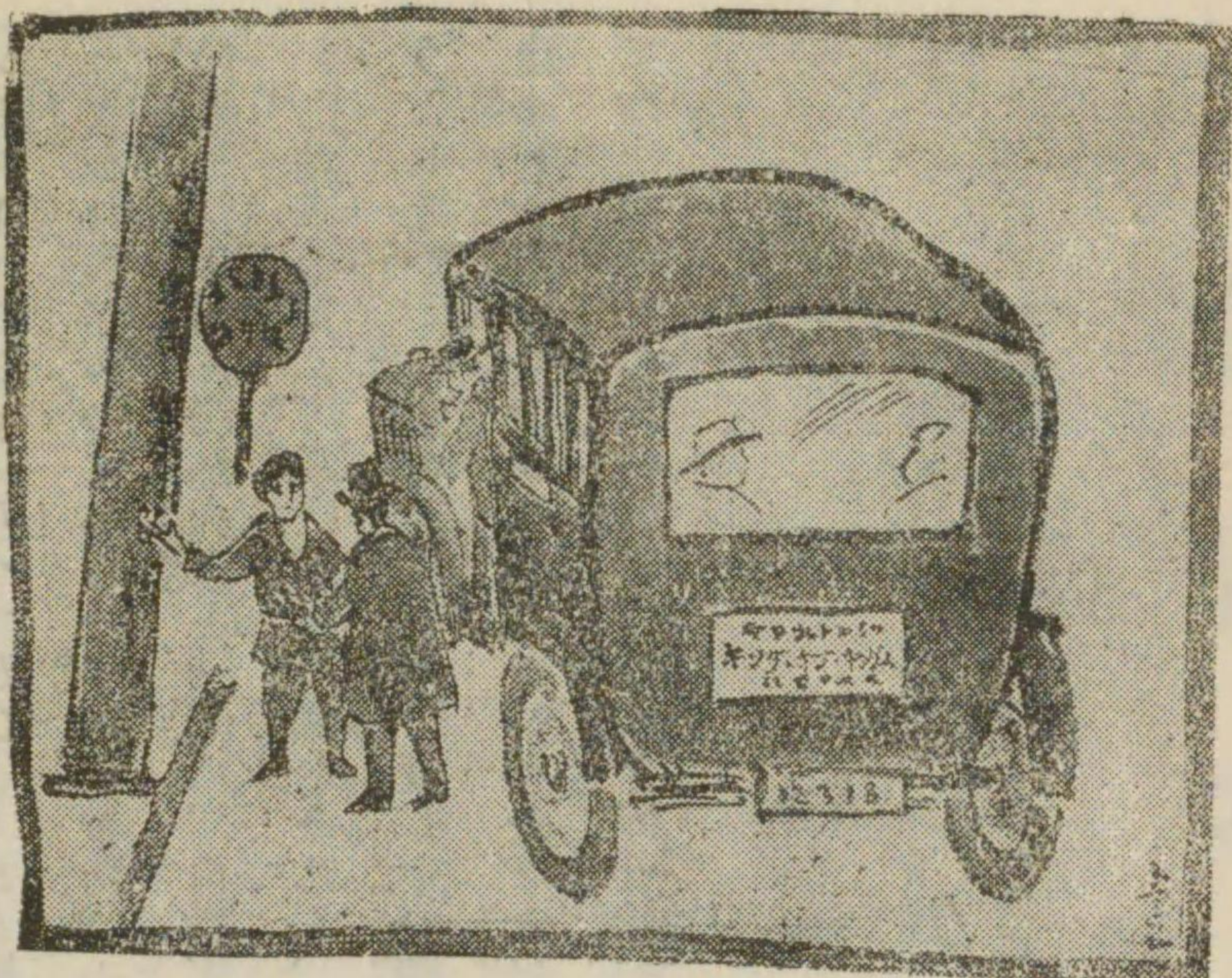
「さうです」

「君はお父つあんの商賣に反對なんだな？」

「さうです」

「お父つあんにあつたのか」

「もう家は廢嫡してもらつたんです」



することを決心して、父にその許可をえた。

みるからに可愛らしい中學校の制服をきた湯島貞彦は、平氣な顔をしてそこに立つてゐた。奥の方には大會に解散を命ぜられた口惜しさを、湯島の反對演説に原因があつたとして、人見が大聲で、湯島時行をのしつてゐるところであつた。

遊廓業者が一生懸命になればなるほど、輿論の潮は高まつた。さうして福井、福島、秋田の各縣は次から次に縣會で廢娼を決議した。馬鹿をみたのは遊廓同盟會長の人見であつた。東京へ歸つてからもなく、湯島時行は斷然店を畳んでしまひ、たゞ貸家業者として生計を立てることになつた。彼の息子の貞彦も學校を卒業した後は、キリスト教の傳道を

若竹樓の女將はおあきの妹のふみ子を公訴したが負けてしまった。ふみ子は銀座のデパートメントストアの賣子になつてかひくしく働くやうになつた。

こんな事があつてから一年がすぎた。十一月に開かれた靈南坂教會の特別傳道集會を終つた新見榮一が木村と湯島貞彦と一緒に、自動車にのつて本所の産業青年會へ歸らうとした。

自動車の女車掌は新見の顔を見ると、ニコ／＼笑つてゐた。そして新見の出す料金を受取らうとしない。自動車が隅田川を渡り中の郷元町でとまつた時、新見達はおりた。しかし女車掌は少しも金を受取らうとしなかつた。木村が女車掌がおあきであると教へらる迄、新見は忘れてゐたのであつた。「神よ、彼女を守り給へ」と祈りつゝ、新見は産業青年會へと足を向けた。

(をばり)

黄 昏 の 道

狭き門より入れ、滅にいたる門は大きくその路は廣く、之より入る者おほし。生命にいたる門は狭く、その路は細く之を見出すもの少なし——新約聖書マタイ傳第七章十三節——

—

もう表は暗かつた。通りの處々に電燈が灯つて、電車の軌道だけが、銀色に光つてゐた。夕闇が、空一面に蔽ひ被さつて、電柱と電柱の間に引かれた電線が、もう見えなかつた。

朝つばらから、『お藏前』の博奕場にのさばり込んだ彼、原田虎市にとつては、その日の一日はあまりに短かつた。今日も仕事を休んで、彼は太政官の乾兒、『剃刀の政公』の處へ、妻君のまつぼり金を捲上げて、朝の九時半頃に入つたきり、晝飯も食はずに博奕を打ち續けた。西日が背戸の格子戸からちよつと覗いたと思つた頃、少し勝ち目が見えたので、これは鐵工場に通うて、厭な鐵の埃を吸ふよりましだと思つたのも束の間であつた。日が隣の屋根に隠れる頃から、彼にはだん／＼勝ち目が薄くなり、午後四時過には、妻君から捲上げた五圓の金は勿論のこと、着て行

つた紺紉の袴から、眞岡の兵古帯まで、すっかり質屋に持つて行つて、その金までみな奪られてしまふやうな浮目を見たのであつた。

シャツと禪ばかりになつて、なほ戦ひ續けてゐたが、元も子もすっかり「剃刀の政公」に奪られてしまひ、難波の留公に漸く三十五錢を融通して貰つて、なほ五時過ぎまで打ち續けたが、それも本引きの「歌留多」が二度目に彼の手に入る前にすつかり、無くなつてゐた。

彼は怨めしげに、六人の仲間が、面白さうに打續けるのを見てゐたが、大體その日の勝負は、「剃刀の政公」の大勝利と決つたので、夕飯前に一先づ座を開くことにした。

シャツと禪一つで、政公の家を出掛けた虎市を見て、政公の妻君は親切にも、大阪人がよくする大巾のネルの腰巻を出してくれた。それを受取ることが如何にも面目ないと思つたが、禪一つで二十四五丁も歩いて歸ることが、あまりに耻かしいと思つたものだから、本意ないこととは考へながらも、

「ありがたう、明日持つてくるわ」

さう簡単に云ふた彼は、要領よくそれを腰に巻付け、表に飛出した。路地の入口までは、四人の仲間の者と一緒に出たが、南に歸るものは虎市一人しか無かつたので、黄昏道を彼はひとり歩

いた。

タクシーが走る。自轉車が軋ける。電車の大きなボーギー車が、銀色のレールの上を軋る。洋服屋、鞆屋、ペン屋、靴屋、傘屋、煙草屋、下駄屋と、廣い大通りの兩側には、場末であるとは云へ、相當に資本をかけた店屋がうち連なる。

それが如何にも虎市には平和に見えてならなかつた。何故自分一人がかう苦勞し、こんなに悶えねばならないか。洋服屋の店先に吊るしてある服一着ありさへすれば、また一勝負やるだけの資力のあるものを、なぜ自分だけに金が廻つてこないで、人の家にはこんなにも有り餘る程澤山の富が集められてゐるか？

裸體一貫で街中を歩いて行く原田虎市にとつて、大大阪の日本橋通りは、如何にも奇妙な處に見えた――

「――さうだ、みんな運命だ。今日の日が悪いんだ。今日は友引きの日だ。こんな日には、工場に行つても、博突場に行つても、縁起のいゝことはねえんだ。それが氣懸りだつたから負けたんだ。――

電燈の灯つてゐる店先を外して、わざと車馬道を歩いてゐると、灯の點けてゐない自轉車に屢

々打衝かるやうになる。その度毎に、虎市は、
『馬鹿野郎、氣をつける！』

さう大聲に怒鳴つて、博突場で負けた鬱憤を罪もない道行く人間に向つてはらすのであつた。彼の頭の中には、その日彼が負けた本引きの歌留多の目が、活動寫眞のフィルムのやうに浮んでくる。さうかと思ふと次の瞬間に、女房の頭をしこたま殴り付け、箆の底から、彼女が平素貯金してゐた五十錢銀貨十枚を取り出し、追つ驅けてくる彼女を蹴飛ばし、泣いてゐる彼女を尻目にかけて、家を飛出した今朝の光景が目の前に浮ぶ。朝家を出る時は、その五十錢銀貨十枚を百倍にもして持つて歸つて來ようと思つてゐたのであつた。これが五百圓にもなれば、一先づ博突は止めて、築港邊りの大きな家を借り、工場の方も一二ヶ月休んで、骨休みをし、朝は朝湯に、晝は釣りに出掛け、晩は夫婦手を引いて活動寫眞にでも行かうと、全く空を掴むやうな妄想を描かないではなかつた。しかし、今日の惨敗はあまりに惨めだつた。愆のくまたか股から裂ける、と諺にある通り、あまりに強慾だから、歸りはシャツ一枚に腰巻一ツといふ、見すばらしい姿になつた。彼はその事を非常に恥かしいことであると氣付かないではなかつた。それで、彼はわざと裏道を擇んで歩くことにした。然し、裏道の方が却つて人目に多くつくものだから、また表通りに出て、人道と車馬道の間の人を通つてゐない溝の上を歩くことにした。

彼はそんな時に、誰か知つてゐる人が前方から來はしないかと、氣が氣ではなかつた。さう心配するの無理ではない。彼は、神戸の市會議員の長男に生れ、兵庫縣立第一中學の三年進行つたのであつたが、父が土木の請負師であつた關係上、早くから博突を打つことゝ、放蕩することを教へられ、中學三年の秋の修學旅行に、伊勢の山田へ行つた時、友人を連れてお茶屋に遊びに行つたことから、退校處分になり、それから大阪、神戸、東京と私立學校を遍歴して歩いたが、遂に墮落のどん底に落ちるやうになつた。地震の後、大阪に流れ込み、木津川尻の中井鐵工場の一職工として、辛じてその日の糧にあり付くやうになつたが、幼い時からの病みつきが、どうしても治せないで、月の三分の一は博突場に通はなければ淋しくつてならなかつた。彼が、かうして放浪生活を始めてから、もう足かけ十年を越える。大阪に來たのが四年前であつたが、父を知つてゐる工場長の勧めで、身を固めることになり、同じく中井鐵工場に通うてゐた旋盤部の伍長を務めてゐた工場内でも優良職工として評判の高い柏原米次郎といふ男の長女を貰ふことになつた。名を美代子と云つて、まだ十九になるかならずのおぼこであつたが、器量もよし、學校もよく出來たので貰ひ手は多かつたのを、工場長のお聲掛りで、否應なしに、原田の許に縁付

くことになつた。

結婚して一ト月位、虎市も殊勝に振舞ひ、博突場通ひも止めてゐたが、幼い時からの習慣といふものは、なか／＼止まらないものと見えて、二日月日には、もう妻君の持つて来た着物や帯を質入れして、博突の資本にしただけのむちやをするのであつた。然し、美代子は堅氣な家庭に育つただけあつて、曾て離縁してくれといふやうなことは一言も云つたことはなかつた。折々泣きながら親元に逃げて歸るやうなことはあつても、晩方にはちやんと母に送られて、狭苦しい南區大黒町の裏長屋に、その姿を見せるのが常であつた。かうして四年間は夢のやうに過ぎ、去年の暮、一子を分娩したが、立派な親になつても、虎市の賭博癖は止めることが出来なかつた。生活が苦しくなればなる程、彼は金が欲しかつた。金が欲しければ欲しいほど、彼は賭場にしげしげと通うた。懷中に五十錢の銀貨一枚しか無くとも、彼は『剃刀の政公』の仲間に入つて、あちらこちらの隠れ場で博突打つことを唯一の樂しみとした。美代子は、齒ブラシの毛植ゑを内職にして、辛じて一日に三十錢四十錢の金を儲け、自分が食ふだけの米代を稼いだ。それをよいことにして、虎市は月二回の勘定日に、家賃として拂ふべき金まで持出して、遊びに出掛けることが、彼の悪たれ根性の病みつきであつた。それを悪いと、彼は知らない譯ではなかつた。しかし、ど

うしてもそれを止めることが出来なかつたのだ。彼に一子が生れてから一ト月経たぬ中に、市會議員をしてゐた神戸の父が死んだ。彼は長男である關係上、神戸に歸つて、後繼をすべき筈であるに拘らず、無頼な生活を送つた自分の半生に氣がとがめて、家に歸るとはよう云はないで、腹異ひの弟に譲つてくれと云ひ捨てた儘、また大阪に出て来たやうな次第だつた。然し、今日迄、毎日のやうに博突を打つてきても、シャツと禪になつて家に歸るといつたことは今度が初めてであつた。

『俺も墮落したもんだ。もう完全に破戸漢になつてしまつた。家に歸れば、借家の十軒や十五軒持つことの出来る身分でありながら、廿七の今日まで、ぶらぶらしてしまつたその酬で、人に見られても辱かしいやうな破戸漢仲間の一悪漢として、シャツと腰巻一つで大阪市の大通りをぶら／＼歩かなくちやならぬといふ姿になつてしまつた。何といふ俺は不甲斐ない男だらう。工場に行つて精勤するでもなく、總て父の威光を傘に被て、寄生蟲のやうな生活を送つてきたそのなれの果がこの見苦しい姿なのだ。こんな風をして大黒町の家にも歸られやしないぢやないか。美代子が、こんな風をして歸つてくるのを見れば何といふだらうか。折々癩癩玉を破裂させて、美代子を殴りつけることはあつても、彼女は可愛い女房だ。家に泣いて歸るやうな悲しいことが

あつても、一言だつて悪たれ口を俺に云つたことがない程、やさしい女だ。殊に子供が出来てから、もうあきらめたと見えて、襦袢布を身體に纏ひつゝも、せつせと内職してゐるその姿を見ると、ほんとにいちらしくつて仕方がない。それに引換へ、この自分といふ男は、どうした不逞腐れの男だらう。いくら何でも俺はこんな姿をして、お美代の處に歸られやしねえ。今朝出る時には、お美代が内職して儲けた五圓の金を、徴發して、勢よく出てきたものを、歸りは彼女が縫うてくれた衾の着物まで、剥ぎとられ、その上まだ三十五錢の借金をして、人から腰巻まで貸して貰つて歸らねばならぬといふ哀れな有様だ。……」

古手屋が竝ぶ。幾枚かの衾が軒先に吊らくつてある。妙な氣が起る。

「泥棒したいといふのは、こんな氣持をいふんだな。俺も今泥棒がしたくなつた。いや、俺の良心がもう少し鈍れてゐるなら、空巢狙ひ位はしないことはなかるまい。——」
美しくおめかしをして、若い娘が通る。年頃は二十を少し越えたばかりであるやうだが、如何にもすつきりしてゐる。それを見た虎市は自分の妻の、裏長屋に燻つてゐる見苦しい姿と比べて、何だか人生に大きな矛盾があるやうに考へられてならなかつた。曾ては彼も、東京に居た頃には、共産主義の思想にかぶれ、左傾團體の一員として、下谷竹町の労働學校に通ひ、五月一日

のメーデーには、巡查と取組合ひをしたこともあつた。そんな時でも放蕩は止めることが出来なかつた。震災があつて、東京から大阪に引上げてからは、おとなしくして、主義者との交際は全く絶つてしまつた。そして反動的に破戸漢連中と仲がよくなり、理想も主義も全く無くなつてしまつて、その日一日を最もおもしろく、をかしく送ればよいといふことにのみ没頭した。美しく着飾つた若い女を見るにつけても、思出されるのはアナキストの仲間に入つて、暴れた時のことであつた。ある時などは某男爵の表玄關に闖入して、草鞋履きのまゝ、疊や敷物を蹂躪したこともあつた。

「——人生は數奇なものだ。まるで水が流れるやうなものだ。一日として留つてゐることはない。殊に俺の生涯に於てはさうだ。俺一個の人生が一種の賽ころの目だ。俺には主義も節操もなく、貞操もなければ道徳もない。技量もなければ學問もなし、金もなければ理想もない。俺は人間の屑だ。だにのやうな奴で、人類の寄生虫だ。永遠の不熟練労働者で、永遠の無産者だ。希望も無ければ信仰もなく、愛もなければ血もないのだ。俺の肉體の中には、親爺の遺傳梅毒と、親爺から受繼いだ高利貸のやうな利己心と、狼のやうな肉慾と、自己の爲には何ものをも犠牲にしようといふ惡魔のやうな心があるのみだ。あゝ、俺は生きてゐるのが厭になつた。親爺がもう

少し俺をよい子に生んでおてくれたなら、こんなかなしい事もなかつたらうが、俺は全く生れ損ねちやつたんだ。この廣い大阪に俺一人がこんな妙な風をして、廣い日本橋筋をうろつかねばならないのだ。——」

十月の暮の夕闇はだん／＼深くなつた。どす黒い大阪の空は、星の光さへ蔽ひ匿して、屋根と天空の境は全く見えなない。きら／＼する百燭光の電燈が、街路の兩側に光つて、破戸漢じみた風態をしてゐる虎市の姿を見世物のやうに照らしつける。

『こんな風をして歸られやしねえ。天王寺公園にでも入つて、お美代が寝てから家に入つてやらう』

さう決心した虎市は、日本橋五丁目から東に折れて、昔から貧民窟で有名な蜂の巢六道の辻を通り抜け、下寺町四丁目から南に下り、天王寺公園の正門から這入つて、うす暗い藤棚の下のベンチにどつかと腰を下した。朝家を出る時、氣忙しく二三杯飯を掻き込んだきり、晝飯も晩飯も食つてゐない虎市の胃袋は、だん／＼空腹を感じ始めた。半袖のうすいメリヤスのシャツの上から、秋風の黄昏の冷氣が身に沁みるやうに耐へてくる。泥棒してきたのは着物ばかりぢやない。そこから邊りの壽し屋か、果實屋に入つて、腹一杯になるだけの食物を掻渡つてきたいやうな

氣がする。『博突打つ者はいやしくなると、よく云ふが、こんな氣持を云ふんだな』と彼は、ベンチの上に疲れきつた身を横へながら考へ續けるのであつた。にぶい電燈の光が公園のあちらこちらにしか點いてゐない爲に、其處では彼の見苦しい服装を咎める人も無かつた。馬鹿に氣が落着いてくる。緊張してゐた氣が急に緩む。腹は減り、肌は寒氣を催すけれども、睡氣の方が勝つやうだ。ぐんにやりして長いベンチを一人占領してゐると、ばかに氣持がよい。うとりうとり夢心地になる。家に歸ることさへ厭になつた。着物も要らない、たゞそこに横になつて寝て居ればいゝやうな氣がする。

ほんとに氣持がよい。堅いベンチの上に手枕して、仰向けにねてゐると、まるで極樂のやうだ。食ひたくもなければ着たくもない。歩く元氣もなければ家に歸りたくもない。野良犬のやうにいつまでもかうして此處にゐたいやうな氣がする。築港の突堤に蠅が喰ひ付いたやうに、彼はもうそこで動けなくなつてしまつた。それでも心配になるのは巡查であつた。折々目を見張つて、人の近付くのを注意したが、彼の寝てゐる藤棚の下の薄暗がりに近付くものは、どこかのカフェの女給をたらし込んだ番頭らしい男と、學生風の男女の二組であつた。思ひ合せたやうに、そこに寝てゐる彼を見付けて、女は黄色い聲を上げた。

公園の向ふは、通天閣のルナパークであつた。何萬燭光の電燈が灯つて晝より眩ゆかつた。下手な亂調子の樂隊が間歇的に聞えてくる。それが如何にも劣情を唆る。三十分、五十分、時は容赦なく経つた。それでも虎市は、ベンチから動く勇氣はなかつた。彼は明日工場から歸つて散歩に出る着物がなかつた。今日質入れした袴をどうして受出さうかと、それをいろ／＼考へてみた。

「お美代を神戸にやつて、繼母から金を捲上げて來ようか。しかし弟は、なか／＼それに承諾を與へてくれないだらう。お美代の里から少し金を融通させようか。それも無理だらう。なかに、勘定を貰ふまで辛抱するさ、朝起きるとすぐ茶つ葉服を着て、寝るまで茶つ葉服を着ておればいゝんだ」

彼は目を塞いで、あれこれと彼の小さい會計に就て、心の中で算盤をおいてみた。然し別にいゝ考も湧いて來なかつた。運が悪いと云へば、秋のつめたい風の上に、細雨がぼつり／＼降つて來た。ルナパークの空が霧で蔽はれる。メリヤスのシャツがしつとり濡れる。もう寝て居れない。少しうと／＼した爲に時間の見當が付かない。人目に付かないやうに、わざと公園を南に通り抜け、飛田遊廊の入口から西に曲り、電車の軌道に沿うて、霞町に出た。人通りの少い處と

電燈の明るくない處を擇んで、彼は木津大黒町の裏長屋へ足を急がせた。

一一

うねりくねつた道を幾つか曲つて、彼は、とう／＼米屋と、うどん屋の間にある、路地の入口に立つた。雨はどしや降り降り續けて、彼は濡れ鼠のやうになつてゐた。

「これも全く天罰なんだ。親不孝がこんなに報いて來たんだ」

そんなにも彼は考へた。路地の奥には人影も無かつた。南北に五軒づつ並んでゐる、北側の、奥から二番目が彼の家ではあつたが、其處には灯さへ點いてゐなかつた。雨は相變らず激しく降る。向側の家は按摩さんであつたが、赫々と電燈を點けて、頗る景氣がよい。雨の爲に路地の處々が水溜になつて、それに電燈が反射して、きら／＼光る。彼は入口に立つて、靜かに家の中を窺つてゐた。

「金が無いので、難波の父の家に米代を貰ひに行つたのかも知れない……それにしてはあまりに歸りが遅い。もう自分の不品行に愛憎をつかして、永遠に俺を見くびつて歸つて行つたのかも知れない。そうだとすれば、女といふ奴は厭な奴だ。俺も悪いが、女も輕薄なものだ、今に彼女が

歸つて來れば、蹴飛ばして、髪の毛を引抜いてやらう』

そんなに考へながら、彼はそつと小さい潜戸を明けて内に這入つた。家の中はしんとしてゐる。彼はまづすぶ濡れになつたシャツを脱ぎ棄て、腰巻の紐をほどき、奥の間に這入つてみた。居ないと思つた美代子は、そこに寝てゐる。

『おや、留守かと思つたら居るんだな。餘程よく寝入り込んでゐるんだ。今日は宵から早く寝たんだな』

彼は流し場に下りて行つて、乾いた手拭を取上げ、それで身體を拭いて、瓦斯に火を點けた。そんなに臺所をことんことんさしても、お美代はまだ起きて來ない。

三

『今朝、家を出る時に、あまり苛めたものだから、それを癢に思つて、狸寝入りをしてゐるのかも知れない、きやつが、言葉をかけたくなければ、こちらも言葉を掛けてやらねえ。彼奴がお膳立をしてくれなければ、自分がするまでのことだ』

そこで彼は初めて電燈のスイッチを捻り、お櫃の底に飯が残つてゐるかどうかを調べてみた。

『ある、ある！ まだ三杯分は残つてゐる』

茶瓶の湯はすぐ沸騰し始めた。それで彼は、流しの下にある桶の中から、大根の浅漬を取出し、流し場の板間に腰を下して、茶漬を食ひ始めた。二杯目の飯をついでゐる瞬間に、流しの傍にかけておいた俎が庭の上に落ちた。それに驚いた赤ん坊が急に眼を醒して、火が點くやうに泣き出した。

もう美代子は起きてくるであらうと思つたが、その瞬間にも彼女は起きて來なかつた。彼は、子供が泣くの放つたらかしておいて、續けて三杯目を食つた。腹が減つてゐるから實に味美い。赤ん坊は女の子だけれど、なかなか猛烈に泣き喚く。四杯目を食ひかけた瞬間に、もう辛抱がしきれなくなつて、虎市は奥に寝てゐるお美代を呼んでみた。

『おい、起きたれよ。子供が泣いてるぢやないか』

さう大聲に呼ばはつたが返事はなかつた。赤ん坊は相變らず泣き續ける。虎市は、お美代を目醒す爲に、最もよき工夫だと思つて、猶も續けて捨て、おいた。四杯目を半ば掻き込んだ時に、もう辛抱がしきれなくなつて、茶碗と箸をそこに投げ捨て、お美代の枕許に飛んで行き、いきなり、彼女の枕を蹴飛ばした。

然しこれはどうしたことか。それでもお美代は、目醒めなかつた。彼女は相變らず、平氣を粧うて、靜かに眠り續けてゐる。

『おい！おい！子供が泣いてゐるぢやないか。狸寝入りすな！』

さう大聲に呼ばはつたが、それにも返事が無かつた。

それでも彼は、赤ん坊を抱上げ、片手でお美代の身體をうんと揺すぶつてみた。然し、それでも彼女は、目醒めなかつた。

あまりをかしいので、彼はお美代を目醒ませようと、彼女の眼瞼を開かせてみた。然しそれでも反應はなかつた。

『若しかすると、お美代は死んでゐるのかも知れない』

急に驚いた虎市は、慌て、彼女の頬に手を當てゝみた。驚いたことには、彼女の身體にはもう血の氣はなかつた。まるで石のやうにつめたい。赤ん坊は相變らず喚き立てる。然し、お美代が死んでゐるとどうしても信ぜられない。彼女の頬には何の憂ひもなく、別に苦悶をしたやうな様子も見えない。

彼は、右手をお美代の懐に入れてみた。然し、心臓はもう動いてゐなかつた。手を上げさせ

てみた。これはどうしたことか、まるで枯木のやうに堅くなつてゐて、一尺と上げることは出来ない。勿論、手の脈は止まつてゐた。

『あゝ、お美代が死んだ。あゝ、お美代が死んだ。俺の無慈悲に、涙を呑みながら死んで行つた。——』

彼の胸は急に騒いだ。彼はどうしてよいか見當が付かなかつた。第一に醫者を呼んで來るだけの金は無い。勿論葬式する金は、何處を探したつて有りやしない。

『もしかすると、俺が枕を蹴飛ばした瞬間に蹴殺したのかも知れない』
そんなと思ふと、この自分といふ男がにくたらしい。

お美代の幽霊が出て來るやうだ。薄化粧をした、今年廿三になるお美代が、ぼうつと座敷の眞中に立つてゐるやうに思へてならない。

『おい、お美代、ゆるしてくれ、わしが悪かつた。わしが悪かつた。お前を殺したのは俺だ。一度だつて、苦い顔を見せたことのないお前に、わしは一日だつて安心させたことは無かつた。お美代、もう一度、目を開けてくれ。せめては一日でも笑つて送らうぢやないか。あゝ、わしが悪かつた、悪かつた』

彼は、布團の上に額を摺り付けて、お美代に向いて赦罪した。然し、もうその赦罪を聞いてくれる女主人公の息は杜絶えてゐた。

——いつ死んだんだらうか。まだ臭くなつてゐない處をみると、死んでから間も無いらしい。電燈の消えてゐたことを見ると、電燈の點く前から寝てゐたとも考へられる。毒薬を呑んだやうな跡も見えない——

あれこれ考へた末、もしや遺言状でもないかと思つて、彼は、彼女の枕許をあちらこちらと探してみた。然しそれらしいものも見當らなかつた。近所の人々に、今日一日のお美代の行動に就て尋ねてみようかとも思つたけれども、その勇氣も出ない。近所の人々は、平素彼が、お美代を苛めてゐることをあまり多く知つてゐる。それで、突然お美代が死んだと云つても、彼が、殺したとしか考へないだらうと思はれてならない。

然し、實際考へやうによつては、彼が殺したと云へないことはないのだ。四年の間彼女を苛めて苛めて、苛めぬいて、今日の日になつた。精神的に云へば、確かに彼は彼女を殺したのだ。そして最期の瞬間まで、彼女を虐待して、死人の枕まで蹴飛ばすやうな亂暴狼藉をしたのであつた。彼は、お美代の死を發表することがあまりにも悲しかつた。彼女の父にどういつて詫びてよ

いか、その言葉さへ知らなかつた。まだ生れてから満十ヶ月になるやならずの赤ん坊を、どうして育てよいか、その見當も付かなかつた。苦勞はさせたが、彼は矢張り、お美代を愛してゐた。お美代は折々愚痴は云つたけれども、お美代以上のよき妻が、彼のやうな不品行な、そして貧乏な人間に嫁いでくれるとは思はれなかつた。

夢のやうに、彼女との四年の生活が目の前に展開する。彼はもう生きてゐる必要はないとまで考へた。『お美代が死んだなら、俺も死んでやらうか。俺のやうな生きてゐても甲斐のない男は、死んでしまへば恰度いゝのだ』

そんな事を考へて、彼は、部屋の何處かで首を吊らうかとも思つた。然し適當な首を吊る場所も見當らない。毒を買ひに行くにも金が無い。身投げするには、お美代の死骸とあまりに遠く離れ過ぎる。

次の瞬間に、注射すればお美代はまた生き更へるだらうと思ひ附いたので、隣近所にも知らさないで、壁に引懸けてあつた茶葉服をつけて、大黒町の表通りにある醫者の處まで子供を抱いたまゝ飛出して行つた。醫者はすぐやつて来てくれた。然し、もう手遅れであつた。

『これやお前さん、死んでから、もう二時間以上経つぜ。こんな事はよくあるもんで、一種の腦

震盪つていふんだらうね。もう注射することもなにもないわ。氣の毒だけれど諦めな。仕方がない』

さう云つたきり、醫者は、さつさと歸つて行つてしまつた。

そこで彼は初めて、近所に、お美代の死を觸れて廻つた。向ひの按摩さんの女房が吃驚してゐる。

『お美代さんは、夕方、私と一緒に風呂から歸つて来て、流し場でことんことん云はせてゐたが……それや本當ですかいな？』

路地内の者はすぐに大勢集つてきた。そして難波のお美代の里に走つて行つてくれる者、神戸の虎市の自宅に電報を打つてくれるもの、みな手分けをして、四方に走つて行つてくれた。按摩さんの女房は、お通夜をするのだと云つて、自宅の佛壇の前から、經机と線香立てと、お花立てを持ち出して、西國三十三ヶ所の御詠歌をあげてくれることになつた。

平素から我儘で、近所の交際も餘りしたことはない彼にとつて、近隣の親切は身に泌みる程だつた。

赤ん坊は、東隣の住友の電線工場に通うてゐる職工のおかみさんが脊負うてくれた。

『今夜はうちで預つてあげますからな、安心なさいませよ』

その言葉が身を切られる程、うれしくもあり、また悲しくもあつた。彼が不良少年になつたのも、全く母親が異つた爲であつた。そして今、この小さい赤ん坊が、まだ十ヶ月経たぬ中に、母と別れなければならぬといふ不思議な運命に、彼は一種の恐怖を感じた。

夜の十二時過ぎに、神戸から弟がやつてきてくれた。そして事情を打明けて、葬式代を家から貰つてきてくれと頼んだ。美代子の父も葬式代が無いだらうと云つて、卅圓ばかり持つてきてくれた。やつとの事で、彼は安心した。

翌日午後四時、小さい小さい葬列が、木津大黒町の裏長屋から出た。

四

それから毎日、彼は自殺することばかりを考へた。彼はもう人生に希望は無かつた。この馬の骨のやうな男が、何故生きてゐる必要があるだらうかと疑つたからであつた。一思ひに頸動脈を切つて死んでやらうかと思つたのは、お葬式の出た翌日であつた。然し子供の事を思ふて死ぬことが出来なかつた。次の日は一思ひに、築港の濱から親子心中をしてやらうと思ふて、あの長い

築港の棧橋をうろついた。然しお美代の亡霊のやうなものが、

『その子だけは援けて下さい』

と夕雲の中から、小聲に囁くやうに考へられたので、また引歸してきた。電車に乗る勇氣もなく、長い一里半もある築港行きの電車線路を、とぼとぼ子供を脊負うて歩いた。涙が、ぼたりぼたり頬を傳うて路面に落ちる。

『——こんなに苦勞するのであれば、何故もう少し彼女が生きてゐた時に、安心させてやらなかつたらうか。さうだ、十日でも、一週間でも、せめては一日でも、お美代に笑顔を作らせてやりたかつた。お美代を殺したのは俺だ。俺がその朝お美代の頭をなぐり飛ばしたから、お美代は脳震盪を起して死んでしまつたのだ。人を殺した者は死刑になるべき筈だ。俺は死刑にせられてよい筈の男だ』俺の罪はあまりに深い。俺は生きても居れないし、死んでも地獄に行くより外道のない男だ』

氣が狂つたやうに、唯その事だけを繰返し繰返し考へながら歩いてゐると、九條の新道にやつて来た。すると其處に、赤提灯をぶら下げて耶蘇教の一團が、大聲をあげて歌を歌つてゐる。その赤提灯を見た瞬間に、彼の胸に一つ閃めいたことがあつた。

『さうだ、さうだ、俺は過去の自分を葬式して、新しく神に生きよう。宗教が一つ俺に残つてゐる』

彼は黙つて、大勢の群衆の一人として、路傍説教に聽入つた。話をしてゐる男は、若い、何處かの職工らしかつた。然し、彼の云ふことは凡て虎市の胸に響いた。

『……どんな破戸漢にもまだ希望がある。神の手は人間の手の如く短くはない。イエスの使命は極悪人を救ふことにあつたのだ。彼が十字架に流した血は、死人のやうに腐つた魂に向つて、再生の注射をする爲であつたのだ。神は本質に於て愛なのだ。その愛に生きることを信仰といふのだ。どんなに悲觀するものも絶望してはならない。諸君にどん詰りといふものはないのだ。福音だ、福音だ、もう一度やり直すことだ。十字架を見上げてもう一度やり直すのだ——』

虎市は、その時程強く、宗教といふものゝ有難味を感じたことはなかつた。彼はすぐ脊中に負うてゐる子供と自分との關係、その子の母と自分との關係を思出した。そして、彼はその瞬間に、自分を完全に葬り、新しく生涯に甦るべきことを神に誓うた。

その大膽な職工らしい青年は、話が了るとすぐ、群衆に向つて呼びかけた。

『これから改心して、新しく神に魂を委ね、自分を磔刑にかけて新しく復活しようと思ふもの』

は、この太鼓の前で祈りなさい』

その大膽な掛聲に、群衆は一人去り、二人去り、五六人の若き男女を残した外、みな立去つてしまつた。その時、茶つ葉服の原田虎市は、赤ん坊を背負うたまゝ、眞直に太鼓の前に進み寄つた。

皺がれた聲で労働者風の青年が、彼に云つた。

『太鼓の前に 跪きなさい』

さう云ひつゝ、その青年も太鼓の前に跪いた。それで、虎市もまたその通りした。悔の涙が止處もなく、彼の二つの頬を傳うて太鼓の上流れる。

『——さうだ、さうだ、自分を葬式して神に甦ることだ。今迄自分のことばかり考へてゐたのが間違つてゐたのだ。今日限り、この瞬間限り、俺はもう人間の原田虎市ではない。俺は全く死んだのと同様だ。これからの自分は復活した自分だ』

つぶつてゐた眼を開くと、跪いてゐる地べたの土埃が電燈を反射させて、黄金色に光る。今迄汚らしいと考へた地べたが、極樂の蓮華のやうに考へられる。太地が神の胎盤で、神の臍の緒が直接自分につながれてゐるやうに思はれる。太鼓の皮がなんだか神殿の帷のやうに見える。

胴を締める眞鍮の棒が鈍く光る。虹色に塗つた太鼓の縁が、神の至聖所の祭壇のやうに考へられる。

理屈も何も無い。彼は太鼓の前で神に吸ひ寄せられたやうな氣がしてならなかつた。懺悔の涙が止處もなく流れて来る。

輕業師

人はみな草のごとく、その光榮はみな草の花のごとし。草は枯れ、花は落つ。されど主の御言は永遠に保つなり——新約聖書ベテロ前書第一章二十四二十五節——

一

大天幕の中は、二千人に餘る多數の觀客で一杯になつてゐた。強い葉卷煙草の煙が、春霞のやうに、觀客の上を蔽ひ、中にはその爲に咳をしてゐる者もあつた。樂隊は勇ましくワツフ・オン・ラインの血の湧くやうな曲を奏してゐる。

今しも、イタリーの美しい娘が、四頭の馬を使ひ分けて、その上で鯨銜立ちしたり、走つてゐる四匹の馬の脊を次から次へ飛廻つて、天女のやうに振舞つてゐる眞最中であつた。

俊太郎は、控室の天鵝絨で作つたカーテンの隙から美しい曲馬娘ソフィヤの顔と、彼女が飽かさず觀客を釣つて行くその呼吸をちつと見てゐた。場内に撒かれた小砂が、馬の四肢にかけられて軽く舞ひ上る。ハケニー種の壯大な筋肉を持つた四頭の馬は、艶々したその皮膚を電燈に光ら

せて、氣持がよい程輕快に飛んでゐた。ソフィヤの美しい肌着にちりばめられたダイヤモンドまがひの結晶硝子が、サーチライトに反射して星のやうに光つた。靜かにしてゐる時、一目見るだけでもおつとりさせるこの娘の美しい顔が、廿歳前のふつくりした股と腕とによく釣り合つてゐた。彼女が天女のやうに馬の脊から脊へ飛廻ると、天馬に乘せられて、東雲の空を馳つて行く戀神ヴィナスの實物のやうに見えた。

「迎も俺にはあんな美しい眞似は出来ない。俺のブランコ乗りなんか、ソフィヤの曲馬に比べちや、月とすつぽんの隔りがある。あゝ……それに俺はあの娘のすぐ後に出て、この醜いあばた面と脊の丈の短い體軀を見世物にしなければならぬ。何といふ差だらう。俺は出て行くのは厭だ。それに俺は、昨夜、遊女買ひをした爲に、今日は元氣が抜けてゐる。身體がだるい。少し眠がふら／＼する。こんな時にブランコ乗りをすれば、きつと失敗するに決つてゐる——」

「觀客の中には、上流階級のお嬢さんらしい人々が多數見える。みんな胸まで露した夜會服をつけ、手に手に鼈甲細工のオペラグラスを持つて、ソフィヤの妙技を飽かず眺めてゐる。輕快なマーチ曲に合せ、觀客のある者は、靴の踵を床板に踏み付け、肩を揺すぶつて、口笛まで吹いてゐた。」

「西洋人は何故、こんなに美しいものかなア。その中でもソフィヤはまた特別に涼しい眼元を持つてゐる。何故あの娘は、牛乳色をした白玉と、オペールのやうな青い瞳を持つてゐるのだらう。何故、天はあの娘をあんなに美しく造り、何故俺をこんなに醜く作つただらう？ 否、道樂した天罰とは云へ、何故ヨーロッパ三界まで日本人の恥曝しに、このあばた面を下げて、下手なブランコ乗りを見せて歩かなければならぬだらう？ それにもしこれで宙返りする瞬間に落ちてもすればどうしよう——」

クリスマスに近いオーストリアの冬は寒かつた。俊太郎は運動着の上に厚ぼつたいマントを引懸けてはゐたが、身慄ひする程だつた。それに今年の春フランスのパリーで遊び過ぎて、サルバルサンの注射をして貰はねばならぬやうになつてから、寒さを感じる事が頗る鋭敏になつた。梅毒に罹るまで、それ程迄感じなかつた寒氣が、一寸のことが身に浸みるやうに感ぜられた。その上身體を動かすことは厭になるし、少し激烈な練習をやると、すぐ目まひがした。歳も歳であつた。もう彼れ此れ日本を出てから十三年になる。アメリカで四年、イギリスで四年、そして大陸

で五年、俊太郎は日本戀しさに泣かない譯でもなかつた。然し生れ付女狂ひの癖が、魂の髓まで浸み込んで、日本に歸つて窮屈な家庭の生活を送るだけの元氣がなかつた。彼は儲けるだけみんな酒と女に使つてしまつた。そして流れ流れて今年三十一の年になる迄、歐米の空を彷徨いて廻るのであつた。

彼が輕業師になつたのは、十八の時であつた。最初彼は中學校を半途退學して。米國で苦學したいと云ふ考を持つてゐた。恰度その時彼は、米國行きの輕業師になれば、金も溜るし、洋行も出来る、大阪のある人から聞かせられ、こつそり一人で、東京淺草の荒木興行部の一員に加はつた。最初彼は玉乗りを稽古させられたが、面白半分に綱渡りを練習するやうになつてから、めき／＼とその技量が進歩し、座員一同に認められるやうになつた。

『それなら一生食へる』

と、座長に保證せられて、間もなくアメリカへ渡つた。俊太郎の綱渡りは、米國到る處のサーカスで拍手喝采を受けた。然し、彼の収入は少かつた。

『綱渡りだけちや、高い金も出せねえぢやないか、ブランコの宙返りをやるやうになれば、それから、月に百弗位は支拂つてもいゝや』

さう支配人の荒木忠一が、チャプリン髭を撫で下して云つた。その時、ブランコの宙返りをする男は、ロシアから連れて來た今年二十二のオヴモロフといふ青年であつた。荒木は、それだけの事をやらすのに、毎月百二十弗を支拂ふ約束をしたことを悔いてゐた。で彼は、俊太郎にブランコの宙返りを練習させて、オヴモロフを追拂はうと腹のうちで決めてゐた。

『宙返りが出来るやうになりやア、そら、喜んで百弗は毎月やるさ』

荒木は、細い眼をなほ縮め、險しい聲を出して、そんなに云つた。もうすつかり女狂ひを覺えてゐた俊太郎は、食糧の外に毎月貰ふ六十五弗では逆も足りなかつたので、そろ／＼ブランコ乗りの練習を始めた。恰度それは、彼がアメリカに渡つて一年半後のことであつた。一行はコロラド州デンヴァ市でクリスマス興行を打つてゐた。オヴモロフは人の好い青年であつたから、まさか荒木が、自分を追出す計畫があるとは夢にも考へないで、手を取るやうに一々細かにブランコ宙返りのこつを俊太郎に教へてくれた。俊太郎もまだ廿歳前ではあるし、中學時代に機械體操をした経験もあり、一間位離れてゐるブランコからブランコへ宙返りしないで飛付くことはすぐ出来るやうになつた。しかし彼には、オヴモロフがするやうに、逆倒になつて足の甲で自分を吊り下げ、そのまゝ次のブランコに、また足の甲でぶら下がることは、眞似だにすることが出来な

つた。俊太郎は、オヴロモフが片足でブランコに引掛つたり、ブランコの上に鯨立ちしたり、ブランコからブランコへ手を使はないで飛び移ると云つたやうな、手際のいゝ放れ業は絶対に出来なかつた。俊太郎は、オヴロモフの猿も及ばないやうな放れ業に、ほとく感心してしまつた。

「人間つていふものは妙な事が出来るものだ。練習のしやうによつては、まるで鳥か蝙蝠のやうに、空中を飛び廻ることが出来る」

そんな事を思ひながら夜寝ると、夢の中で、飛行機にも乗つてゐない彼が、魚のやうに空中を泳ぎ廻つてゐる夢を毎晩のやうに見るやうになつた。それから間もないことであつた。

「俺は空中が泳げる、いや泳いで見せる。俺は女を絶ち、酒を断つて、衆仙人のやうに空を飛廻つてやるんだ」

斯うした無鐵砲な慾望が、彼の腰に突如として湧き上るやうになつてから、彼の技術は一週間も経たない中にめきくと上つた。其代り彼は好きな女買ひも、隠れて飲んでゐたブランデーも止して、神明に契つて宙返りを熱心に練習した。

その熱心さには破戸漢肌の荒木も、流石に吃驚してゐた。

「こつちやア、輕業も錢金の問題ぢやありませんア」

俊太郎が荒木にさういへば、

「妙技といふものは、錢金を離れて神信心でやらなければ出来ないものと見えるね」

フランス型に刈込んだ眞黒の髪を荒木は如何にも氣にしてゐるやうに、眞直ぐの上に撫で上げながら、俊太郎に向つて殊勝なことを云うた。

クリスマスが済んで、デンヴァの興行が打切りになり、天幕が一週間ばかりが空きになつた時、俊太郎は朝早くから晩遅くまで一日に四時間以上は熱心に練習した。そして精進を始めてから二月も経たぬ中に、オヴロモフも激賞する位に、彼の技術は進歩した。一行がテキサス州のダラスに興行を打つやうになつてから、公然俊太郎は、オヴロモフの相棒になつて二人で空中の妙技を観客に見せることになつた。其頃から荒木はオヴロモフを追拂つて、俊太郎一人にして金を節約しようと言ふ話を持ちかけた。然し、俊太郎は、荒木があまりに貪慾なのを面白く思つてゐなかつた。その頃、米人の經營してゐたチャールズ・チャーラー・サーカス・バンドは、俊太郎の綱渡りだけに、月給二百弗を支拂ふと申込んで來た。然し義理堅い俊太郎は、太平洋を越えた船賃のことや、英語が充分出來ないことも考慮の中に入れて、最初は氣が向かなかつた。然し、荒

木は少くとも毎月二千弗か三千弗儲かつてゐるに拘らず、この上オヴロモフを追出して、百弗近く儲けようとしてゐることが、彼の氣に食はなかつた。しかしそれはいろ／＼の理由もあつた。荒木はサンフランシスコ上陸以來何處で拾つて來たか、別に美しくもなく餘り芳しくない白人の女を一行に加へ、暇があれば、その女などを加へて支那博奕に餘念がなかつた。

さうした事に憤慨してゐた俊太郎は、二年以上も一緒になつてゐた荒木興行部を出て、チャールス・チャールレーのサーカス・バンドに加盟した。チャールス・チャールレーの團體はまた南部の數あるサーカスの中でも特に大きな一團であつて、一行七十人、馬の數だけでも二十頭からあつた、六ヶ月位この一行と共に米國の南部諸州を巡業してゐる中に、俊太郎は生れて初めて二千弗といふ大金を貯蓄することが出來た。斯うなると金を貯めることが面白くなつて、彼は好きな女買ひも止め、ランプや賭け事をすつくり止してしまつて、毎日機械的な綱渡とブランコの宙返りを、一日に二度づつ觀客の前で繰返した。

アメリカに四年ブラ／＼してゐる中に、彼は五千弗貯めることが出來た。そこで彼は、それを資本にして、荒木がやつてゐるやうな曲馬團を別に組織する氣になつた。恰度ヨーロッパに戦争が勃發する四年前のことであつた。ロンドンに行けば、日本の輕業師の足溜りがあることを聞

き、俊太郎は直ちに、意氣揚々とロンドンに押し渡つた。ドックに近いマイルエンドの近くに、フラットを借り、一廉の成金風を吹かせてアイルランド生れの女中迄雇ひ込んだ。

計畫はうまく行つた。日本の輕業師の一行は、英國の各地で、不思議に持てた。英國の四年間は間も無く過ぎてしまつた。しかし其處で自信のついた俊太郎は、フランスの興行を思ひ立つて、一行十三人を引連れ、寄席を中心に興行を打つて廻らうと、ドーヴァ海峡を渡つた。しかしこの計畫は全く失敗に終つた。フランスの寄席にはイタリーの輕業師が澤山這入つてゐて、日本人などの這入れる餘地は少しも無かつた。その上に、綱渡りをさせてゐた和吉といふ神戸生れの青年が、綱の上から落ちて肋骨を三枚折り、マルセーユの病院で死んでしまつた。その爲に彼は、一千五百法以上の金を空費した。

『斯うしてゐては元も子も食つてしまはねばならない』

斯う氣付いた俊太郎は、一行をすぐロンドンに引上げさせ、そこで曲馬團を解體してしまつた。その時相棒になつてゐた留吉といふ青年が云つた。

『兄貴、矢張り十三つて數は悪いなア。和吉が死んだのは、ロンドンを立つ時に一行十三人であつたから一人省かれた譯だね』

それ以來、宗教も道徳も義理も人情も餘り考へないで、毎日金と女のことばかりしか頭になか
つた俊太郎に、恐ろしい一つの迷信を鑑のやうに打込まれたのであつた。それは十三といふ數
に對する恐怖であつた。彼は、旅行する必要に迫まれても、月の十三日を避けた。買物の釣錢
でも、十三錢を貰ふことを躊躇した。汽車の寢臺の十三號、自動車番號の十三のつくもの、宴會
の席の十三人、彼は何故世界がこんな恐ろしく作られたかを氣にするやうになつた。
それから彼は單獨に、スコットランド人の曲馬團に参加したり、獨逸人の曲馬團に参加した
り、三年半の間に、曲馬團を三つ變へた。最後にイタリー人の曲馬團に参加してオーストリアを
巡業することになつた。

年をとると共に彼の技術はだん／＼落ちて行つた。殊に二十九の時フランスでブランコから落
ちて足を挫いてから、彼はブランコに對して一種の恐怖をさへ感ずるやうになつた。しかし、
彼は、綱渡とブランコの外に生きて行く方法を知らなかつた。それで、何等の感激もなく、何等
の興味も持たなくなつてしまつた曲馬團に、彼は一生懸命に嚙り付いた。そして彼は、支配人か
ら今にも首を誅られることを毎日氣にかけてゐた。

三

急霰のやうな拍手を浴びてソフィアは控室に引込んで来た。身體は汗ばんで、ゆだつたやうに
眞赤になつてゐた。世話役のイタリー女の婆やが、夜着を廣げ、彼女の身體を受取るやうに、
浴場の方に連れて行つた。俊太郎は入れ變りに舞臺に立たなければならなかつたので、右手で接
吻を彼女に送ると、薔薇のやうに美しい頬べたをした彼女は、如何にも満足さうな微笑を湛へて
過ぎ去つた。

俊太郎が、舞臺に立つた瞬間、観客は堅くなつてしまつた。拍手の鳴り方が少なかつた。その
瞬間彼は、その日が十二月の十三日であることを思ひ出した。

「あゝ、今日は日が悪いや、この前フランスで落ちた日は、四月の十三日であつたが、今日も間
違へなければいゝがなア……」

彼はつる／＼と勢よく天井から垂れてゐた一本の綱を三丈以上も上に登り、ブランコに軽く
身に乗せかけた。その瞬間にも十三といふ數が頭にこびり付いて離れなかつた。ちらつと觀客を
上から見ると、控室から見た形と變つて、石ころを並べたやうに見えた。

『若しもこの上にでも落ちて、人でも怪我さしたらどうだらうか』

そんな事も考へた。今日に限つてブランコとブランコとの距離が、迎も廣いやうに考へられてならなかつた。もう一間近ければと念ずるやうに考へもした。ちらつと救助網の張り具合を眺めてみた。

『大丈夫だ。落ちてでも大きな怪我はあるまい。十年前の若い氣持で一つ揺つてやらう』

さう思つた瞬間に、彼はブランコを軽く揺り始めた。

一振り、二振り、ブランコはだん／＼幅廣く揺れる。今日に限つて、ブランコの棒が水平になつてゐないことを著しく感じる。その瞬間にまた十三といふ數と、昨夜遊女遊びをしたけ惜るさを頭の中で想ひ浮べた。吐き氣が来る。眼がち／＼する。

また一振り、二振り、こんど彼は足の甲でぶら下つて蝙蝠のやうな眞似をしなければならぬ。それは容易である。ブランコの上で鯨銚立ちして身體を揺られなければならない。それも容易である。やつてゐる中に、大分身體もしつくりして來た。十三年來、練習し來つた筋肉が、しつくり器具に適應する。彼が思ひ切つて乗つてゐたブランコから、静止してゐたブランコに飛移つた瞬間、下の方から拍手が捲き起つた。

『大丈夫、大丈夫、この調子ぢやア、宙返りは何のことアないや』

飛移つたブランコを彼はまた揺り始めた。然しどうした具合か、今日はブランコの振動の調子をどうしても合すことが出來ない。吊り具合が悪いためか、止り木が斜になつてゐる加減か、一方の振動數と、こちらの振動數が平行しない。先方のブランコが此方に寄つてきた時、こちらのブランコもその方に接近しなければ、宙返りの時に取つ掴まへる機會を逸する。それが今日に限つて、此方が追かけた瞬間に、先方のブランコはあつちへ逃げて行く。

観客の視點は、凡て俊太郎の一舉手一投足に注がれてゐる。彼等は拍手がしたくてじれつたがつてゐる様子であつた。俊太郎は、二つのブランコを乗り變へ、乗り變へ、放れ業を抜きにして、二つのブランコの調子を調へようとした。然しどうしてもそれがうまいこといかなかつた。観客の中には喚いてゐるものもあつた。斯うなると氣が挫けて、ブランコが馬鹿に高く見えて仕方がない。催促の拍手があちら此方からばら／＼に鳴る。俊太郎はます／＼じれつたくなる。眼がくらく／＼して動悸が激しく早く打つ。

『あゝ、十三日！ 輕業師になつてからの十三年目の十三日、親不孝の十三年目、えゝい！ 一か八かやつてしまへ』

彼は十餘年間の練習と力量を信じて、宙返りをやることに決意した。厭な拍手が下から響いて来る。二つのブランコがちぐはぐになつて調子が亂れてゐる。

『こんな時に宙返りすることは、まるで落ちる爲に宙返りするやうなものだ』

それで彼は、もう一度眼を開いて他方のブランコに乗り移り、振動を調節せんとした。然しその時、観客はもう辛抱しきれなくなつたと見えて、注意せよとの意味で手を滅茶苦茶に打つた。そこには技術者に對して、同情も思ひやりもなかつた。宙返りは一つの商品であり、それを見せないことは曲馬團の信用に拘ることであつた。確かに、大きな廣告ビラにも、ブランコからブランコへの宙返りが、繪になつて載せられてあつた。観客からの冷笑するやうな拍手が繰返された時、俊太郎の頭の中に浮んだ幻は、廣告ビラのブランコ宙返りの繪であつた。

『落ちて下にも救助網が張つてあるのだから、少し位の冒険はやらねばなるまい』

斯う思つた瞬間、彼は、足の甲で引懸けてゐた一方のブランコを素早く後方に跳ねて、電光の如く空中で宙返りをし、素早く両手で他方のブランコに喰付いた。遠方から拍手の音が聞えた。彼は下に落ちなかつたのだ。

『あぶない商賣だ。こんな危い商賣をしなくとも食つて行く工夫はいくらでもあるだらう……今

度は宙返りして足の甲でぶら下らねばならぬ』

遠くなつてゐた氣が少し恢復して來た。然し何だか他のブランコに足の甲でぶら下る元氣が、もうなかつた。何だかこんどは落ちるといふことを蟲が知らせる。然しそれをやらなければ、看板が偽になる。

ゆらり、ゆらり、二つの足の甲でぶら下つたまゝ、彼はけだるい身體を振るが、さて、先方のブランコが此方に近づく瞬間を見つめてゐた。四振り五振りするけれども、どうしてもよい位置に先方のブランコがやつて來ない。然も、愚圖愚圖して居れない。こんどは拍手が鳴る前に、もう一度宙返りを見せてやらねばならぬ。

『第一回が、兎に角うまいこと行つたやうに、こんども巧いことゆくだらう。凡てが運だ』

斯う思つた瞬間に、彼はまた宙返りを決行した。ヒューつと冷い風が、彼の周圍に捲き起つた。一方のブランコが彼の目に入った。彼は兩足を伸ばして、ブランコの止り木に引掛けようと試みた。右の片足だけが引掛つた。次の瞬間に意地悪いブランコはその右足からも迂り抜けて、反對の方向に逃げ去つた。

そして、俊太郎は、眞つ逆倒に、舞臺の上に墜落した。

その瞬間に彼は、親不孝をして、大阪から逃げ出してから、昨夜の女狂ひ迄の事を、フィルムをばらまくやうに見せ付けられた。

『罰當りが！これは神の刑罰だ！』

完全に張られてゐた筈の救助網の一つの角が切れて、彼の身體が舞臺の緞通の上に、こ酷く投げ付けられた瞬間に、彼は天の一隅から大きな聲で、さう叫ぶ聲を聞いた。

観客は總立ちになつた。座員は馳け付けた。幸ひ彼は頭部に、何らの損傷を受けてゐなかつた。然し、自分一人で起上つてみようとしたりけれども、兩足が棒のやうになつて、全く自由を失つてゐた。身體の右側を激しく舞臺の上に叩き付けたと見えて、右の耳と脇腹と腰が、斬り付けられたやうに痛んだ。

彼は大勢にかつがれて控室に這入つた。そして、其處からすぐウキナ市の一流の大きな病院に入れられた。そこに一年居つた。溜めてゐた四五千弗の金はすぐ消えてしまつた。彼は無一文になつてカトリック教會の施療病院に入れられた。そして六ヶ月の後公使館の手によつて、日本に送還せられることになつた。

四

師走と云へば、いくら南の國の阿波でも、相當に寒かつた。況して、碌々着物も着てゐない居ざりの俊太郎には、猪山下しの寒風が、骨の髄まで浸み込むやうに感ぜられた。

荷車、自動車、馬力車、人力車、それに、肩で荷を擔いで行く多くの行商人の間を縫うて船着場の徳島から、立江の地藏さんまで二里半の道を行くことは、なか／＼容易なことではなかつた。二つの足が、立派に揃うてゐて歩くのとは違ひ、足腰が立たないで、芋虫のやうに、一里の道をやつと一日かゝつて轉がつて行く乞食の身にとつては、凡てが物憂いことであつた。

俊太郎は勝浦川の堤防を小松島の方に越えた時に、堤防の中腹でさめざめと泣いた。それは四國遍路に廻つてゐた親子連れの水巡禮が、彼を不憫と思つて一錢の金を投げ與へてくれた瞬間であつた。

親に叛き、世に叛き、放蕩のありつたけを盡して、胡麻化しの一生を送つてゐた天罰に、今は居ざりになつて蟲のやうな生活を送らねばならないのだ。贅を盡したパリのホテルで、金に飽かせて遊び狂うた三年前の十二月と、三年後の今日を憶ひ合せてみると、自分ながらに人生の數奇

な運命にあきれてしまふのであつた。日本の金に直して一萬圓以上も持つてゐた彼が、今日人に一錢の銅貨を恵んで貰はねばならぬ境遇になると、一年半前にどうして考へ得られたらうか。「しかし、有り難いことだ、一錢の金でも下さる人心は、ほんとに御大師さまの御慈悲だ」俊太郎は、笈に菅笠姿の女連れが、遙か向ふの藪の蔭に消えてしまふまで、合掌して二人の影を拜んでゐた。

「何でも、お大師さまの御慈悲で腰が立ち、もう一度眞人間になつて勞働が出来るやうにならなければならぬ」

さう考へて彼はまた険しい堤防の坂道を上に登つて行つた。牛車が来る、馬力車が来る、それが過ぎ去る度毎に、乾き切つた往還の砂埃が、路上に躡つてゐる俊太郎を窒息させる程捲き上つた。俊太郎は、二つの膝坊主に路上で拾つた藁を括り付け、辛じて動く右手で己の身體を支へ、左手で漸く身體を前方に押し進めることが出来た。馬糞や人間の唾の混つた白い埃が、石川の上まで、まるでぼた餅に粉をかけたやうに白く降りかゝつてゐた。彼は天罰と、自分の罪を懺悔しつゝ、その白い砂埃に涙を混せて、懺悔のコンクリート道を徳島から立江まで敷き詰めるの

だと彼自らに云つた。

『立江に行けば必ず自分の足が立つ！ あそこで居ざりが立つたのだ。だから立江といふのだ。私も立ちたい、お大師さまのお蔭をうけて、この罪を赦して貰つて、もう一度眞人間になる。南無大師遍照金剛！』

彼は、二里半の道に三日かゝつた。最初の晩は夜露に打たれながら、上八萬の墓場の中で寝、二日目は勝浦川を小松島に越した民家の軒先で寝させて貰つた。そして三日目の夕刻やつとのこゝで立江の地藏さんの椽側まで轉がり込んだ」

彼は忝しく本堂の前に身體を投出して、さめく／＼と己の罪を懐悔し、足腰を立てて下さい、と地藏菩薩に祈願を籠めた。其日は恰度十二月の十三日であつた。不思議な縁と云へば縁である。三年前の十二月十三日には、オーストリアのウキンナ市の一流の輕業師であつた彼が、今日同じ月の同じ日に、居ざり乞食として此處に泣き崩れるのであつた。

暮である爲か、音に名高い四國八十八ヶ所第五番の札所も參詣者は非常に少かつた。彼が十五分間以上も佛前に躡つてゐる間、腰を端折つた商人と、小學校教員風の筒袖を着た若い婦人二人しか參るものはなかつた。

十二月の短い日足は、早くも地藏堂の深い軒先を暗くしてしまつた。乞食の俊太郎は、懐中十錢の金も無いので、また地藏堂の椽側で一夜を送らして貰はうと、人目に付かぬ本堂の西側に廻つて寒さに慄へてゐた。晩の五時半頃であつた。町にはもう電燈が灯いて、北に歸る鳥の聲が、あはれつぼく聞えた。白い衣に角帯を締めた四十格好の番僧が本堂の扉を閉ざし始めた。兩側の扉も閉められた。本堂の大きな四枚扉も閉ざされた。番僧は、本門の潜り戸だけを残して、二つの大きな戸を引寄せ、叮嚀に門を詰めた。そしてその足で眞直ぐに俊太郎の所にやつて来て、大聲に怒鳴つた。

「おい、そんな所で寝ておちやア不可んぜ。火の用心が悪いからなア、何處か木賃宿にでも行くがいよ」

さういつた番僧の人相は、何とも云へない險惡なものだつた。

「お住持さま、まことに申し兼ねますが、お大師さまのお慈悲で、一夜の宿りをこの椽側でお與へ下さる譯にいかんでせうか」

半分泣きながら、俊太郎は瞳を据ゑて番僧に嘆願した。

「此處は寝る所でないけん、あなたは其處に居つたらいかんでよ。この前の本堂は、遍路さん

の火の不始末から全焼したんでな、遍路さんは一切境内に寝られんことになつとるんですわ」

青く剃りたてた頭を撫で廻して、番僧は嚴然とさういつた。それに對して俊太郎は、當惑したやうな表情をあげたの顔に現して、自由になる左手を前方に差し伸べ、番僧を伏し拜んで懇願した。

「お住持さま、それは御尤もでござりませうけれども、私は身體の不自由なものでございまして、是非立江の地藏さまに治して貰ひたいと思つて、大阪から渡つて來たものごさいます。何しろ、徳島と立江の間を三日もかからなければ歩けないものですから、どうか不憫と思召して、今夜一晩なりとも、此處に置かして下さりませ」

さう云つて俊太郎は其處を動かうとはしなかつた。本堂の軒先に數十羽の雀が、ちいちくちいちくと首を振り振り樂しげに跳び廻つてゐた。番僧は椽の下から言葉をかけただけでは物足りな

いと思つたか、正面の階段を上り、長い椽側を傳うて彼の處にやつて來た。

「不可ん、不可ん、お前がどんなに不自由な身體であつた處で、此處は寝る所でないんだから、そんな汚い着物着て、この美しい椽側で寝そべつたりなどしたら不可ん」

俊太郎は住持の云ふ通り、椽側は美しいと思つた。樺材の、縦が一間半もあるやうな節のない

柁板が、幾十枚も並べられてあるだけに、何處となく落着いた壯嚴さがあつた。

『お前はひつこい奴やなア。こんな處で寝たらお大師様の罰が當るぜ』

斯う云はれた時に俊太郎は、ウキンナ市の無料施療病院を思ひ出した。そこで彼は、一年半も世話になつたけれども、一度だつてこんな険しい顔を見せ付けられたことはなかつた。それで、彼は餘程、呪ひの聲を立て、椽側から下りようと思つた。然し、彼にはもう動くだけの力が残つてゐなかつた。彼は軒の雀が羨ましくてならなかつた。『狐は穴あり、空の鳥は巢あり、されど人の子は枕する處だになし』ウキンナのカトリック教會で天主教の坊さんに貰つた獨逸語のバイブルの中に、さうした文句のあつたことを彼は想ひ出した。彼はあまりの悲しさに顔を伏せて其處に泣き沈んだ。住職は一旦引返した。しかし、椽側を角まで曲つた處で、また踵をめぐらしてやつて來た。こんどは大聲を立て、頭から怒鳴り付けた。

『何處の乞食かわからんが、こんな美しい椽の上に土足のまゝで上るんぢやない。早く下りろ、下りろ、穢い！』

その罵聲を聞いて、俊太郎は涙に沁んだ顔を住職の方に向け、兩手を合せて拜んだ。

『私は、もう歩く元氣がございませんのですからもう一時間でも、半時間でもよろしくございま

すから、此處で休ませて下さいませ。そしたらきつと出て行きます』

その聲は途切れ途切れであつた。然しこの住職は餘程癩癩持ちと見えて、彼の願ひを聞くどころか、俊太郎の足許に廻り、臀部を左足で軽く蹴つて、如何にも穢らしいといふ表情を示した。

『愚圖愚圖云はないで、さあ降りた、降りた！ 下りなければ巡査を呼んで來るぞ！』

動く元氣もなかつた俊太郎は、臀を蹴飛ばされて急に元氣になつた。彼はまた芋蟲のやうに、五尺の短い身體を前に伸ばしては後に縮め、手に持つた高い足駄をこと／＼云はせながら廊下を南へ居ざり出した。後には膝に括つた藁に付いてゐた砂埃が、二筋になつて、はつきり櫛の柁の上に描かれてゐた。地藏堂の正面迄來た時に、俊太郎はもう一度佛様に向き直り叮嚀に兩手を合せて御願をかけた。彼は眞劍になつて願をかけてゐる中に、人生の行路難に、もうこの上生きてゐることが厭になつた。

『この儘何處かの川に這入つて自殺してしまひますから、魂だけお救ひ下さい』と云つたやうな祈もしてゐた。また悲しくて顔が上らなくなつてしまつた。其處で彼は持つてゐた二つの足駄を傍に置き、聲を立て、すゝり泣きに泣いた。

「斯うまでして生きて行かなければならぬんでせうか、地藏さま、私を不憫と思召すなら、今宵の宿りを何處かで與へて下さいませ」

地藏堂の正面で、また、俊太郎が、うつ向き込んでしまったので、住持は業を煮やし、

「こら、こら！ またそんな處へ寝込んでしまふんでないよ、貴様は随分強情な奴だな。出て行け！ 出て行け」

さう云つた彼は、埃に塗みれた俊太郎の厚司を首筋の所で掴へ、無理にも椽側から突き落さんとした。慌てた俊太郎は、急いで二つの足駄を取り寄せ、禮儀正しくまた地藏さまに一つお辭儀をして靜かに階段を下りようとした。然し、氣の立つてゐた番僧は、それを、彼がわざと反抗してゐるのだととつたと見えて、

「貴様は何處までも強情な奴だなア」

さう云つて、右手に持つた足駄を引たくり、庭の彼方に投げ付けた。階段を降りかけて、何かのはずみで平衡を失つて俊太郎は、六、七段上からころろと敷石の處まで轉び落ちた。

「ど畜生め！ こんなに美しく拭いてある椽側に、土足の儘で上るとはなんだ。きたない！」
階段から轉げ落ちた俊太郎を如何にも痛快がつて眺めた僧侶は、なほ悪しざまに彼を罵倒し

た。不思議に俊太郎は何處も怪我をしなかつた。

「これもみんな佛様が私の信心をお試めしになる手段に違ひない、怒つてはならぬ。恨んではならぬ。南無大師遍照金剛！」

またウキンナで、したゝか打つた右の耳の上部と、右の脇腹が痛みを感じる。

「あゝ、斯うしてまで生きて行かなければならぬものか、三千世界に神も佛も無いのか、この五尺の身體を救うてくれる親切な人は居らぬか。」

日はもうとつぷり暮れてしまつた。半ば開いた正門の潜り戸が、青白く空を透して見える。俊太郎は投げ棄てられた足駄を拾はうと、小石混りの大庭を芋蟲のやうに動き出した。雨模様だ。傘が無い。さあ、今夜何處で寝よう、寝る處がない。大粒の雨がぼつりぼつり額に降りかゝつて来る。白くぼかした廣い庭の真中に、投げ捨てられた足駄が、灰色にぼつくり浮き出して見える。

五

冷たい雨に濡れながら、居ざりの乞食は、夜も寝ないで徳島に歸らうと努力した。もう一度ウキ

ンナで受けたやうな親切を受けたものだ。彼の頭には、それだけのことしかなかつた。耶蘇の宣教師の家を探さう。そして一晩でよい温かい布団の中で寝かして貰はう。世界に見捨てられたこの居ざりは勇猛心を起して、水溜と戦つた。戦つてゐる間は自殺したい氣も何處かに消えてしまつた。只追出されたことに對する發憤と、墮落した宗教が形骸に等しいものであることを呪ひつゝ、彼は最も眞面目な求道者として、眞理の道を居ざつて行く氣持になつた。

一生懸命になつたけれども、また徳島迄歸るのに三日かゝつた。道々御飯を貰つたり道を訊いたりする中に、多くの暇をとつた。そしてとうとう徳島本町の米國宣教師の屋敷に辿り着いた時には、三日目の朝であつた。恰度宣教師は自轉車に乗つて地方に出掛ける所であつた。それを居ざりの俊太郎は呼び止めた。彼は英語で挨拶をした。西洋人は居ざりの乞食が英語で話すのに吃驚した。俊太郎は、細々と彼の窮状を訴へた。そして、半分泣いてゐた。

『——日本の凡てのお寺様が、いふ風であるとは信じませんけれども、私は愛のない宗教は全く駄目だと思つて憤慨いたしました。然し凡て私が悪いんです。過去三十一年間、私は罪の塊であつたのです。まことに御無理申して濟みませんが、あなたの家の椽の下でもいゝですから、私の寝る所を與へて下さい』

宣教師は彼の英語の達者なのに吃驚してゐる様子であつた。

『あなたは何故そんなに英語が上手なんですか？ 英語の先生にでもなればいゝでせう』

中脊の色の白い奥の眼の宣教師ローガン先生は、はつきりした英語でさう答へた。彼はまた家にとつて返し、料理番の一室をあけさせ、俊太郎をその部屋に通した。すぐ、夫人も子供も女中も、大勢出て来て、俊太郎の足から濡れた涎を取り去つたり、まだ乾いてゐない厚司を大きな西洋人の着る寝巻きに着替へさせたり、料理人が布団を持つて来れば、宣教師の夫人が敷布を運んで来、子供が枕を持つて来れば、女中がパンと牛乳を持つて来るといふ調子に、俊太郎は、まるで天の使の一群に取圍まれたかのやうに、急に甦つた。

俊太郎は両手を合せて、凡ての人を拜んだ。

『市川さん、そんなに人間を拜むものぢやありませんよ』

はつきりした日本語で宣教師が云つた。

『神様は私達のお父さんですから、あなたは自分の兄弟の家に歸つたつもりで、此處でゆつくりなさい。何日でも何年でもあなたの身體がよくなる迄、こゝで寝てゐてもいゝですから』

さう云ひ残して宣教師は、また自轉車に乗つて遠い傳道旅行にいつてしまつた。

高い東窓から、師走の鉛色の空が見える。クリーム色に塗った壁が、如何にも、旅に泣く巡禮の氣を落着ける。机の上に置かれた聖書の金椽が光る。表に西洋人の子供等が無邪氣に騒いでゐる。(をはり)

Printed in Japan

昭和六年八月二十日印
 昭和六年八月廿五日發行一萬部



發售所

東京市京橋區銀座四丁目二番地
 東京市外濠谷町通上丸太町上ル

教文館出版部
 東京市京橋區銀座四丁目二番地

— 版仕奉 —

著者 賀川 豊彦
 發行者 東京市京橋區銀座四丁目二番地
 エス・エイチ・ウエンライト
 印刷者 東京市京橋區新湊町四丁目一番地
 木藤彦三郎
 印刷所 東京市京橋區新湊町四丁目一番地
 三豊社印刷所

柘榴の半片
 定價金貳拾錢

□ 賀川 豊彦 著作 目 録

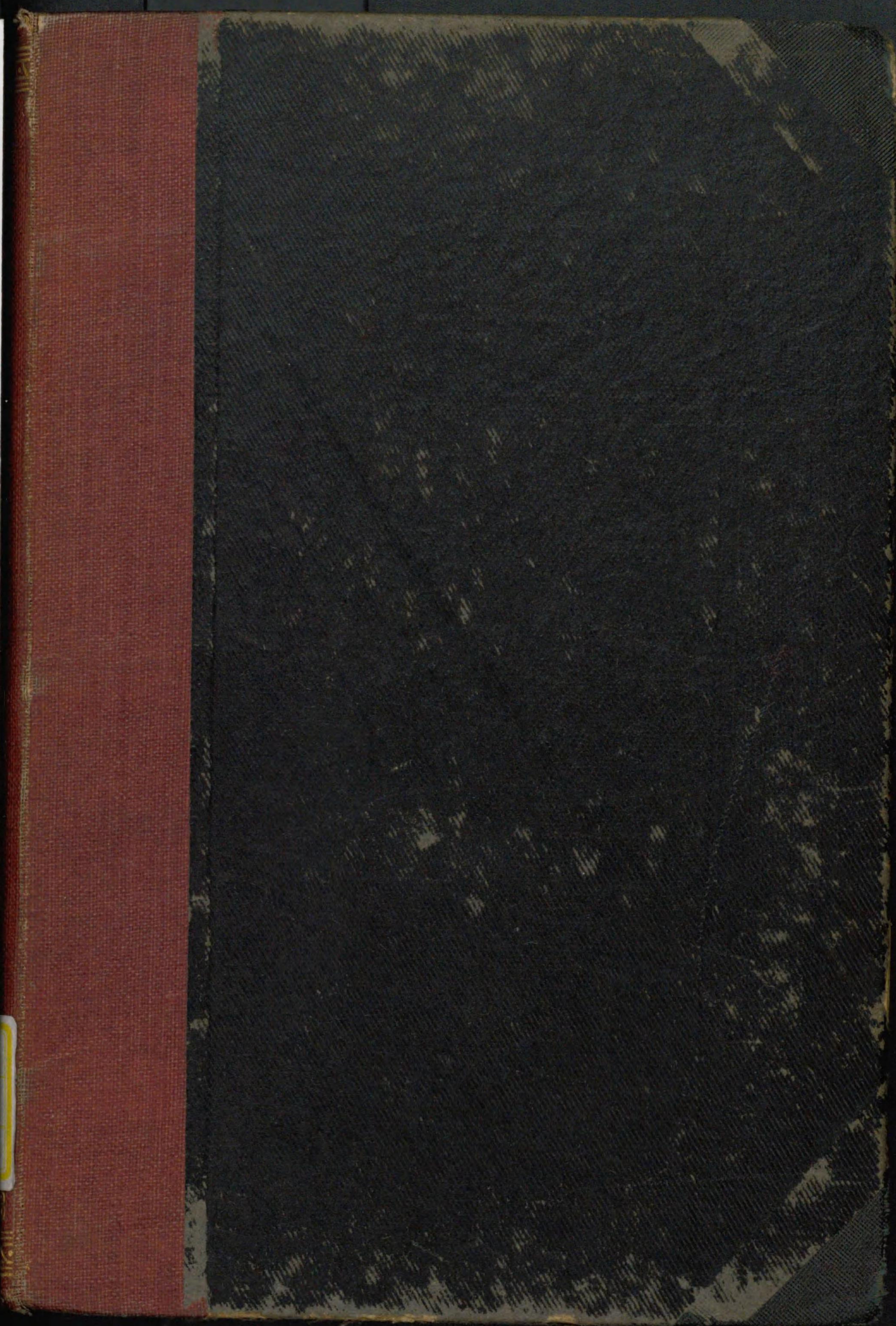
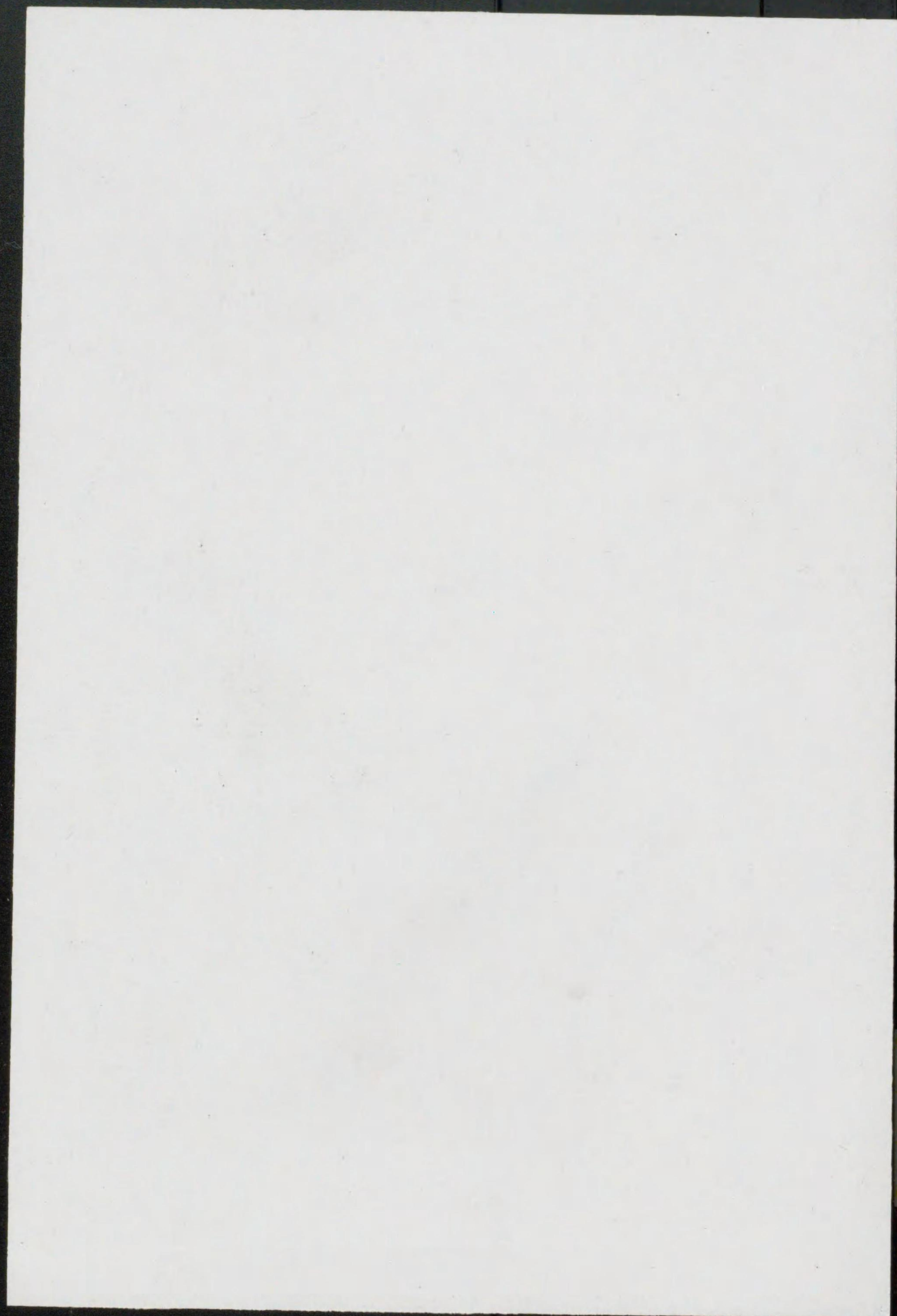
| | | | | | |
|-------------|------|---------------|------|-----------------|------|
| 基督傳論争史 | 絶版 | 神による解放 | ●三五 | 暗中隻語 | 二・三〇 |
| 貧民心理の研究 | 絶版 | 神の懐にあるもの | 一・二〇 | 死線を越えて (小説) | 一・〇〇 |
| 精神運動と社會運動 | 絶版 | 神との對座 | 一・二〇 | 太陽を射るもの (小説) | 一・〇〇 |
| 人間苦と人間建築 | 絶版 | 神による信仰 | ●五〇 | 壁の聲きく時 (小説) | 一・〇〇 |
| 主觀經濟の原理 | 絶版 | 生命宗教と生命藝術 | 二・五〇 | 南風に競ふもの (小説) | 一・四〇 |
| 日曜學校教授法 | 絶版 | 人間として見たる使徒パウロ | ●二〇〇 | 傾ける大地 (小説) | 一・五〇 |
| 勞働者崇拜論 | 發賣禁止 | 苦難に對する態度 | ●三五 | 空中 征 服 (小説) | 一・〇〇 |
| 涙の二等分 (詩集) | 絶版 | 殘されたる刺 | ●二〇 | 聖淨と歡喜 | ●五〇 |
| イエスと自然の默示 | 絶版 | 福音書に現れたるイエスの姿 | ●六〇 | 殉教の血を承繼ぐもの | ●三〇 |
| 地球を墳墓として | 絶版 | 人類への宣言 | 一・〇〇 | 偶像の支配するところ (小説) | ●一〇〇 |
| 星より星への通路 | 絶版 | 愛の科學 | 三・〇〇 | 神と聖愛の福音 | ●一〇〇 |
| 雷鳥の目醒むる前 | 絶版 | 雲水通路 | 三・〇〇 | 神に就ての瞑想 | ●一〇〇 |
| イエスの宗教とその眞理 | ●三五 | 魂の彫刻 | 一・八〇 | 一粒の麥 (小説) | 一・三〇 |
| イエスと人類愛の内容 | 二・〇〇 | 宗教々育の本質 | ●五〇 | 賀川豊彦集 | 一・〇〇 |
| イエスの内部生活 | ●七〇 | 永遠の乳房 (詩集) | 二・五〇 | 十字架に就ての瞑想 | ●一〇〇 |
| 聖書の社會運動 | ●五〇 | 生存競争の哲學 | 二・〇〇 | 神と永遠への思慕 | ●一〇〇 |
| キリスト一代記 | ●三〇 | 友 情 (童話) | ●六〇 | 盡きざる油壺 | ●一〇〇 |
| キリスト山上の垂訓 | ●三五 | 豫言者エレミヤ (童話) | ●七〇 | 其他小冊子數十種 | ●一〇〇 |
| | | | | 月刊個人雜誌「雲の柱」 | ●一〇〇 |

Handwritten text on a small label in the top left corner of the left page.



Price 20 Sen

603
340

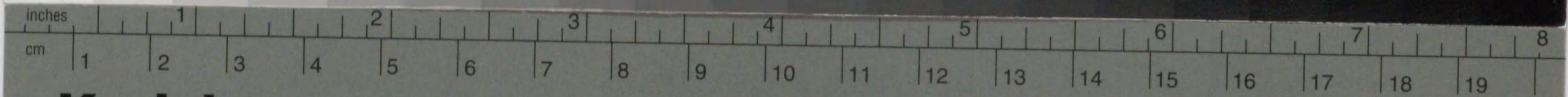


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

